香芝市文化財調査報告書１

奈良県香芝市

高山火葬墓・高山石切場遺跡

—香芝市高山台土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

１９９４

香芝市二上山博物館編

香芝市文化財調査報告書１

奈良県香芝市

高山火葬墓・高山石切場遺跡

—香芝市高山台土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

１９９４

香芝市二上山博物館編

1．高山火葬墓遺構検出状況（北西上から）

2．高山石切場遺跡東側石切遺構検出状況（南東から）

序　　文

香芝市二上山博物館が発足して2年目でようやく「香芝市文化財調査報告書」第1集が刊行できました。博物館は本来の業務として展示や講演会開催等と共に、市内埋蔵文化財の発掘調査を担当しています。

発掘調査の成果については、毎年、調査概報を刊行していますが、それは発掘調査成果のあらすじであって正式な報告書ではありません。今回、報告しますのは市内高山台造成地で検出した奈良時代の火葬墓と古代・中世の石切場跡です。

二上山麓の古代火葬墓は、国宝威奈大村墓骨蔵器が著名です。以前から、高級官僚・威奈大村がなぜ香芝市内に葬られたのかは謎でした。今回、ほぼ同じ地域から後続する時期の火葬墓が検出されたことによって、飛鳥・奈良時代の二上山麓の重要性が改めて問われることになりました。その上、高山火葬墓は一つの木櫃の中に可能性として三体の遺骨が収められている本邦初の事例です。一部の階層に限られていた奈良時代火葬墓の中に、従来の予測をこえた実例を加えることになりました。

古代・中世の石切場跡も圧巻です。丘陵斜面に100余ヶ所の石切痕跡が密集していました。調査中は、同時に出土した五輪塔等から中世の石切場跡と考えていましたが、報告書の作成のための調査研究を進めて行くうちに、古墳時代後期、6世紀の組合式石棺材を切り出した可能性が出て来ました。石材の大きさからの推定であって、決定的ではありませんが、もしそうであれば、きわめて珍しい発見と言えます。

香芝市高山台土地区画整理事業組合をはじめ、多くの方々の御協力によって香芝市内の重要な文化財の一端をご報告できることを感謝し、ご挨拶とさせて頂きます。

平成6年3月

香芝市二上山博物館
館長　石野　博信

例　　言

1．本書は平成５年度から平成６年度の両年度にかけて、奈良県香芝市教育委員会（香芝市二上山博物館）が奈良県香芝市穴虫2,000番地外で実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．調査は、香芝市高山台土地区画整理組合による宅地造成工事に伴う土地区画整理事業を契機として発掘調査の委託を受けた香芝市教育委員会が平成５年度から平成６年度の埋蔵文化財発掘調査受託事業として実施した。

　なお、同組合代表萬慶芳貞氏をはじめ、事業関係者の方々には調査とその後の火葬墓遺構の切り取り保存に際して御理解と御協力を頂いた。

3．発掘調査期間及び調査面積は下記のとおりである。

　高山火葬墓：平成６年１月19日～同年５月30日　　調査面積　3,000㎡

　高山石切場：平成６年１月19日～同年７月24日　　調査面積　　800㎡

4．調査は、下記の組織で実施した。

(1)　現地調査

〔調 査 員〕山下隆次、下大迫幹洋（両者とも香芝市二上山博物館学芸員）

高山火葬墓　　試掘調査：山下隆次

　　本 調 査：下大迫幹洋

高山石切場　　試掘調査：山下隆次

　　本 調 査：山下隆次、下大迫幹洋。

　　なお、石切場全体の平面図の作成はラジコンヘリコプターによる航空写真測量で行い、平面図全体の修成や細部の石切遺構の平面図は下大迫が統括作成した。

〔作 業 員〕古山亨、佐藤武文、藤田一夫、藤田純次、堀川四郎、森統、山野恵三、吉岡藤雄

〔補 助 員〕井上克子、蒲生玲子、古山早苗、島田良子、高井美智子、田中久美子、前川利江、山口剛（奈良大学学生）

(2)　事　　務

香芝市教育委員会事務局　社会教育課　二上山博物館（館長　石野博信）

5．本書の挿図の座標値は国土座標第Ⅵ座標系による。また、標高は海抜高で示している。

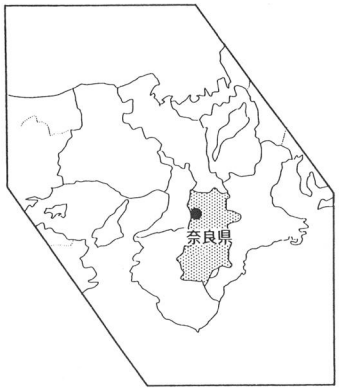
6．土器の型式名や編年時期等については奈良国立文化財研究所の刊行物に準拠している。

7．両遺跡を通して挿図の遺物の番号は連番で付し、それぞれ図版の遺物番号に対応する。

8．本報告書作成に際して遺物の実測や掲載図面の作成、遺構や遺物の写真撮影は下大迫が行い、遺構や遺物のトレース作業は一部田中久美子氏の協力を得た。

9．本書の執筆編集は、下大迫が行った。

10．発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録一切及び出土遺物は、香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山１丁目17－17）所轄のもとで保管している。



香　芝　市

〔市庁所在地〕　〒639-02 奈良県香芝市本町1397
〔総　面　積〕　2,423 ㎢
〔標　　高〕　40.0～269.7 m
〔市制施行〕　平成３年10月
〔人　　口〕　55,400人（平成６年３月現在）
〔文化財担当課〕　香芝市教育委員会事務局
社会教育課　二上山博物館
〒639-02 香芝市藤山１丁目17-17
（ふたかみ文化センター１階）

本 文 目 次

Ⅰ　調査の契機と経過 …… 1
　1．調査の契機 …… 1
　2．調査の経過 …… 2
Ⅱ　位置と環境 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的環境 …… 3
Ⅲ　高山火葬墓の調査 …… 9
　1．遺跡の立地 …… 9
　2．調査の経緯 …… 10
　3．遺構の概要 …… 13
　　（1）火葬墓の構造 …… 13
　　（2）墓壙等の埋葬施設 …… 13
　　（3）墓壙の堆積土層 …… 13
　　（4）木櫃の埋納状況 …… 14
　　（5）木櫃の構造 …… 14
　　（6）火葬骨の埋納状況 …… 14
　　（7）遺物の出土状況 …… 14
　4．出土遺物の概要 …… 20
　　（1）火葬墓出土土器 …… 20
　　（2）銙帯金具（巡方・丸鞆） …… 22
　　（3）鉄片 …… 22
　　（4）銭貨 …… 24
　　（5）木製品（木櫃片・用途不明木片） …… 25
　　（6）その他の出土遺物（銅鈴・土製品） …… 26
　5．考察 …… 27
Ⅳ　高山石切場遺跡の調査 …… 29
　1．遺跡の立地 …… 29
　2．調査の経緯 …… 30
　3．遺構の概要 …… 30
　4．出土遺物の概要 …… 41
　　（1）土器 …… 41
　　（2）鉄斧 …… 41
　　（3）石製品 …… 43
　5．考察 …… 48
Ⅴ　まとめ …… 50

図　目　次

図１　調査地位置図（Ｓ＝１／20,000）…… 1
図２　調査区配置図（Ｓ＝１／6,000）…… 2
図３　高山火葬墓・高山石切場遺跡の周辺遺跡分布図（Ｓ＝１／50,000）…… 5
図４　二上山地域周辺の古代の火葬墓・寺院分布図（Ｓ＝１／80,000）…… 9
図５　高山火葬墓所在丘陵地形測量図（Ｓ＝１／600）…… 11～12
図６　火葬墓の構造模式図 …… 13
図７　火葬墓遺構検出状況平面図及び遺物接合関係図（Ｓ＝１／10）…… 15～16
図８　火葬墓遺構完掘状況平面図・断面図（Ｓ＝１／10）…… 17～18
図９　火葬墓遺物出土状況模式図 …… 19
図10　火葬墓出土土器実測図（Ｓ＝１／４）…… 20
図11　巡方実測図（Ｓ＝１／２）…… 22
図12　丸鞆実測図（Ｓ＝１／２）…… 22
図13　火葬墓出土鉄片実測図（Ｓ＝１／３）…… 23
図14　火葬墓出土銭貨実測図・拓影 …… 24
図15　木櫃片実測図（Ｓ＝１／３）…… 25
図16　木片実測図（Ｓ＝１／４）…… 25
図17　銅鈴実測図（Ｓ＝１／２）…… 26
図18　土製品実測図（Ｓ＝１／２）…… 26
図19　二上山地域周辺の地質図と石切場遺跡分布図 …… 29
図20　高山石切場遺跡凝灰岩堆積節理図（Ｓ＝１／80）…… 31
図21　高山石切場遺跡板状石材切出遺構平面図（Ｓ＝１／60）…… 33～34
図22　石切遺構タイプ別写真 …… 35
図23　石切場出土土器実測図（Ｓ＝１／２）…… 41
図24　石切場出土鉄斧実測図（Ｓ＝１／３）…… 41
図25　石切場出土石塔実測図（１）（Ｓ＝１／８）…… 43
図26　石切場出土石塔実測図（２）（Ｓ＝１／８）…… 44
図27　石切場出土石塔実測図（３）（Ｓ＝１／８）…… 45
図28　石切場出土石塔実測図（４）（Ｓ＝１／８）…… 46
図29　高山石切場遺跡石切遺構・組合式石棺用石材・基壇用石材等法量相関図 …… 49

巻末別添図

別添図１　高山石切場遺跡遺構平面図（全体図）（Ｓ＝１／80）
別添図２　高山石切場遺跡遺構平面図（Ａタイプ石切遺構集中箇所）（Ｓ＝１／30）

表　目　次

表１　高山石切場遺跡石切遺構計測値一覧表 …… 36～40
表２　高山石切場遺跡出土石塔計測値一覧表 …… 47

図 版 目 次

巻頭カラー図版　１．高山火葬墓遺構検出状況（北西上から）
２．高山石切場遺跡東側石切遺構検出状況（南東から）

図版１　高山火葬墓・高山石切場遺跡
１．高山火葬墓・高山石切場遺跡周辺航空写真（昭和36年撮影）
２．高山火葬墓所在丘陵尾根遠景（南上空から）
３．高山石切場遺跡全景（南上空から）
図版２　高山火葬墓・高山石切場遺跡
１．高山火葬墓調査風景（北西から）
２．高山火葬墓調査風景（南西から）
３．高山石切場遺跡調査風景（南東から）
図版３　高山火葬墓　１．高山火葬墓所在丘陵尾根遠景（北西上空から）
２．高山火葬墓所在丘陵尾根近景（南東上空から）
３．高山火葬墓所在丘陵尾根近景（南西上空から）
図版４　高山火葬墓　１．高山火葬墓遠景（南東から）
２．高山火葬墓所在丘陵から南東方向を望む（北西から）
３．表層除去後及び表層直下土器の検出状況（南東から）
図版５　高山火葬墓　１．表層含有土器除去後及び木櫃上面を被覆する炭層塊の検出状況（南東上から）
２．木櫃上面崩壊土層中含有土器及び骨蔵器・木櫃痕跡の検出状況（南東上から）
３．木櫃上面崩壊土層中含有の丸鞆〔10〕出土状況（北西上から）
図版６　高山火葬墓　１．木櫃上面崩壊土層除去後の検出状況（南東上から）
２．木櫃上面崩壊土層除去後の検出状況（北東から）
３．炭層塊除去後及び墓壙内埋土・木櫃等火葬墓完掘状況（南東から）
図版７　高山火葬墓　１．火葬墓完掘状況（南東から）
２．火葬墓完掘状況（北西上から）
３．火葬墓完掘状況（北東横から）
図版８　高山火葬墓　１．鉄片〔12〕出土状況（東から）
２．鉄片〔14〕出土状況（東から）

3．鉄片〔16〕出土状況（南から）

図版９　高山火葬墓　1．木櫃片〔26・27〕、銭貨１群〔25〕、鉄片〔13〕出土状況（東から）

2．銭貨４群〔17・18・22・23〕、鉄片〔16〕、木片〔28〕出土状況（西から）

3．銭貨３群〔19・20〕、木片〔28〕出土状況（西から）

図版10　高山火葬墓〔遺物〕　１～３、５～８

図版11　高山火葬墓〔遺物〕　９～16

図版12　高山火葬墓〔遺物〕　17～30

図版13　高山石切場遺跡　1．高山石切場遺跡全景（南東上空から）

2．高山石切場遺跡西側（南西上空から）

3．高山石切場遺跡西側（西上空から）

図版14　高山石切場遺跡　1．高山石切場遺跡西側（南から）

2．高山石切場遺跡西側（南西から）

3．高山石切場遺跡西側（南西から）

図版15　高山石切場遺跡　1．高山石切場遺跡西側（南から）

2．高山石切場遺跡西側（南西から）

3．高山石切場遺跡西側（南西から）

図版16　高山石切場遺跡　1．高山石切場遺跡東側（東上空から）

2．高山石切場遺跡東側（南東から）

3．高山石切場遺跡東側（南東から）

図版17　高山石切場遺跡　1．石切遺構No.８（南東から）

2．石切遺構No.29Ａ、No.29Ｂ、No.30（南東から）

3．石切遺構No.31（北東から）

図版18　高山石切場遺跡　1．石切遺構No.37、No.38、No.39（南東から）

2．石切遺構No.37、No.38、No.39（北東から）

3．石切遺構No.37壁面（北東から）

図版19　高山石切場遺跡　1．石切遺構No.42（北東から）

2．石切遺構No.33（南東から）

3．石切遺構No.33（南西から）

図版20　高山石切場遺跡　1．石切遺構No.35（南東から）

2．石切遺構No.45（南東から）

3．石切遺構No.45（北東から）

図版21　高山石切場遺跡　1．石切遺構No.76（北東上から）

2．石切遺構No.76（南西から）

3．石切遺構No.76（東から）

図版22　高山石切場遺跡　1．石切遺構No.１（南東から）

2．石切遺構No.84（北上から）

3．石切遺構№84（西から）
図版23　高山石切場遺跡　1．石切遺構№23（南西上から）
2．石切遺構№68（東から）
3．石切遺構№96、№97（北東上から）
図版24　高山石切場遺跡　1．石切遺構№32（北西から）
2．石切遺構№56（南東から）
3．石切遺構№56壁面（南東から）
図版25　高山石切場遺跡　1．石切遺構№13、№14、№15、№16（南東から）
2．石切遺構№47（南上から）
3．石切遺構№61（南西から）
図版26　高山石切場遺跡〔遺物〕　31～34、36～39、43・44
図版27　高山石切場遺跡〔遺物〕　45～50
図版28　高山石切場遺跡〔遺物〕　51、58～61

本　文

Ⅰ　調査の契機と経過

1．調査の契機

調査は、開発面積10,000㎡を越える土地区画整理事業に伴う宅地造成工事のため、遺跡の有無確認踏査を経て、平成４年８月11日付けで香芝市高山台土地区画整理組合設立準備委員会（香芝市高山台土地区画整理組合）から発掘届出書が提出されたことに起因する。

香芝市教育委員会では、開発事業対象地域が周知の遺跡の範囲内に該当しないものの435,019㎡にも及ぶ大規模開発事業であることや周辺の山中にはサヌカイト製石器の生産遺跡や凝灰岩を切り出した石切場をはじめ、火葬墓等の多種多様の遺跡の存在が予想されることから同組合側と協議のうえ、平成６年１月より現地での発掘調査を実施することとなった。

なお、発掘調査は平成５年度と平成６年度の２年度にまたがることから、事務的には平成５年度と平成６年４月からの埋蔵文化財発掘調査受託事業に分割して実施することとした。

現地調査は面積が非常に大規模、広範囲に及ぶため、開発進度や発掘調査の進行・管理の便宜上、開発区域全体を任意にＡ地区とＢ地区の大きく２地区に分割し、Ａ地区とＢ地区の開発地域山中の尾根筋沿いを中心に遺構や遺物の有無確認のための試掘調査から実施することとした。そして、新たな遺跡の発見如何によって随時調査面積を拡張していくこととした。

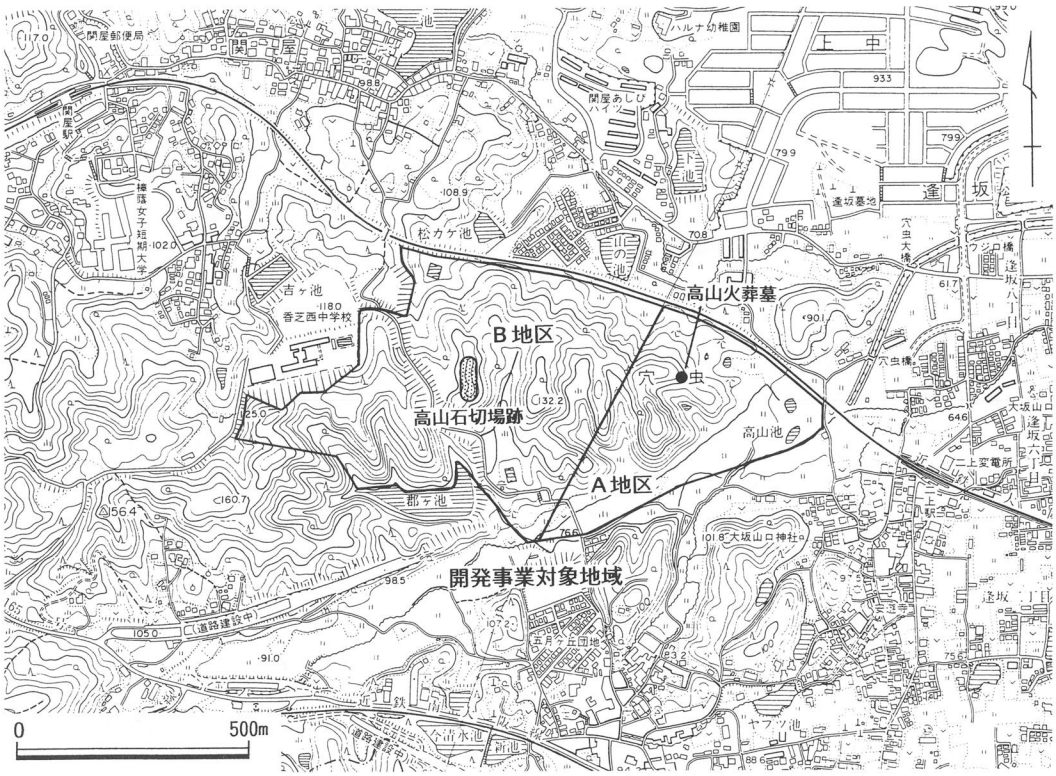


図１　調査地位置図（Ｓ＝1／20,000）

2．調査の経過

開発地域一帯は樹木のうっそうと生い茂った山林であるため、まず、試掘調査予定地域内の雑木林の伐採作業から開始することとした。A地区の尾根については高圧な送電線が付近にあるため危険なことや地形的に重機の進入路の確保が困難であったため、試掘調査は全面人力による表土の掘削作業を、B地区については尾根沿いに重機力によって表土掘削作業を実施することとした。

試掘調査の結果、A地区第2調査区の南東方向に舌状に張り出した丘陵尾根中腹の南東斜面から奈良時代（8世紀）中頃の火葬墓1基を検出した（事業名より高山火葬墓と命名）。また、B地区の第7調査区で、人為的に石材を切り出した痕跡を残す凝灰岩の切り出し遺構の一部を検出したため（事業名より高山石切場遺跡と命名）、両遺跡の所在する第2・7調査区の試掘坑をそのまま拡張して丘陵尾根一帯にわたって本格的な発掘調査を実施することとした。

なお、調査後の処置として香芝市教育委員会では、高山火葬墓については複数の火葬骨を一カ所に納めた全国的にも類例のない極めて貴重な火葬墓であることから、事業者側の御協力により、火葬墓遺構を全面切り取り保存し、将来的に二上山博物館において保管・展示することとなった。

高山台土地区画整理事業に係わる埋蔵文化財の発掘調査総面積は約8000㎡、調査期間は平成6年1月11日から平成6年7月17日まで実働は約72日間を要し、遺物の分布調査・踏査などの予備調査期間も含めて約1年間の歳月を要している。

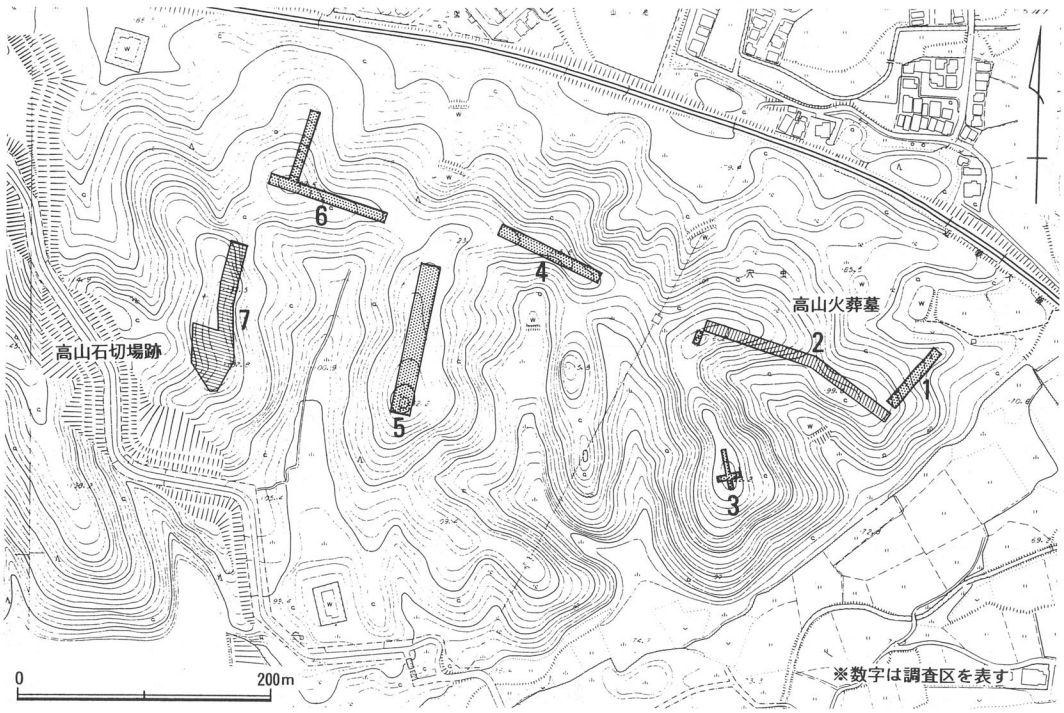


図2　調査区配置図（S＝1／6,000）

Ⅱ　位置と環境

1．地理的環境

香芝市は奈良盆地の西部、金剛葛城山地北端の二上山西麓に位置する。第三紀中新世に火山活動をした標高517.2m（雄岳）の二上山の東部一帯に拡がる扇状地の北部に市の中心部が立地する。

市域は24.23㎡で、概ね、二上山北方の丘陵地域から成る西部の丘陵地域（「西部丘陵」）、大和川の一支流葛下川沿いに形成された沖積低地と二上山麓の緩傾斜扇状地（「二上扇状地」）で構成される中央部の低地（「中央低地部」）、馬見丘陵の南西部に相当する東部の丘陵地域（「東部丘陵」）に概略地形区分される。このうち、開発区域の位置する西部丘陵は南側から二上層群のドンズルボー累層が分布する二上山の北麓裾部、下部大阪層群が堆積する関屋盆地、明神山火山岩で構成される明神山の南麓部に細分される[1)]。

地質的には二上山周辺と香芝市には、基盤である花崗岩の岩盤の上面に二上火山複合体を形成する地層である二上層群と河や湖に堆積した河湖層から成る古大阪層群が複雑に入り組んで分布しており、これらの地層は、大別して花崗岩、溶岩、火砕流及び凝灰岩、河湖層の４つに区分される[2)]。

開発事業対象地域は、ドンズルボー累層中の上部ドンズルボー層や畑火山岩を始め、古大阪層群中の関屋砂層や瑞宝園粘土・礫互層の分布域に該当しており、このうち高山火葬墓は古大阪層群中の関屋砂層上に、高山石切場遺跡はドンズルボー累層中の上部ドンズルボー層上に立地する[3)]。

2．歴史的環境（図３）

二上山はサヌカイトと凝灰岩、金剛砂の３つの石を産出することで知られている。サヌカイトは、数万年前の旧石器時代から２千年前の弥生時代に至るまで石器の原料として用いられ、凝灰岩は、古墳時代の石棺や石槨を始め、古代の寺院や宮殿の基壇等の建築用部材、中世には主に五輪塔等の石塔の部材として使用された。そして、金剛砂は近年まで研磨材の原料として使用されており、二上山の火山活動によってもたらされたこれらの自然の産物は、人類の知恵と技術の進歩とともに巧みに利用されてきた。二上山麓にはこれらの数万年間にも及ぶ人類の生産活動を物語る数多くの遺跡が残されており、多くの文化財が所在する奈良盆地の中でもとりわけ特異な様相を呈している。

以下、高山火葬墓、高山石切場遺跡周辺を中心とした旧石器時代から中世までの香芝市内の主要な遺跡について概観することとする。

旧石器時代　二上山のサヌカイトが利用され始めたのは約２万５千年以上前にさかのぼると推定されている。二上山麓には、現在、70箇所をこえる旧石器時代～弥生時代のサヌカイト散布地が分布しており、近畿地方最大の石材原産地として知られている。旧石器時代の遺跡としては、桜ヶ丘第１地点遺跡[4)]（50）や日本最古のサヌカイト礫の採掘坑が検出された鶴峯荘第１地点遺跡[5)]（48）等近畿地方を代表する石器生産遺跡がある。

縄文時代　旧石器時代から継続して、奈良盆地の中でも早い時期から縄文遺跡が残されており、縄文時代の石器生産遺跡としては、早期の押圧縄文土器片が出土した桜ヶ丘第１地点遺跡[6]（50）が、前期の羽状縄文土器片（北白川下層式土器）が出土した鶴峰荘第２地点遺跡[7]（49）等がある。

平野部の遺跡としては、早期の高山寺式土器が出土した下田東遺跡[8]（21）をはじめ、後期の磨消縄文土器が出土した磯壁遺跡[9]（36）や宮滝式土器が出土した瓦口森田遺跡[10]（24）、晩期の突帯文土器が出土した鎌田遺跡[11]（35）などが知られ、近隣の大規模な集落遺跡として当麻町の竹内遺跡[12]（63）がある。なかでも狐井遺跡（34）第８次調査[13]では縄文時代前期の北白川下層式～中期初頭の大歳山式期の土器片や石鏃、石匙、石錘等の石器類、イノシシやシカ等の獣骨が大量に出土している。

弥生時代　弥生時代は、石剣や石槍を製作したと推定される田尻峠第１・２地点遺跡[14]（45）やシル谷第１地点遺跡[15]（47）などの石器生産遺跡がある。しかし、平野部において、遺構に伴うものとしては藤ノ木丁遺跡第７次調査[16]（23）で土坑から後期の土器が一括出土しているほかは、鎌田遺跡第６次調査[17]や市内数箇所の遺跡で中期～後期の数点の土器片が採集されているのみで、各遺跡の土器の包含量も希少であるが、隣接する上牧町では江戸時代の文化年間に観音山で発見されたと伝えられる小形の袈裟襷文銅鐸[18]（15）が知られる。

古墳時代　市内には約30基の古墳が確認されている。分布域は馬見丘陵南端部と藤山丘陵、志都美丘陵域、狐井台地などに分けられる。そのうち馬見丘陵南端部には中国製の札甲が出土した別所城山第２号墳[19]（31）や別所石塚古墳[20]（32）などの前期古墳が分布しており、狐井台地では古墳時代中期後半の全長140ｍの大型前方後円墳である狐井城山古墳[21]（33）が所在する。藤山丘陵域を中心とする地域では上中ヨロリ第１・２号墳[22]（12）や藤山１・２号墳[23]（17・18）、北今市古墳群[24]（19）等の中期から後期にかけて小規模な古墳や古墳群が形成される。志都美丘陵域では平野車塚古墳[25]（５）など終末期になって古墳の築造が始まる。平野塚穴山古墳[26]（４）は一辺21ｍの方墳である。二上山から産出する凝灰岩製の切石を用いた整備な横口式石槨を有する。一方、二上山雄岳付近では一部に二上山産の凝灰岩製の家形石棺を転用した特異な横口式石槨を有する一辺約7.6ｍの方墳である烏谷口古墳[27]（60）がある。ともに古墳の数が減少する７世紀後半の終末期に築かれた古墳であり、当地域の政治的関係を考察するうえで重要である。

集落遺跡としては、藤山遺跡[28]（16）で古墳時代後期と推定される掘建柱建物跡が数棟検出されているほかは集落遺構は未検出であるが、当麻町域と接する鎌田遺跡第６次調査[29]では潅漑状遺構を伴う流路跡から古墳時代前期～中期の土器とともに大型建物に伴う建築部材が検出されており、付近に掘建柱建物で構成される大規模な集落の拡がりが予想される。

生産遺跡としては、古墳時代中期に至って二上山の産出する凝灰岩は近畿地方を中心に石棺用石材としての利用が始まり、古墳時代か否かは不明確ではあるが、穴虫石切場遺跡[30]（44）やドンズルボー西方の石切場跡[31]（51）、岩屋峠西方の石切場跡[32]（56）など数カ所で凝灰岩を切り出した石切場跡が分布するほか、古墳時代後期の須恵器や奈良時代の瓦を焼成した平野窯跡群[33]（３）がある。

図３　高山火葬墓・高山石切場遺跡の周辺遺跡分布図（Ｓ＝1／50,000）

１．尼寺廃寺跡　２．片岡城跡　３．平野古窯址群　４．平野塚穴山古墳　５．平野車塚古墳　６．木辻城跡　７．今泉古墳　８．送迎山城跡　９．七郷山城跡　10．今泉遺跡　11．ガモ池遺跡　12．上中ヨロリ第１・２号墳　13．山口古墳　14．顕宗陵古墳（陵墓）　15．観音山銅鐸出土地　16．藤山遺跡　17．藤山第１号墳　18．藤山第２号墳　19．北今市古墳群　20．法楽寺山遺跡　21．下田東遺跡　22．今池遺跡　23．藤ノ木丁遺跡　24．瓦口森田遺跡　25．勘平山第１・２号墳　26．長谷山古墳　27．坊主山古墳　28．鈴山城跡（鈴山遺跡）　29．土山古墳　30．別所城山第１号墳　31．別所城山第２号墳　32．別所石塚古墳　33．狐井城山古墳　34．狐井遺跡　35．鎌田遺跡　36．磯壁遺跡　37．岡氏居館跡遺跡　38．「威奈大村」墓誌銘文入金銅製骨蔵器出土想定地　39．ヘモンド塁跡　40．逢坂城跡　41．高山火葬墓　42．高山石切場遺跡　43．穴虫火葬墓(凝灰岩製石櫃出土地)　44．穴虫石切場遺跡(田尻峠北方の石切場跡群)　45．田尻峠第２地点遺跡　46．田尻峠第３地点遺跡　47．シル谷第１地点遺跡　48．鶴峯荘第１地点遺跡　49．鶴峯荘第２地点遺跡　50．桜ヶ丘第１地点遺跡　51．ドンズルボー西方の石切場跡群　52．岡城跡　53．加守廃寺跡　54．加守金銅製骨蔵器出土地　55．二上山城跡　56．岩屋峠西方の石切場跡群　57．岩屋跡　58．鹿谷寺跡　59．万歳山城跡　60．烏谷口古墳　61．石光寺　62．当麻寺　63．竹内遺跡

古代　7世紀以降の古墳以外の遺跡としては、回廊状遺構が検出された奈良時代創建と考えられる尼寺廃寺北遺跡[34]（1）がある。当麻町域では凝灰岩製の石仏や塼仏が発見された石光寺[35]（61）や塔と回廊などが検出された加守寺[36]（53）などの奈良時代の寺院跡が所在するのを始め、二上山麓には凝灰岩の岩肌を彫り込んだ石窟寺院である岩屋跡[37]（57）や鹿谷寺跡[38]（58）がある。

また、二上山麓は火葬墓が集中する地域として知られており、金銅製の骨蔵器に471字の長文の墓誌銘を刻んだ国宝の「威奈大村墓[39]」（38）や家形の凝灰岩製の石櫃を外容器とする奈良時代の穴虫火葬墓[40]（43）のほか、当麻町では金銅製の骨蔵器を有する加守火葬墓[41]（54）などの飛鳥時代〜奈良時代にかけての古代の火葬墓が集中して分布している。

この他、所在場所は全く不明であるが、穴虫の集落の西部には『日本書紀』天武八年十一月条に記された「大坂山」の関の想定地がある[42]。

中世　穴虫や逢坂を中心とした二上山北麓一帯は、大和と河内を結ぶ地理的環境から、穴虫峠を経て河内へ至る太子道や堺街道、田尻峠を経て河内へ至る長尾街道や伊勢街道などの大和と河内を結ぶ主要街道が縦横に交差しており、古代から大和と河内を結ぶ交通の要衝として重要視されてきた。中・近世以降もこの地理・地形的環境条件から、軍事拠点として重要視され、二上山麓の街道筋や集落を見下ろす山中には奈良盆地内でも多数の城郭関連遺構が築造される。

いずれも明確な存続時期や城主、城主の変遷等不明なものが多いが、市内だけでも在地豪族の岡氏の城塁跡である岡城跡[43]（52）をはじめ、北から送迎山城[44]（8）、七郷山城[45]（9）、木辻城跡[46]（6）、逢坂城跡[47]（40）、ヘモンド城跡[48]（39）、鈴山城跡[49]（28）など9箇所が知られており、南方の二上山頂部では二上山城[50]（55）や万歳山城[51]（59）がある。このうち唯一発掘調査が実施された鈴山城跡では、幅約3〜7m、深さ2.8mの断面V字状を呈する14世紀後半の濠跡が検出されている[52]。

註　釈

1）奈良県企画部開発調整課編　1984『土地分類基本調査―奈良、大阪東北部、大阪東南部―』
2）a横山卓雄　1992「二上山はこうしてできた」『よみがえる二上山3つの石』二上山博物館展示解説　香芝市二上山博物館
　b二上山地学研究会　1986「二上層群の原川累層・定ケ城累層の層序とサヌキトイドの活動時期」『地球科学』40－2　地学団体研究会
3）前掲註2b
4）松藤和人　1979『二上山・桜ヶ丘遺跡－第1地点遺跡の発掘調査報告－』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第38冊　奈良県教育委員会・橿原考古学研究所編
5）a奈良県立橿原考古学研究所編　1985『昭和59年度鶴峯荘第1地点遺跡第1次発掘調査概報』香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
　b香芝町教育委員会編　1990『昭和60年度鶴峯荘第1地点遺跡第2次発掘調査概報』香芝町教育委員会
6）前掲註4
7）香芝町教育委員会編　1990『平成元年度鶴峯荘第2地点遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会
8）a小泉俊夫他　1980「押型文土器を出土した香芝町下田東遺跡（一）」『青陵』第46号
　b吉田宇太郎　1929「大和下田村出土の縄文式土器に就いて」『考古学雑誌』第19巻第4号

9）松本俊吉　1956「先史時代の人々」『大和下田村史』下田村役場
10）香芝町教育委員会編　1989『瓦口森田遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会
11）前掲註２ａ
12）松田真一　1989「竹内遺跡」『奈良県遺跡調査概報1988年度』奈良県立橿原考古学研究所
佐々木好直　1990「竹内遺跡」『奈良県遺跡調査概報1989年度』奈良県立橿原考古学研究所
関川尚功　1992「竹内遺跡」『奈良県遺跡調査概報1991年度』奈良県立橿原考古学研究所
13）香芝市教育委員会編　1993「狐井遺跡の調査」『平成５年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
14）香芝町教育委員会編　1989『田尻峠―中和幹線事業にともなう発掘調査概報―』香芝町・香芝町教育委員会
15）奈良県立橿原考古学研究所編　1982「香芝町シル谷第１地点遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
16）香芝市教育委員会編　1994「藤ノ木丁遺跡第７次調査」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報２』香芝市教育委員会
17）香芝市教育委員会編　1992「鎌田遺跡」『平成４年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
18）小泉俊夫　1977「先史時代」『上牧町史』上牧町役場編
19）白石太一郎ほか　1974『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊、奈良県教育委員会
20）前掲註19
21）ａ泉森皎　1976「古墳時代」『香芝町史』香芝町役場
ｂ香芝町教育委員会編　1986『昭和60年度狐井城山古墳外堤第４次調査概報』香芝町教育委員会
22）香芝町教育委員会編　1986『旭ヶ丘Ｉ』香芝町旭ヶ丘土地区画整理事業組合・香芝町教育委員会
23）前掲註21ａ
24）前掲註21ａ
25）泉森皎・久野邦雄　1977『竜田御坊山古墳付平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊、奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編
26）前掲註25
27）佐々木好直・奥田尚　1984「烏谷口古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1983年度』奈良県立橿原考古学研究所
28）香芝町教育委員会編　1991『藤山遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会
29）前掲註16
30）松田真一　1982「穴虫石切場遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1980年度』奈良県立橿原考古学研究所
31）奥田尚・増田一裕　1979「古代の石切場跡その１」『古代学研究』第91号
32）奥田尚・増田一裕　1981「古代の石切場跡その２」『古代学研究』第95号
33）千賀久　1977「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県立橿原考古学研究所
34）保井芳太郎　1932『大和上代寺院志』大和史学会
香芝市教育委員会編　1992『尼寺廃寺北遺跡発掘調査概報』香芝市教育委員会
35）河上邦彦　1992『当麻石光寺と弥勒仏概報』奈良県立橿原考古学研究所・吉川弘文館
36）近江俊秀他　1993「加守寺院跡第１・２次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1992年度』奈良県立橿原考古学研究所
37）堀江門也　1991「岩屋」『図説日本の史跡古代２』同朋舎出版
38）堀江門也　1991「鹿谷寺跡」『図説日本の史跡古代２』同朋舎出版

39）奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編　1979『日本古代の墓誌』
40）網干善教　1959「北葛城郡香芝町穴虫火葬墓」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第12号　奈良県教育委員会
41）嶋田暁　1956「北葛城郡当麻町大字加守金銅骨壺出土地」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第９号　奈良県教育委員会
42）千田稔他　1984「大坂道と大坂山の関の比定試考」『竹内街道（二上山麓の道）奈良県歴史の道調査報告書』奈良県文化財調査報告第43集　奈良県教育委員会
43）村田修三他　1980「奈良県」『日本城郭体系10』新人物往来社
44）前掲註43
45）前掲註43
46）前掲註43
47）ａ前掲註43
ｂ廣瀬常雄　1975『立野城跡―生駒郡三郷町立野所在中世城郭跡の調査概報―』奈良県立橿原考古学研究所
48）前掲註43
49）奈良県立橿原考古学研究所編　1985『昭和59年度鈴山城跡・鈴山遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
50）前掲註43
51）前掲註43
52）前掲註49

Ⅲ　高山火葬墓の調査

1．遺跡の立地（図４・５）

香芝市内をはじめ、隣接する大阪府柏原市や太子町などの二上山麓には古代の火葬墓が集中して分布している。なかでも市内では、金銅製の骨蔵器に707（慶雲４）年の墓誌銘を有する「威奈大村墓[1]」（国宝）が所在するのをはじめ、近隣の大阪府柏原市では「船王後[2]」の墓誌が、太子町では「高屋枚人[3]」や「紀吉継[4]」の墓誌が発見されており、奈良盆地の数ある火葬墓集中地域のなかでも当地域はとくに被葬者を記した墓誌銘を有する火葬墓が集中して分布することが注目される。

図４　二上山地域周辺の古代の火葬墓・寺院分布図（Ｓ＝1／80,000）

高山火葬墓は東方に緩やかに派生する標高97.843m～116.762mの丘陵尾根中腹の南東斜面に立地する。火葬墓の標高は106.900m、丘陵下の水田面からの比高差は約38mをはかり、墓の位置から最高所の尾根上まではさらに約10mの比高差をもっている。

火葬墓の所在する丘陵は全体的に東方に派生する丘陵であるが、丘陵の中央部の中腹付近で東方向から南東方向に緩やかに屈曲しており、火葬墓は当丘陵頂部の最高所には造営されずに、この南東方向に視界の開けた屈曲部の最高所の鞍部に造営されている。

また、火葬墓は太安万侶墓[5)]の立地条件として論議されているような、いわゆる典型的な風水思想にかなった立地条件ではないが、低丘陵上にあっても前方にあたる東側は広く開け、遠方には耳成山を始め、大和三山や奈良盆地を見渡す格好の地に立地しており、往時の奈良時代の都があった奈良盆地北部域の平城京からは南西方向へ約20km離れた地点に位置する。

同丘陵には地形的に見てもこれ以外にも火葬墓や遺骸を火葬した火化遺構等の火葬墓に関連する遺構が存在することが予想されたため、火葬墓の所在する丘陵尾根全域の表土を除去して全面発掘調査を実施したが、火葬墓に関わる遺構等は検出されず、また、近世土器の破片以外に奈良～平安時代に帰属する古代の土器片等の火葬墓に関わる遺構や遺物は出土しなかったことから、複数の火葬墓が存在した可能性は低く、当火葬墓の単独立地であったものと思われる。

2．調査の経緯（図7）

火葬墓は、当初は既に火葬骨を納めた須恵器の骨蔵器やあるいは、封土中に含まれた土器の一部と推定される土師器の破片の他、和同開珎（銭貨2群）や巡方、鉄片などの金属製の遺物が木の根株に絡まって表土中に散乱しているような状況であった。

全体的に火葬墓の東側、とくに丘陵斜面下側の箇所での流失が著しく、表土の腐葉土層除去時には火葬墓遺構の炭層の一部が露呈していたため、内部施設は既に大半は流失・破壊されているものと思われた。従って、火葬墓の発掘調査は当初、墓廣内に残された銭貨等の遺物の採集と遺構の基低部の遺存状況の確認調査に終始するものと思われたが、火葬墓の南東隅側を除いて木櫃内部は木櫃の腐食と土圧による自然崩壊・埋没以外は幸いにも後世の致命的な撹乱は受けておらず、火葬墓の基底部の遺存状態は比較的良好であった。

発掘調査が進展するにつれて決定的な破壊は免れており、しかも木櫃内に2点の骨蔵器と31枚もの銭貨（和同開珎）や5点の鉄片等を納めた極めて特異な火葬墓であることが明らかとなった。

なお、これ以上の調査の進展による火葬墓遺構への損傷が危惧されたため、火葬墓の木櫃底面及び木櫃底面下位の炭層を検出した段階で現地での発掘調査は中止し、その重要性から火葬墓遺構は全面切り取り保存策を講じることになった。そして、木櫃底面より下位の炭層以下の現地では完掘できない箇所については切り取り後、火葬墓遺構の裏面から墓誌等の遺物の有無確認調査を実施したが、新たな銭貨等の埋納遺物は検出されなかった。

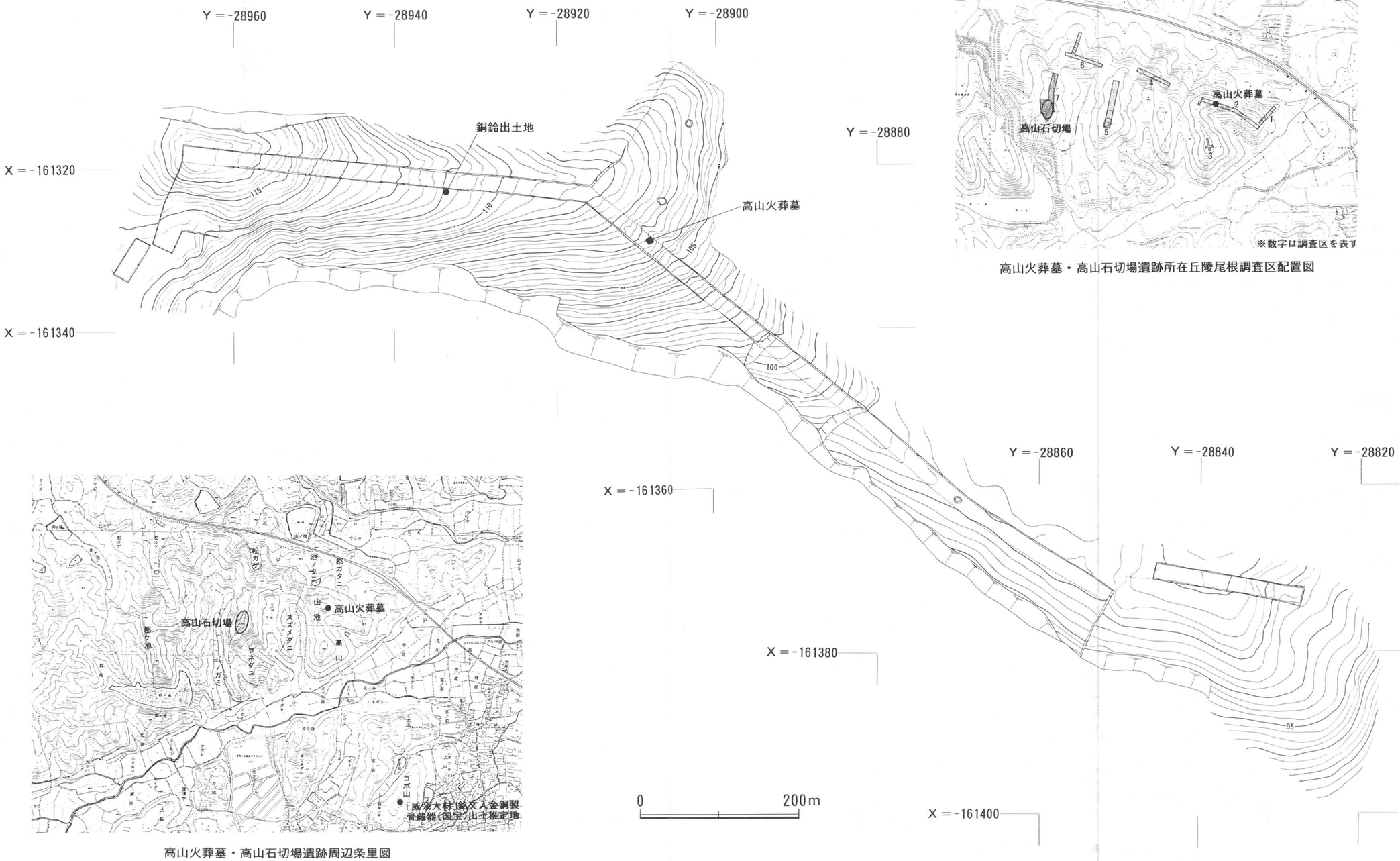


図５　高山火葬墓所在丘陵地形測量図（Ｓ＝1／600）

3．遺構の概要

（1）火葬墓の構造（図6）

火葬墓は南北約105㎝×東西約115㎝、深さ（残存していた検出面から）約17～29㎝の隅丸方形の掘り方の墓壙の中央部に厚さ4㎝にわたって切炭状の木炭を敷き詰め、その上に南北54㎝×東西45.5㎝、高さ15㎝前後、厚さ2㎝前後の木製の箱状容器（木櫃）を外容器として安置し、その中に骨蔵器を納める丁寧な構造の火葬墓で、外容器の木櫃の四方側面は炭で囲繞しないものの木櫃の上面も粉砕した木炭で被覆している。

木櫃の北西隅に火葬骨を納めた土師器と須恵器の壺（骨蔵器）各1個体が正位の状態で密着するように南北方向に直列に並べて安置されていた。また、木櫃内の中央部には直径約20㎝のほぼ円形の範囲に火葬骨粉が密集して分布しており、木櫃内の合計3箇所で火葬骨が納骨されていた。

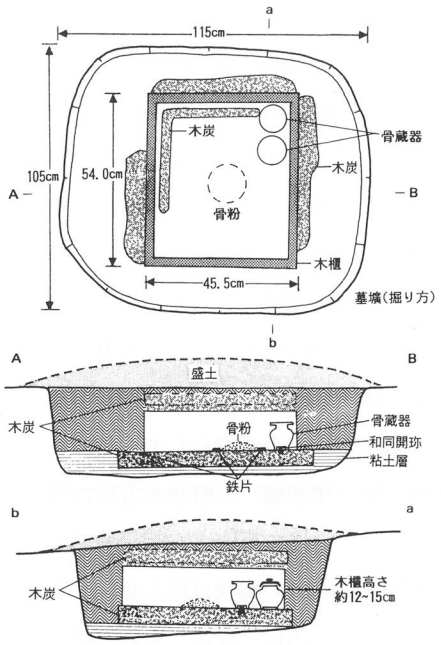


図6　火葬墓の構造模式図

（2）墓壙等の埋葬施設（図8）

墓壙の規模は、削平が著しいため、本来の数値を示すものではないが、現況では南北105㎝、東西115㎝、検出面からの深さは山頂側の北端部では25㎝、谷側の南端部では6㎝を測る。墓壙底面は、地形に沿って山頂側から谷側へ傾斜しており、墓壙掘削当初は水平には掘削されていなかったものと考えられる。また、丘陵上でも傾斜の強い斜面上にあるため、土砂の流失が著しく墓壙の周囲からは外部表象施設としての封土や墳墓と尾根を区切る周溝等は検出することはできなかった。

（3）墓壙内の堆積土層（図8）

火葬墓の所在する丘陵は、多種の地質で構成される関屋砂層上に立地するため、墓壙内の堆積土層についても、個々の層が意図的に選別して埋積されたものか否か判断することは困難であるが、概ね、木櫃の腐食により木櫃上蓋の上面から下方へ崩壊した第1部層〔②～⑤層。炭粒を含有する砂質土層〕、木櫃の周囲を囲繞する第2部層〔⑪～⑯層。地山の砂質・粘質土層〕、木櫃下の炭層〔⑧層〕下と墓壙底面との間の第3部層〔⑨・⑩層。やや粘質土層〕の3つに識別される。

第2・3部層中とも遺物は皆無であったが、第1部層中には木櫃直上にあったと推定される5点の土器や丸鞆が含有されていた。また、第2部層については墓壙掘削時の地山の土砂をそのまま埋め戻したものと思われるが、第3部層については、墓壙底面の比高差を補正するために、おそらく、丘陵上方に分布するやや粘性を帯びた土を採取し、意図的に敷設されたものと考えられる。

（4）木櫃の埋納状況（図８）

墓壙の北側と南側では約13㎝の高低差があることから、高低差を補正するために墓壙底面の中央部に厚さ２～８㎝にわたって粘質土層（第⑨層）が敷かれている。この粘土の上に南北長さ63㎝、東西幅54㎝の範囲に厚さ約４㎝にわたって粉砕した木炭と切炭を横位に敷き、木櫃を安置している。

木櫃の主軸は南北に合致しないが、木櫃の北東隅と南西隅がほぼ磁北ライン上に沿っていることから、木櫃を据える際に南北に合致させるための意図的な作業を行った可能性がある。

木櫃の周囲には太安万侶墓のような木櫃の四方を木炭で敷き詰めて囲繞する一種の木炭槨を形成するのではなく、木櫃の側面には木炭は置かずに墓壙を掘削した際に生じた地山の砂質土層と粘質土層（第⑪～⑯層）の排土で埋め、ほぼ木櫃の上面の高さまで覆い終えた段階で木櫃上蓋の上面を厚さ３～５㎝にわたって木炭で覆い（第⑤層）、同質の地山の土（第②～④層）で埋めている。

（5）木櫃の構造（図８）

木櫃の断片２点が遺存していたのみで全容は不明であるが、木櫃が腐朽して土に置換した暗茶色砂質土層（第⑥層）の痕跡が方形に残っており、木櫃の外形規模は南北約54㎝、東西約45.5㎝、厚さ約２㎝、木櫃の高さは２点の骨蔵器の器高から判断して15㎝前後と推定される。墓壙内及び木櫃の四隅から釘状の遺物は出土せず、また、釘等の金属製遺物に伴う錆の集積層は全く確認されなかったことから、四辺（身部）を釘で留めない、組合式か刳抜式の木櫃であったことが推定される。

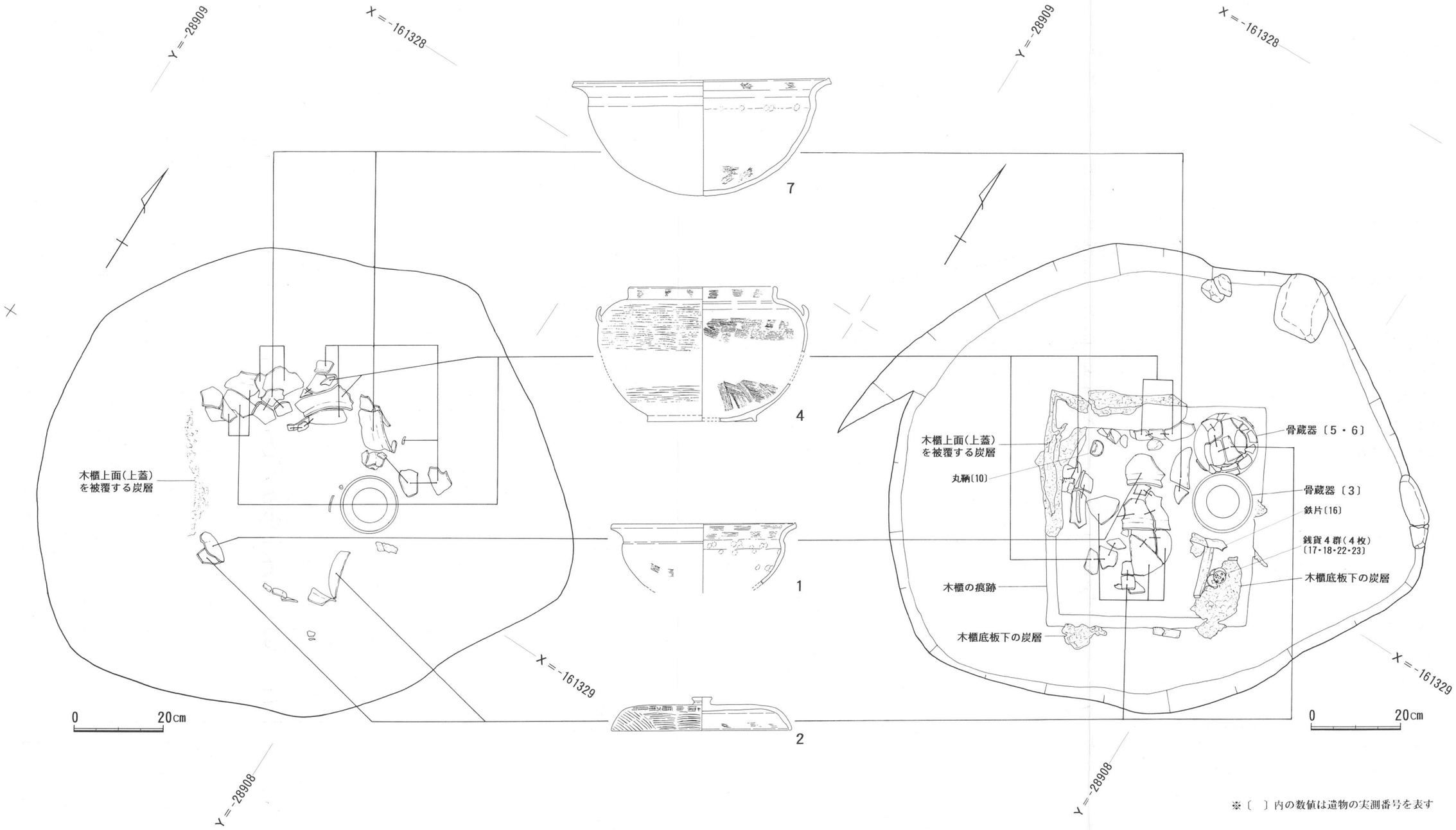
（6）火葬骨の埋納状況（図８）

木櫃の北側隅に火葬骨を納めた土師器有蓋壺〔５・６〕とその南東側に須恵器壺〔３〕１個体がそれぞれ、正位の状態で密着するように南北方向に直列に並べて安置されていた。また、木櫃内部底面の中央部には直径約20㎝の範囲に細かな火葬骨粉が楕円形状に押しつぶされた状態で密集しており、木櫃中には合計３箇所で火葬骨が埋葬・納骨されていた。なお、中央部に分布する骨粉については、木櫃の崩壊と圧着により、調査時点で骨粉を納める木製の曲物状容器等の存在は確認できなかったが、布等の収納袋や曲物状の木製容器内に納められていた可能性も考えられる。

（7）遺物の出土状況（図７・８・９）

火葬墓からは骨蔵器２点と土器５点のほか、銭貨31枚や鉄片５点、巡方・丸鞆等の２点の銙帯金具が出土している。個々の出土遺物の詳細については後章で詳述することとするが、遺物の出土位置としては、大別して①木櫃の外の木櫃上蓋の直上や埋土層中にあるもの。②木櫃の外の木櫃底板直下にあるもの。③木櫃内（木櫃底板の直上）にあるものの３者に識別・分離される。

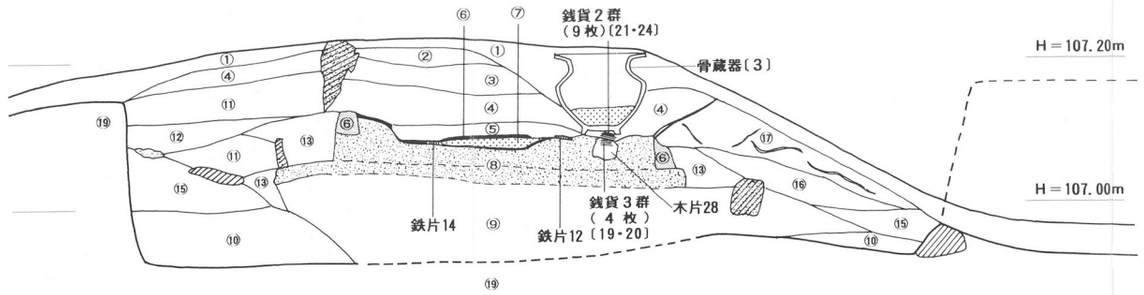
このうち、遊離品を除き出土位置の明確なものとしては、丸鞆や５点の土器は木櫃外の木櫃上蓋上面の埋土層中であったが、とくに、銭貨と鉄片については、木櫃内（底板の直上）と木櫃外（底板の直下）、また、骨蔵器の底面や曲物状の収納容器が推定される中央部の骨粉分布域の周囲等同種の遺物でも出土箇所や位置が区別されており、木櫃の内か外、火葬骨粉に密着するか否か等火葬墓遺構の中の埋納箇所や位置により等様々な呪術的な意味が付与されているものと考えられる。

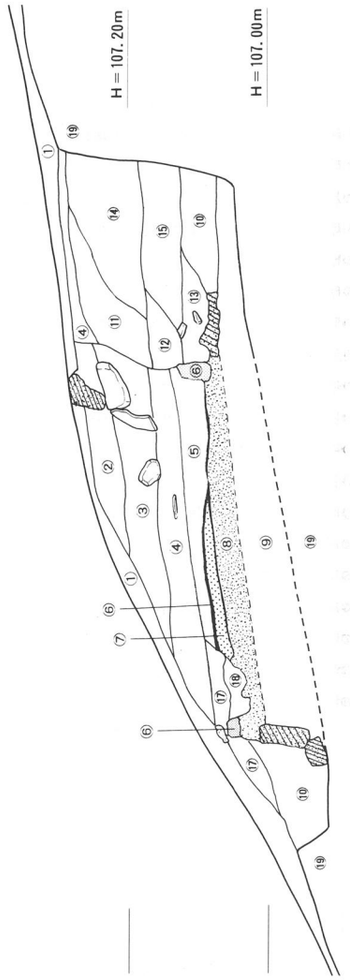


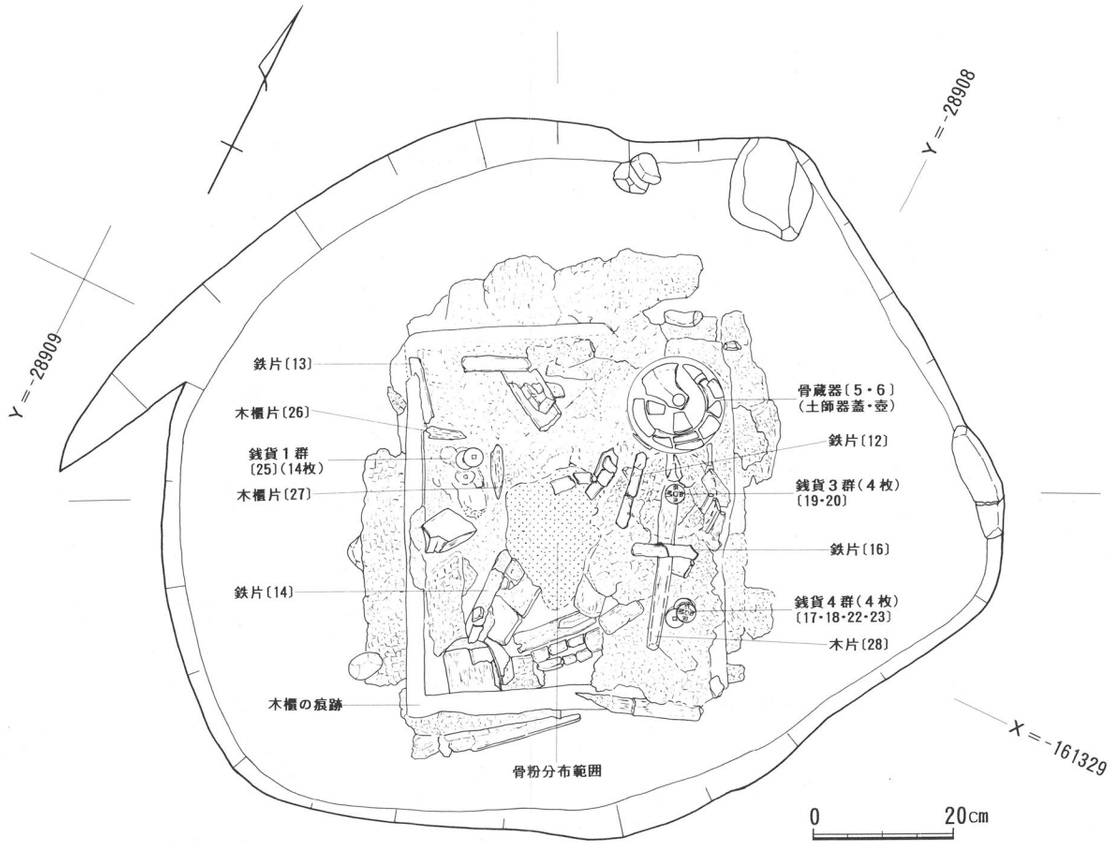
表層除去後及び表層直下の土器等検出状況平面図（図版４－３に対応）

木櫃上面崩壊土層中含有土器及び骨蔵器・木櫃痕跡等検出状況平面図（図版５－２に対応）

図７　火葬墓遺構検出状況平面図及び遺物接合関係図（Ｓ＝1／10）







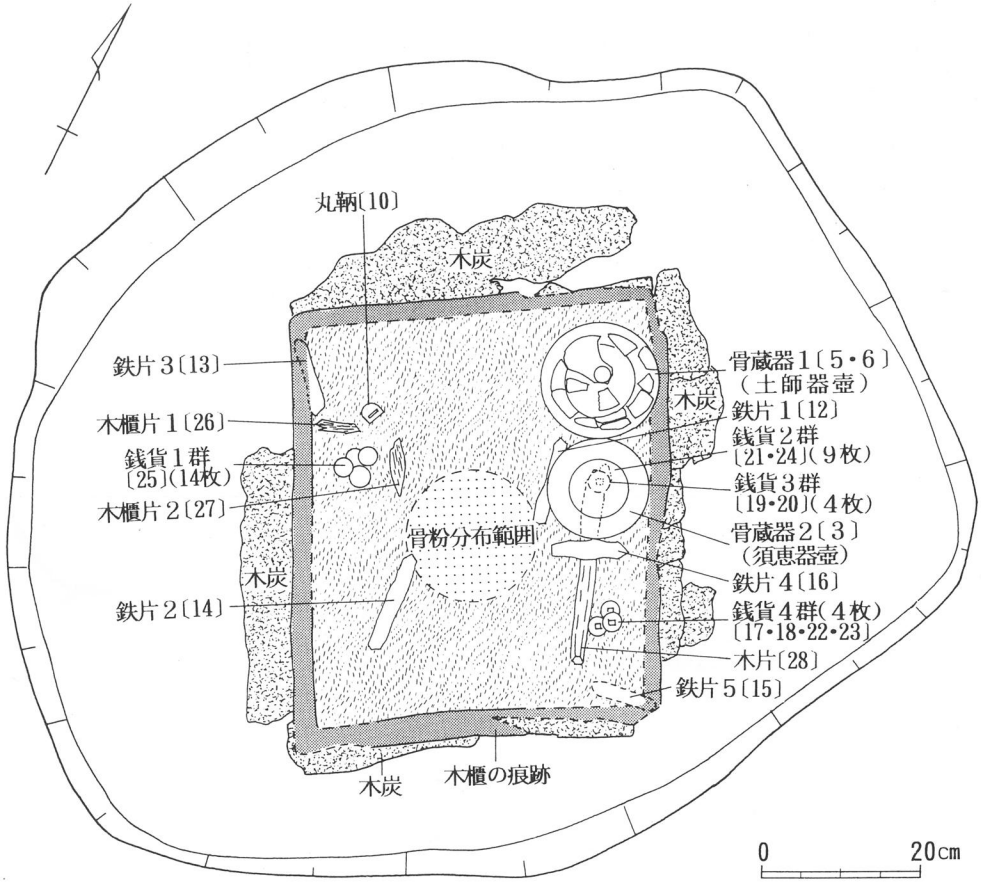
火葬墓完掘状況（図版７－１に対応）

①暗茶色腐葉土層　（現代表土。腐葉土層）
②暗灰褐色砂質土層（木炭混じり。土器含有）
③灰褐色砂質土層　（木炭の砕粉混じり。土器含有）
④暗灰色砂質土層　（⑤の木炭の影響化層。土器・丸鞆含有）
⑤暗灰色砂質土層　（木炭の砕粉を普遍的に含む。土器含有）
⑥暗茶色砂質土層　（木櫃の腐食土層。やや粘質）
⑦暗灰茶色砂質土層（骨粉含有層。やや粘質）
⑧炭層　（炭塊や砕粉状の木炭を含む）
⑨明灰褐色粘質土層（よく締まる）
⑩灰褐色粘質土層　（炭粒混じり。やや軟質）
⑪明灰褐色砂質土層（やや軟質）
⑫黄褐色砂質土層　（微砂～細砂層）
⑬暗褐色砂質土層　（微砂～細砂層）
⑭灰褐色砂質土層　（⑪に比してやや粘質）
⑮明灰褐色砂質土層（やや粘質）
⑯灰褐色砂質土層　（やや粘質）
⑰暗灰褐色砂質土層（炭粒混じり。流失土層）
⑱暗灰褐色砂質土層（⑰に比してやや粘質）
⑲明灰褐色砂質土層（地山）

第１部層
第３部層
第２部層

※〔　〕内の数値は遺物の実測番号を表す

図８　火葬墓遺構完掘状況平面図・断面図（Ｓ＝1／10）



※〔　〕内の数値は遺物の実測番号を表す

図９　火葬墓遺物出土状況模式図

①木櫃の外の木櫃の直上や木櫃上面の埋土層にあるもの。

丸鞆（表裏金具一対。）〔10〕（木櫃上面の埋土層中から出土。）、巡方〔９〕？（推定出土位置。表層からの採集遺物。）、土器５個体（土師器蓋〔２〕、土師器壷〔４〕、土師器鍋〔１〕、土師器鍋〔７〕、土師器皿〔８〕）

②木櫃の外の木櫃の底板直下にあるもの。

銭貨３群〔19・20〕（４枚）？（推定出土位置。）、鉄片３〔13〕、鉄片５〔15〕？（推定出土位置。表層からの採集遺物。）、木片〔28〕？（先端の節目上に銭貨３群が密着する。）

③木櫃内（木櫃底板の直上）にあるもの。

骨蔵器１〔５・６〕、骨蔵器２〔３〕、銭貨１群〔25〕(14枚)、銭貨２群〔21・24〕（９枚）、銭貨４群〔17・18・22・23〕（４枚）、鉄片１〔12〕、鉄片２〔14〕、鉄片４〔16〕（原位置から遊離している可能性がある。）

※〔　〕内の番号は本文挿図の遺物番号に対応する。

4．出土遺物の概要

火葬墓からは計７個体の土器をはじめ、巡方表金具１点や丸鞆表裏金具１対、銭貨（和同開珎等）31枚、鉄製品５点、木櫃の断片２点等が出土している。以下、個々の出土遺物の概要について記す。

（１）火葬墓出土土器（図10・図版10～12）

火葬墓からは、火葬骨を埋納した須恵器壷と土師器有蓋壷の２点の骨蔵器以外に土師器鍋２点、土師器壺・杯蓋・皿各１点の計５個体の多器種の土器が出土しており、全て図示することとする。

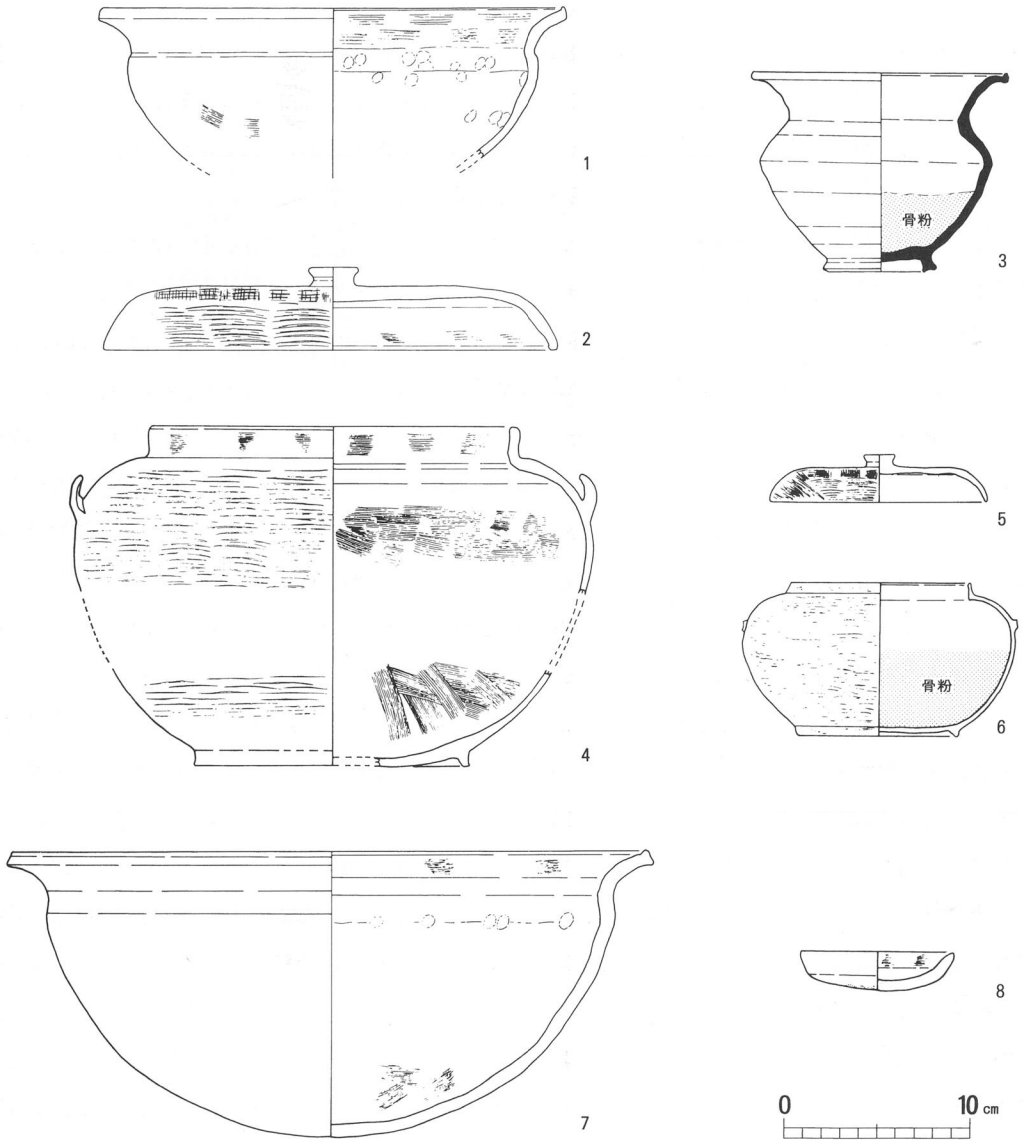


図10　火葬墓出土土器実測図（Ｓ＝1／4）

1は土師器鍋Aである。器高8㎝（残存値）、口径24.6㎝（復元値）を測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ調整の痕跡を残す。口縁部と体部内面には成形時の指頭圧痕を明瞭に残す。

2は土師器蓋である。器高4.4㎝、口径24.0㎝を測る。内面はヨコナデ、外面は丁寧なミガキ調整が施される。赤褐色を呈し、胎土は精良である。4の壺Aの蓋と思われる。

3は須恵器壷Hである。器高10.7㎝、口径13.4㎝、体部径は12.3㎝を測り、口縁部径が体部径を凌駕する。口縁部は大きく外反し、口唇部は上方にややとがりぎみにつまみ上げられる。内面全体及び体部外面上位はロクロナデ、体部外面下位から底部にはロクロケズリが施される。体部内面約1／2には火葬骨粉が納骨されており、6の土師器壺Aと密着するように安置されていた。

4は土師器壷Aである。器高（復元値）18㎝、口径19.8㎝を測る。肩の張った胴部と短く立ち上げた口縁部から成り、肩部に上方に強く折り曲げた三角形状の把手を持つ。口縁部内外面ともヨコナデ調整、体部から底部外面は丁寧なヘラミガキ、体部から底部内面は丁寧なハケ調整が施される。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径からみて2が蓋と思われる。

5は6の土師器壷Aの蓋である。器高2.6㎝、口径11.6㎝を測り、赤褐色を呈する精良品である。内面はヨコナデ、外面は全体的に丁寧なヘラミガキ調整が施される。

6は土師器壷Aである。器高8.1㎝、口径9.6㎝、体部径は14.6㎝を測る。肩の張った体部と短く立ち上げた口縁部から成り、肩部には三角形状の把手を、底部には短い高台を付す。器表は丁寧なヘラミガキ調整が施されており、赤褐色を呈する精良品である。内面約1／2には火葬骨粉が納骨されている。完形品ではあるが、3の須恵器壺に密着させるためか？、あるいは器自体に明器的な意味合いをもたせるためであるのか否かは不明であるが、双方の把手は欠損しており、双方の把手基部の主軸が南北に合致するように木櫃北東隅の3の須恵器壺と密着するように安置されていた。

7は土師器鍋Aである。器高15.1㎝、口径34.5㎝を測る。内面はハケ調整の痕跡を残すが、外面調整は器表面剥落のため不明である。体部と口縁部の接合部は成形時の指頭圧痕を明瞭に残す。

8は土師器皿Cである。器高2㎝、口径8.2㎝の小型の皿で、口縁部はわずかに外反する。口縁部及び底面内外面ともヨコナデ調整である。とくに、口縁部は残存率は悪く、約5／6が欠失する。遺物の出土位置は、前述のとおり、墓壙内の埋土の堆積状況や土器の接合状況等から表層で採集した8や骨蔵器の3・5・6を除いてその他の土器はすべて木櫃上蓋の埋積土層中（第②～④層）から出土している。土器の内訳は、土師器皿1点を除いて土師器鍋2点、土師器壺1点の比較的容量の大きい3点の土器から成っており、茶毘の際の火葬骨や火葬灰を墓所まで運ぶための収納容器として使用されていた可能性も考えられる。また、土器類は、後世の削平によって流失したのか、埋土内に完形の状態で納められていたか否かは不明であるが、いずれも復元率は全容の約1／3程度に止まることから木櫃上面に幾分か土を盛り上げた段階、すなわち、一連の葬送過程の最後に儀礼の中で役割を終えた土器を破壊するという何らかの墓上祭祀が行われた可能性も考えられる。

これらの土器は、いずれも平城京土器編年でⅢ期の様相を示しており、8世紀中頃に比定される。

（2）銙帯金具（巡方、丸鞆）（図11・12、図版11）

【巡方】（図11・図版11）

9は巡方の表金具である。正方形を呈し、縦3.0㎝、横3.3㎝、重さ13.0ｇを測る。下辺に沿って縦0.6㎝、幅1.8㎝の長方形状の透孔があく。高さは0.6㎝、金具の上面は縦2.7㎝、横2.8㎝のほぼ正方形の面を作り出す。

内面は、四隅に長さ0.9㎝、径0.9㎝の鋲足を鋳出すが腐蝕のため4足の鋲足は基部から欠失しており、周縁も大きく欠損する。

金具表裏面に黒漆の塗膜痕跡や焼痕跡は看取されないが、表裏に木櫃の木質の繊維痕が付着する。地表面の腐葉土中からの遊離品であるため、明確な出土位置は不明である。

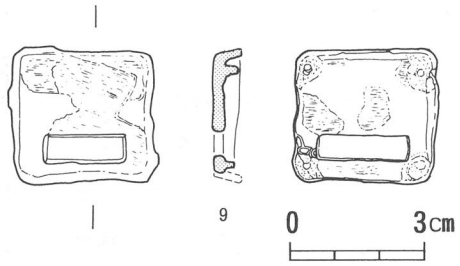


図11　巡方実測図（S＝1／2）

【丸鞆】（図12・図版11）

10は丸鞆の表金具である。縦2.2㎝、横3.1㎝、重さは10.32ｇを測り、下辺に沿って縦0.5㎝、幅1.5㎝の長方形状の透孔があく。内面の透孔の四隅に長さ0.7㎝、径0.15㎝の鋲足を鋳出す。

11は丸鞆の裏金具で、縦1.3㎝、横2.3㎝、厚さ0.1㎝、重さ0.7ｇを測り、中央に径0.1㎝の孔が穿たれている。下半に幅1.8㎝の透孔があくが、腐蝕により周縁や透孔の下辺は欠失する。

表裏金具とも木櫃西側隅の木櫃の腐食土層上面の崩壊土層中から一対が装着された状態で出土しており、骨蔵器や他の遺物とは別に木櫃内には納められずに木櫃外の木櫃上蓋直上に置かれていたものと思われる。

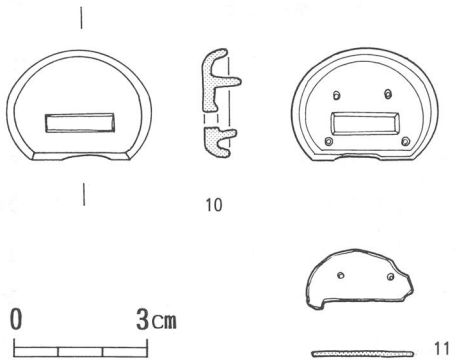


図12　丸鞆実測図（S＝1／2）

（3）鉄片（図13・図版11）

12は残存長11.8㎝、幅1.6㎝、厚さ1.8㎜、重さ15.5ｇを測る。一方の端部は平坦で他方の端部は刃の無いナイフ状を呈する。上面に細かな木櫃木質の繊維痕が付着する。木櫃の中央部より西側付近から鉄片14と平行して骨粉分布域を囲繞するように主軸を南北方向に向けた状態で出土した。

13は残存長12.2㎝、幅1.6㎝、厚さ0.1～0.15㎝、重さ12.35ｇを測る。一方の端部は短冊状を呈し、他方の端部の上面には幅約0.3㎝の2条の打刻線が看取される。上下面とも木櫃の木質片が付着する。木櫃の北西隅枠下の底面から木櫃枠と平行に主軸を北西方向に向けた状態で出土した。

14は残存長12.5㎝、幅1.7㎝、厚さ1.8㎜、重さ13.6ｇを測る。上面には木櫃の木質片が付着する。木櫃の中央部より南側付近から鉄片12と平行して主軸を南北方向に向けた状態で出土した。

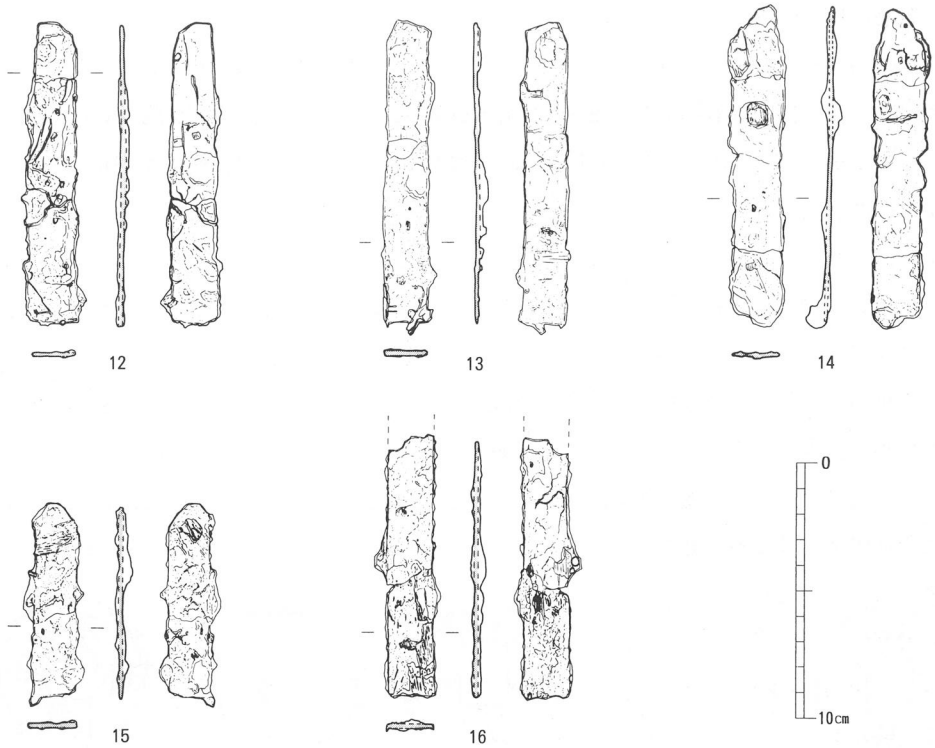


図13　火葬墓出土鉄片実測図（S＝1／3）

15は残存長7.9cm、幅1.6cm、厚さ３mm、重さ9.11ｇを測る。一方の端部はやや丸みを帯びた円頂状を成す。他の鉄片に比して約１／３を欠失しており、上下両面に木櫃の木質の繊維痕が付着する。地表面の腐葉土層中からの遊離品であるため原位置は不明であるが、木櫃の南東隅底面に黄色の鉄錆の集積・沈殿層がみられることから、原位置は木櫃の南東隅付近にあったことが推定される。

16は残存長10.2cm、幅1.8cm、厚さ２mm、重さ12.1ｇを測る。一方の端部は平坦で、他方の端部は欠損しており、上下面とも木櫃の木質の繊維痕が付着している。用途不明木片（図16－28）の上面から北東から南西方向を主軸にした状態で出土したが、この鉄片については木櫃崩壊の際に土圧によって南側から北側へずれ落ちてきたものと考えられ、原位置から遊離している可能性がある。

鉄片の平均値は幅1.6cm、厚さ1.8mm、重さ15.5ｇを測り、全体的な特徴として一方の端部はやや丸みを帯びた短冊状を呈する。いずれも鉄錆の進行が著しく被熱しているか否かは不明である。

火葬墓から出土する同種の鉄板として全国で34遺跡、約43点が報告されている[6]が、同一の火葬墓遺構の中から５点以上の複数の鉄片が出土する事例は無く、当火葬墓が最多である。この種の鉄片については、出土状況等から地鎮や買地券、墓誌的なものなど様々な用途が考察されているが、とくに、当火葬墓においては同種の鉄片でも外容器の木櫃の内外で出土箇所や位置が区別されており、造墓や葬送儀礼の過程の中で様々な意味合いを付与して埋納された遺物であることが推定される。

（4）**銭貨**（図14・図版12－17～25）

火葬墓からは、１枚ずつ単体で出土したものはなく、木櫃西側の底板上から指銭状の状態で14枚（銭貨１群。うち２枚は痕跡のみで原型を保たない。）〔25〕、須恵器壺〔３〕底部外面に接して９枚（銭貨２群）〔21・24〕、須恵器壺下の木片〔28〕端部の節目上から４枚（銭貨３群）〔19・20〕、木櫃東側の木櫃底板上から４枚（銭貨４群）〔17・18・22・23〕の４群に分かれて合計31枚にも及ぶ多量の銭貨が密着して出土している。銭貨の内訳は、銭貨１群〔25〕と銭貨２群〔24〕、銭貨３群〔19〕は密着して銭文が確認できないため、全てが和同開珎か否かは未確認であるが、Ｘ線透過撮影の結果では、他の銭種が混入している可能性は低く、全てが和同開珎と推定される。

計測可能な完形品の銭貨１枚あたりの平均重量は、2.74ｇ、径2.46㎝を測る。全体的に錆化が進み遺存状態はあまり良くないが、総じて鋳上がりが良く、画線も鮮明な銭文をもつものが多い。すべて「開」字の門構えの上端が隷書風に開いた「隷開和同」（新和同）に属するもので、いずれの銭貨も火熱を受けた痕跡は認められなかったことから茶毘以降に納められたものと考えられる。

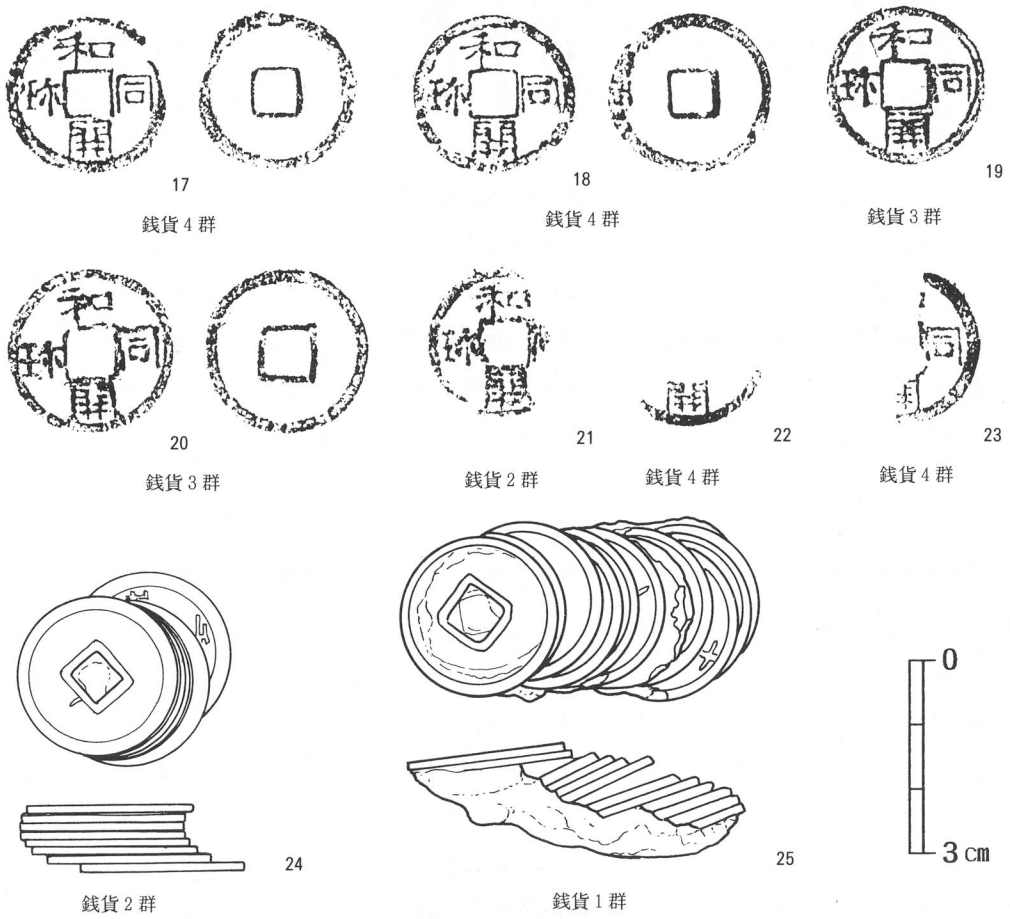


図14　火葬墓出土銭貨実測図・拓影

（5）**木製品**（図15・16、図版12）

【木櫃片】（図15、図版12－26・27）

26は全長9㎝（残存値）、幅1.8㎝、厚さ0.7㎝の薄板材。27は全長6㎝（残存値）、幅1.6㎝、厚さ0.2㎝の薄板材である。樹種は両者とも「サワラ」材で、木櫃底板の断片と思われる。

両者とも木櫃片の両端や両側縁が全て腐蝕しており、本来の板面（表面）や漆の塗膜痕跡等はみられない。

いずれも、表（上）面には、部分的に木櫃の腐蝕土層である第⑧層（暗茶色砂質土層）が付着しており、裏（下）面には木櫃の下に敷かれた木炭の粉末が付着する。

26・27ともに鉄片（図13－13）や銭貨3群（図14－19・20）等の金属製遺物が集中して分布する木櫃北西隅の周囲から出土しており、これ以外には木片は検出されなかった。

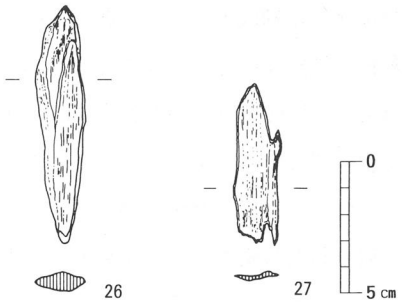


図15　木櫃片実測図（S＝1／3）

【用途不明木片】（図16、図版12－28）

木櫃の東側枠に平行して出土した。残存長27.5㎝、径約2～3.4㎝を測る。樹種は木櫃と同様に「サワラ」材である。全体的に腐蝕が著しいため加工痕や本来の板面は遺存せず、漆の塗膜痕跡等の木片の表面を覆う被覆物は看取されなかった。

北端の節目上に銭貨3群（図14－19・20）4枚が銭文を上にした状態で密着して出土しており、銭貨3群の上にはさらに須恵器の骨蔵器（図10－3）が安置されていた。骨蔵器の重みで北端部は木櫃の底面下の炭層奥に陥没しており、逆に南側は木櫃底面の推定レベルより約2㎝浮き上がった状態で検出された。出土位置や出土状況から、元々、外容器の木櫃下の底面に置かれていたものと考えられる。

木櫃片と樹種が同じであるため、木櫃の底板の桟などの木櫃材の断片とも考えられるが、現状を見る限りでは木櫃材としては加工状態も不自然な点が多く、また、出土状況からみてもこの木片については合理的な解釈ができていない。

木櫃底板の真下の木炭層の間に木櫃東側枠と平行して置かれていることや、また、偶然にも木片北端の節目上に銭貨3群（図14－19・20）が密着して出土しており、さらに直上の木櫃内には骨蔵器が安置されていることから、木櫃を安置する際の一連の造墓・葬送儀礼の過程の中で使用された祭具である可能性も考えられる。

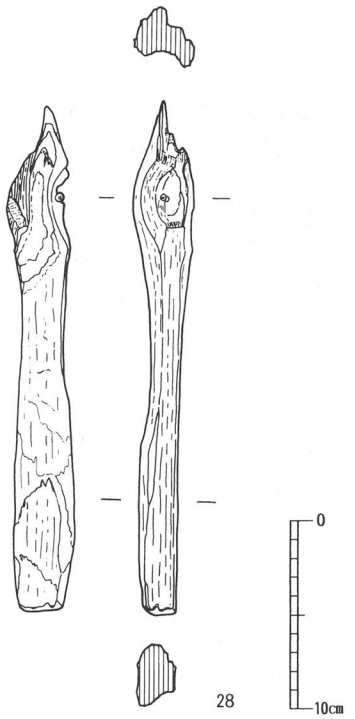


図16　木片実測図（S＝1／4）

（6）その他の出土遺物（銅鈴・土製品）（図17・18、図版12）

火葬墓遺構に伴わない、その他の出土遺物として、丘陵斜面の表土層から近世土器の破片数十点が出土している。なかでも特記すべき遺物として銅鈴１点と土製品１点がある。

【銅鈴】（図17、図版12－29）

縦3.9㎝、横3.0㎝、周長8.2㎝、重さ26.6ｇを測る。鈴の平面の形態は球形であるが、側面及び上下面の形態は偏球形を成す。表裏面に分けて鋳出して重ねる分割成形によるもので、側面表裏面の接合部には接合時の鑢状工具による研磨痕が看取される。鈴の表裏面とも中央部は二重線で上下が区切られており、上区には「太」字と円形の文様が、下区には「王」字とともに虎のような獣面の文様が鋳出されている。

鈕の内径は縦0.7㎝、横0.6㎝で、鈕の上方には懸垂時の摩滅痕が看取される。吊手には、かすかに鍍金の痕跡が遺存していることから、本来は金銅製であったものと思われる。

調査者の知り得た限りの所見では、この種の銅鈴は中国を中心に台湾にも分布しており、日本国内の古美術商でも中国製の遺物として流通している。国内では岐阜県や徳島県、奈良県内で大きさや図柄等全く同様の銅鈴を計８例確認しており[7]、これ以外にもほぼ全国的に分布・流通しているものと考えられる。

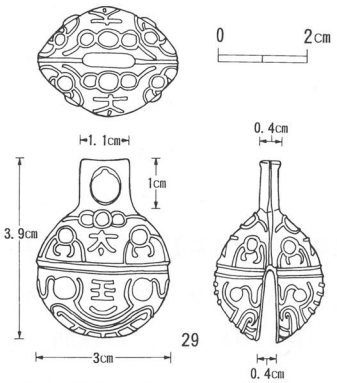


図17　銅鈴実測図（Ｓ＝1／2）

管見にあがった数少ない事例から、これらの鈴は、大きさや文字の組み合わせ、図柄の文様等から数種のタイプに分類される。なかでも大きさは直径３㎝前後で鈴の表裏面の中央部に虎のような獣面紋様を象り、「王」字を記すことが大きな特徴であり、獣面紋様は共通するものの「太」字以外に「合」や「興」等の他の文字と「王」字を組み合わせたものもみられる。この種の鈴には魔よけの祭具や馬鈴など様々な用途が考えられるが、明確な使用年代や用途については不明である。この銅鈴については推測の域をでないが、直接・間接的な訪中の際や、あるいは、日本の古美術商を通じて比較的新しい時期に当地にもたらされたものと考えられる。今後、類例の増加を待って改めて検討したい。

【土製品】（図18、図版12－30）

長さ3.0㎝、幅1.4㎝、厚さ0.9㎝を測る。灰褐色を呈する素焼きの小形の土製品である。表面は、中央から先端はやや尖り気味に仕上げられており、下方には突帯がめぐらされている。裏面は平坦に面取りされており、型押し成形によるものと思われる。中・近世の小さな土塔類の栓とも推察されるが、本来の形状や用途は不明である。火葬墓の所在地から約10ｍ下位の丘陵斜面の表土層から出土している。

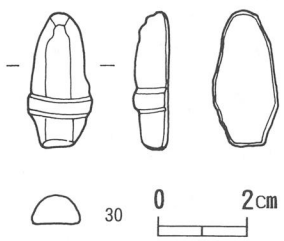


図18　土製品実測図（Ｓ＝1／2）

5．考察（図8・9）

高山火葬墓は木櫃の中に2点の骨蔵器と木櫃の中央部の3箇所に複数の火葬骨を一緒に埋葬する合葬墓であった。1個体の骨蔵器に1人分の火葬骨を納めたものとするならば、2点の骨蔵器から2人の火葬骨を納めた合葬墓であるということができる。木櫃内中央部に分布する火葬骨粉については、2点の骨蔵器に納骨された人物とは別の第3者のものと解釈するのが自然であるが、2点の骨蔵器に納められた火葬骨の一部を中央に一緒に合わせ祀ったものとも考えることができる。

いずれにせよ残された火葬骨が細粉で鑑定に耐え得るものではなかったため、木櫃内の3箇所に残された火葬骨（被葬者）の関係を科学的に解明することは不可能であるが、とりあえず、現段階では2人ないしは、3人の複数の火葬骨を埋葬した合葬墓として解釈することとしたい。

このような古代の合葬墓の例として『日本書紀』や『続日本紀』等の文献には天皇と皇女等の合葬の記事が散見しており、「船王後」や「山代真作」の墓誌銘からは夫婦合葬の事実を知ることができる[8)]。具体的な発掘調査の事例として潮見台遺跡火葬墓[9)]（神奈川県川崎市宮前区管生）で凝灰岩製の石櫃の中に2点の骨蔵器が納める事例があるが、外容器として安置された木櫃の中に2～3人の複数の火葬骨を納める事例はおそらく当火葬墓が初見ではないかと考えられる。

さて、合葬についても多様な解釈ができる。①夫婦の何れかが、先に亡くなり、その後から亡くなった人を葬る場合。②先に亡くなった人を仮に埋葬しておいて、後に夫婦の他のものが亡くなった時、はじめて正式に夫婦墓として造墓・埋葬する場合。③同時期・至近的な時間の範囲内に亡くなった人物を埋葬した場合。等が考えられる[10)]。「山代真作」は墓誌から②が、潮見台遺跡では2点の骨蔵器の蓋は同時期であったが、一方の骨蔵器の型式差から②による埋葬方法が有力である。高山火葬墓の場合、考古資料の上では2点の骨蔵器の型式差は認められないが、墓誌から火葬による葬法でも②も広く行われていた可能性があることから②と③の両者の可能性を考えておきたい。

次に、火葬墓からは銭貨や鉄片、銙帯金具等の遺物が出土しており、実に多様な出土状況のあり方を示していた。遺物の出土位置は、木櫃の中にあるものと木櫃外の木櫃（上蓋）上面と木櫃外の木櫃（底板）直下と推定されるものの3者に識別される。このうち、出土位置の明確なものとして丸鞆〔10〕や5点の土器は木櫃外の木櫃上蓋の上面であったが、それ以外は全て木櫃の中と木櫃外の底面から出土しており、とくに、銭貨と鉄片は同じ遺物でも出土状況の差異が認められた。

銭貨は、木櫃内外の4箇所から4群に別れて計31枚が出土している。銭貨1群〔25〕は木櫃西隅から一番上以下大半の銭文は裏の状態で14枚が指銭状に密着しており、銭貨2群〔21・24〕は須恵器壺骨蔵器〔3〕の底部外面に密着するように銭文は一番上が裏、一番下が表の状態で9枚が、銭貨3群〔19・20〕は銭文は上から表・表・表・裏の状態で須恵器壺（骨蔵器）下の木片〔28〕端部の節目上にはまり込んだ状態で4枚が、銭貨4群〔17・18・22・23〕は木櫃の東隅から銭文は上から表・表・表・裏の状態で4枚が出土している。また、5点の鉄片のうち、鉄片〔12・14〕は木櫃

内中央部から、鉄片〔13〕は木櫃西隅から木櫃外の底板底面に添わすように出土している。

とくに、古代の火葬墓から出土する銭貨については、栄原永遠男[11]氏や小林義孝[12]氏らによる精緻な考察が行われており、近世以降の六道銭的な副葬品としての解釈から飛躍して墓における銭貨の出土状況から地鎮等の呪術的な要素を示すものなど墓における多様な銭貨の意味を析出されている。

これらの個々の遺物の祭祀の対象が死者にあるのか、土地にあるのか理解するのは困難であるが、両氏を始め、先学者の研究に導かれるとするならば、木櫃内の銭貨2群は、唯一、遺骨を納めた骨蔵器に密着していることから被葬者に対して何らかの意味合いを持つもの、その他の銭貨3・4群は、ほぼ対称的な位置で骨蔵器とは離れたところから出土しているため、被葬者に対するものとするよりはむしろ遺骨を納める納骨施設に対する結界・地鎮的な意味合いをもつものと想定される。

高山火葬墓のように納骨施設内の数箇所に数枚の銭貨を納める例として汐井掛遺跡第5号墳墓[13]が知られており、銭貨の出土状況等から納骨の場を限る地鎮・結界を意図するものと推定されている。高山火葬墓では納骨施設の三方に銭貨が配されており、四方と中央部に銭貨を配する点では若干異なるが、骨蔵器の底面に銭貨を配する点等汐井掛遺跡の銭貨の配置・出土状況と極めて酷似しており、当火葬墓にも納骨に際して地域を越えて同様の思想が反映されているものと想定される。

また、鉄片の用途は不明であるが、鉄片〔13〕は造墓に関わる地鎮的な意味あいをもつもの、鉄片〔12・14〕は主人公と推定される中央部の骨粉分布域に添わせ、あたかも守護・結界するように納められていることから納骨儀礼の中で何らかの意味合いを付与して納められたものと想定される。

註　釈

1）奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編　1979『日本古代の墓誌』
2）前掲註1
3）前掲註1
4）前掲註1
5）前園実知雄編　1981『太安萬侶墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊　奈良県立橿原考古学研究所
6）a小林義孝氏のご教示による。大きさは異なるが、形状的には諏訪山遺跡第3号火葬墓（東京都世田谷区）出土鉄板に類似する。
　b村田文夫・増子章二　1990「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（下）—川崎市域における事例研究をふまえて—」『川崎市民ミュージアム紀要第3集』
7）同様の銅鈴の類例については泉森皎氏（奈良県立橿原考古学研究所）や遠山一男氏（岐阜県土鈴博物館）、中井精一氏（天理大学附属天理参考館）のご教示を頂いた。
8）前掲註1
9）村田文夫・増子章二　1989「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（上）—川崎市域における事例研究をふまえて—」川崎市民ミュージアム紀要第2集
10）前掲註6 b
11）栄原永遠男　1993「古代銭貨と呪力」『日本古代銭貨流通史の研究』　塙書房
12）小林義孝　1994「火葬における銭貨」『出土銭貨』第2号
13）上野精志　1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸ』福岡県教育委員会

Ⅳ　高山石切場遺跡の調査

1．遺跡の立地（図19）

二上山麓付近に分布する凝灰岩の層域はおもに上部ドンズルボー層、中部ドンズルボー層、下部ドンズルボー層の３つに区分されている。石切場はこの層域に沿って分布しており、太子町では岩屋峠西方や鹿谷寺跡付近、牡丹洞付近、香芝市ではドンズルボー西方や田尻峠付近が知られている。[1)]

高山石切場遺跡は穴虫石切場遺跡[2)]と同じく上部ドンズルボー層の分布域上に位置しており、ドンズルボー西方や田尻峠付近に分布する凝灰岩の石種は、角礫として灰色の流紋岩を多量に含み、松脂岩・軽石・赤褐色の安山岩を僅かに含む流紋岩質凝灰角礫岩、流紋岩質火山礫凝灰岩である。[3)]

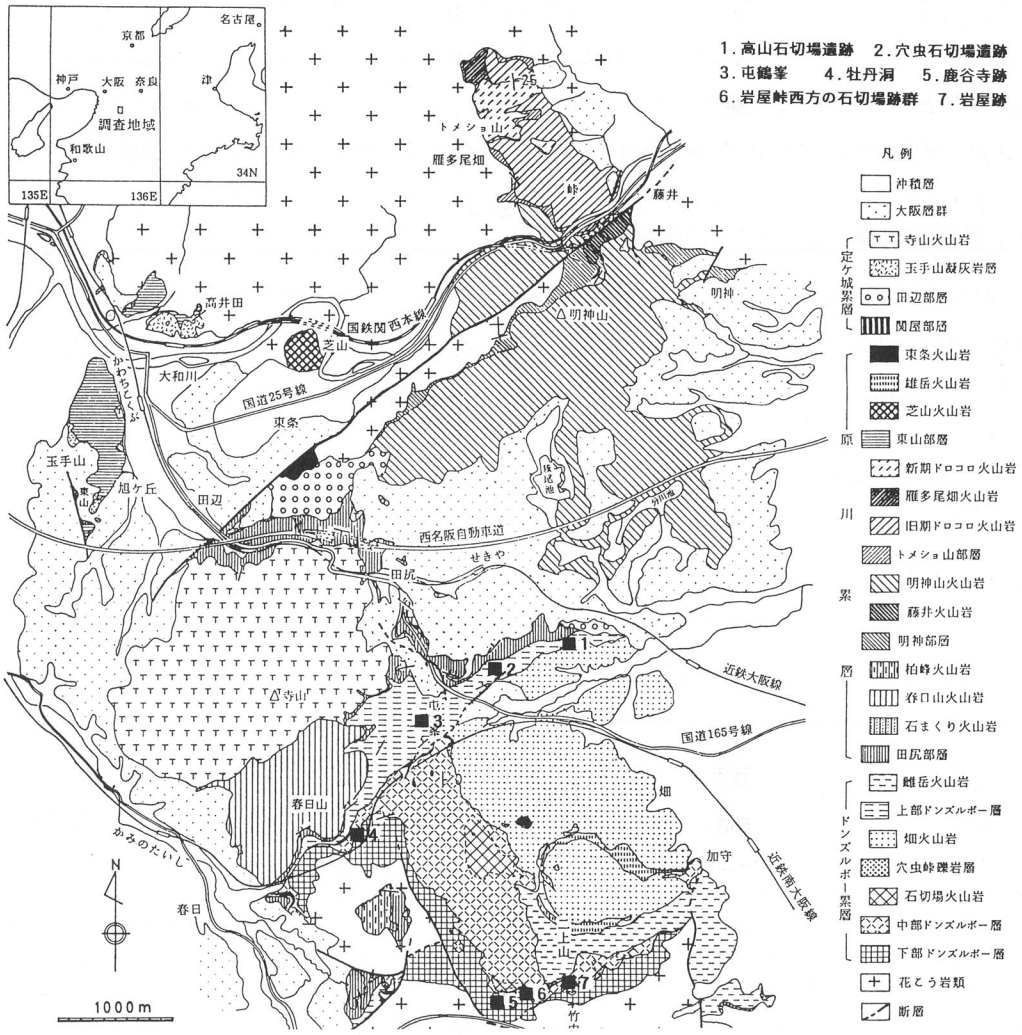


図19　二上山地域周辺の地質図と石切場遺跡分布図（註釈１文献より）

2．調査の経緯（図２）

Ｂ地区の第５・７調査区は地質的にはドンズルボー層の分布地域であり、とくにＢ地区の西側では部分的に地表面直下に凝灰岩の岩相が露出している箇所もみられる。発掘調査はＢ地区の尾根筋頂部を中心に東側から西側にかけて重機と人力の併用作業によって遺構や遺物等の有無確認のための試掘調査から実施することとした。第５調査区は熔結度の低い凝灰岩層の分布域であったせいか、人為的な凝灰岩の石切遺構は検出されなかったが、第７調査区は南側に行くほど熔結度の高い良好な凝灰岩の岩質の分布地域となっており、第７調査区の中央部から南端の尾根頂部にかけて人為的な石切遺構を確認したため、試掘調査区をそのまま拡張して表土除去作業を実施した。

調査は時間的な制約上から人為的な加工痕跡の認められない凝灰岩層の露頭箇所及び埋没箇所は調査対象領域から除外し、人為的な加工痕跡の認められる領域まで順次調査区を拡張することとした。現地調査は表層の石切遺構検出層上面までは重機で掘り下げ、以下人力で精査を実施した。

結果、東西約40×南北20ｍ、総計800㎡の範囲にわたって大規模な凝灰岩の石切遺構を検出した。

3．遺構の概要（図20～22、別添図１・２）

高山石切場遺跡は標高130ｍ前後の丘陵尾根上に立地する。急斜面で崖面状の箇所が多く、丘陵中腹以下は一部に風化した凝灰岩層の露頭がみられる。全体的に堆積土は石材を切り出す際に生じた凝灰岩の細粉や砕石をはじめ、長年の風雨等によって溶解・風化した凝灰岩の粉や土砂等が徐々にたまりこんで堆積した状態であった。

第７調査区の西側では熔結度の高い良好な凝灰岩層が下位まで広がっていたせいか、徹底的に切り出されて崖状になった箇所が多く、各節理面ごとの切出面は遺存していなかったが、第７調査区の東側では部分的に切り合い箇所はみられるものの各節理面ごとに平面的に石切遺構が検出された。

凝灰岩堆積層の厚さや仕切り部の高さから、層厚17～20㎝の第１面、層厚28～38㎝の第２面、層厚13～20㎝の第３面、層厚50～60㎝の第４面に切出し痕跡が遺存しており、各節理面からは、計約30箇所で板状石材を切り出した大小様々な形状の石切遺構を検出した。

いずれも約20度の傾斜を示す堆積節理面に対して直角に切り込んでおり、壁面や底面に切り込み時のノミ痕や最終切り取り時の矢穴痕を明瞭に残すものもみられる。採石途中に一部が欠損したため、岩盤にそのまま放置されたものや最終的に底面から切り取る際に一部が分離せずに岩盤に遺存するものなど様々なものがみられる。とくに、板状石材を切り出した東側では第１面以下は、比較的厚い火砕流堆積層が介入するためにこれ以下は切り出さずに第１面で切り出しを終えており、結果的にこの幸運な偶然が、この石切遺構を後世の採石による破壊から免れさせたのである。

板状石材を切り出した石切遺構が集中して分布する石切場の東側では採石時の痕跡が明瞭に遺存しており、採石技法としては、凝灰岩の堆積節理面ごとに目的とする大きさ・形状の石材の周囲を

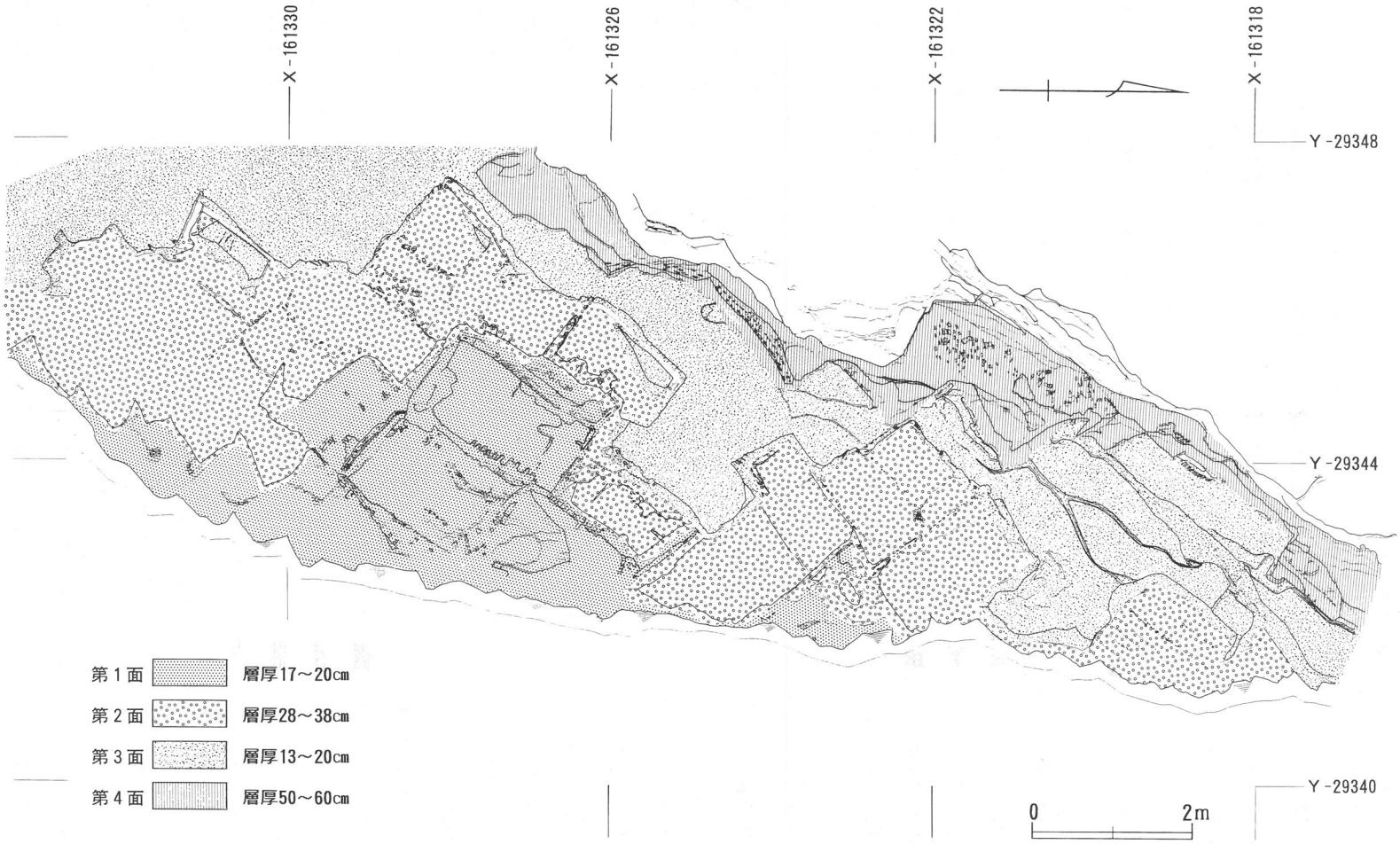


図20　高山石切場遺跡凝灰岩堆積節理図（S＝1／80）

ノミ状工具で溝を切り、最終的に底面からクサビやヤを打って岩盤から石材を割り離すという軟質の石材採石特有のいわゆる掘割技法（溝切り技法[4]）による採石方法が主流であった。

各石切遺構は、とくに良好な凝灰岩の分布域では凝灰岩の堆積摂理層ごとに順番に重複して切り出されているために、消滅したものも多く、採石時の平面・立体的な切り出し形状の判然としないものがほとんどであるが、検出箇所の約100箇で平面形状の識別可能な石切遺構が遺存していた。

これらの石切遺構は、平面形状や使用時の形態も加味すると、①一辺60～100㎝前後の大形の方形状の板状石材を切り出したＡタイプ、②一辺30～60㎝前後の方形状の石材を切り出したＢタイプ、③直径20～30㎝前後の三角形・六角形等の多角形状や円形状の石材を切り出したＣタイプ、④一辺10～100㎝前後の棒状の石材を切り出したＤタイプ。の大別して４つの形状のタイプに分類される。

①石切遺構Ａタイプ：№29Ａ・29Ｂ・30・31・33～45（図21・22、図版17～20、別添図２）

長辺100～150㎝、短辺60～80㎝、厚さ20～30㎝前後の方形の板状石材を切り出した痕跡で、当石切場の中では最大の石切遺構である。石切場東側の約18箇所で集中して分布しており、それ以外には全く遺存していなかった。この種の石切遺構の壁面には平均して幅６㎝前後の切り込み時の平ノミ状工具による切り出し痕跡が残されており、底面には切り取り時の円形や扇状の矢穴の痕跡がみられる。このうち石切遺構№33・35・40・45は石材切り取り時に欠損したため、一部が岩盤から分離されずに放置されている。これらの岩盤に遺存する石材からノミ状工具の打ち込み幅による石切遺構の外寸と内寸の差は平均して約10～15㎝前後であることから、実際に使用される石材は成形時の損失も含めて石切遺構の外寸より約20㎝程度短い大きさになるものと思われる。

②石切遺構Ｂタイプ：№14～23、32・68・96・97他（図22、図版23）

一辺30～60㎝、厚さ15～30㎝前後の方形・隅丸方形の整美な石材を切り出した痕跡。４つの石切遺構の中で最も多く遺存しており、石切場の西側を中心とした全域約34箇所に単発的に分布する。壁面や底面には切り込み時のノミ状工具の痕跡や切り取り時の矢穴の痕跡が遺存しており、切り取り時に欠損したため使用時の形状に近い状態で岩盤に遺存するものが数箇所でみられる。

③石切遺構Ｃタイプ：№47・56・58～61他（図22、図版25－２・３）

直径20～30㎝、厚さ15～30㎝前後の三角形・六角形等の多角形状や円形状の石材を切り出した痕跡。おもに石切場の西側を中心に全域約18箇所に単発的に分布する。多角形状と円形状を指向するものの２者に細分することが可能であるが、Ｂタイプと同様の使用用途が考えられることや使用用途の区別が困難であるため、本書では同類のものとして取り扱うこととする。

④石切遺構Ｄタイプ：№６・13・24～27・76・84他（図22、図版21・22）

直径10～20㎝、長さ100㎝前後の棒状の石材を切り出した痕跡。石切場のほぼ全域約15箇所に単発的に分布する。このタイプは、さらに、１個体の棒状の石材を単発的に切り出したものｄ－ａタイプ（石切遺構№４・11・13・24・70他）と、一つの切出区画内から並列もしくは、階段状に複数の棒状の石材を切り出したものＤ－ｂタイプ（石切遺構№25～27・76他）の２者に細分される。

●高山石切場遺跡石切遺構Ａタイプ計測値

遺構番号	図版番号	石切遺構内寸計測値		
		長辺	短辺	厚さ
28		105	64	50
29A	17-2	120	65	20
29B		105	78	20
30	17-2	130	57	20
31	17-3	55	54	21
33	19-2・3	120	75	32
34		153	75	30
35	20-1	140	80	24
36		90↑	80↑	24
37	18-1・2・3	105	90	30
		108	83	30

遺構番号	図版番号	石切遺構内寸計測値		
		長辺	短辺	厚さ
38	18-1・2	170	80	30
39	18-1・2	170	83	30
40		95	70	14
41		95	65	14
42	19-1	115	68	30
43		58	45	10
44		50	35	10
45	20-2・3	105	73	17

※単位はcm。遺構番号は表１の石切遺構番号に一致する。
法量は石切遺構の内寸の計測値を表した。

●穴虫石切場遺跡石切遺構計測値

石切遺構計測値	
長辺	短辺
110	80
140	70
138	80
80	60
200	70

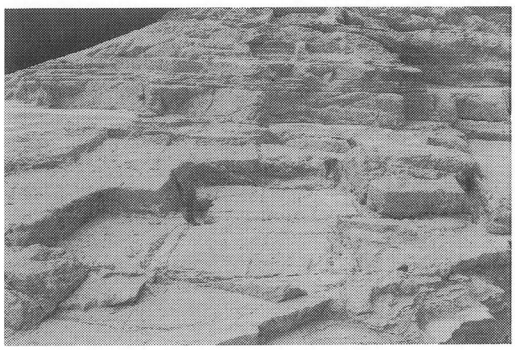
※計測値は註釈（２）の文献による。

図21　高山石切場遺跡板状石材切出遺構平面図（Ｓ＝1／60）

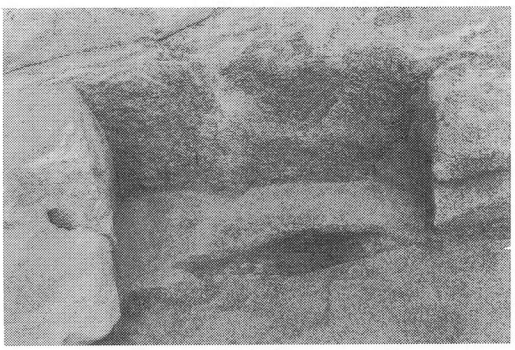
Ｂ・Ｃ・Ｄタイプの石切遺構は検出範囲のほぼ全域、全節理面にわたって分布しているが、このうち板状石材を切り出したＡタイプについては調査区東側のみにしか分布・遺存していなかった。

切り出し形状や大きさ、岩盤に遺存する石材の切り出し形状から、Ｄタイプは石塔の中でも層塔・宝塔の相輪や宝塔の塔身等を切り出した石切遺構と推定される。Ｂ・Ｃタイプの石切遺構については、両者とも同様の使用用途が予想されるため、厳密な区別は困難であるが、Ｂタイプは石塔の中でもとくに層塔・宝塔の笠や基礎等の各部材、ＣタイプはＢタイプの簡略化した採石方法と考えられ、石塔の中でも基礎を除いた層塔・宝塔の笠、五輪塔の火輪等が推定される。仕切り部を残さない輪郭の判然としないものも含め、ほとんどが中世の石塔の各部位を切り出した石切遺構と考えられるが、このうち大形の板状石材を切り出したＡタイプの石切遺構の使用用途については、切り出し時の大きさや厚み、形状から、あくまでも切り出した石材を小割りせずにほぼそのまま大きさで使用したものであるとするならば、古墳時代の石棺用石材の一種である組合式石棺や寺院・宮殿の基壇の建築用石材の中でも大形の石材である羽目石の規格に類似することが指摘できる。

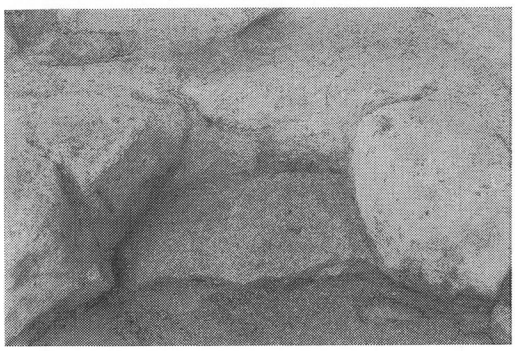
各タイプの石切遺構の詳細な帰属時期は不明であるが、石塔の未製品の形態的特徴や組合わせから、おもに13世紀を中心とした鎌倉時代中頃から後半にかけて採石された石切場跡と推定される。



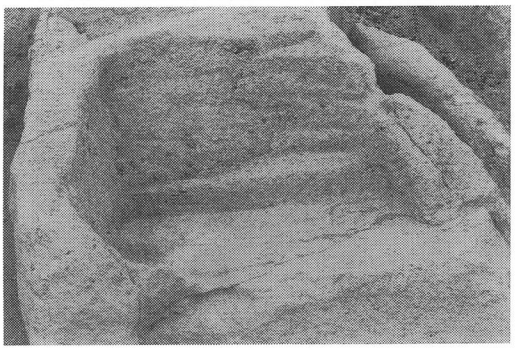
1．石切遺構Ａタイプ



2．石切遺構Ｂタイプ



3．石切遺構Ｃタイプ



4．石切遺構Ｄタイプ

図22　石切遺構タイプ別写真

表１　高山石切場遺跡石切遺構計測値一覧表

遺構番号	図版番号	石切遺構の形状		石切遺構切出外寸			石切遺構切出内寸			切出石材の形状	切出石材の種別	石切遺構の状態等・備考
		型式	平面形状	長辺	短辺	厚さ	長辺	短辺	厚さ			
1	22－1	D－a	長方形	55	24	18	42	13	18	長方形棒状	空風輪？ 相輪？	切り出し途中で岩盤に放置。長さ42㎝、直径13㎝の棒状石材１個体を切り出す。
2		D－a	長方形	60	38	15	67	30	15	長方形	塔身？	
3		B	不整形	55↑	26↑	12	50	26↑	12	方形？	笠・火輪	
4		D－a	長方形				45	14	14	長方形棒状	相輪？	棒状石材を１個体切り出す。
5		A？	方形	220	100↑	24	200	100↑	24	方形？	板石？	切り合っているため個々の詳細な規模は不明。
6		D－b	方形	96↑	37↑	18	96↑	35↑	18	長方形棒状	相輪	長さ96㎝、直径18㎝の棒状石材を２個体切り出す。
7		A？	方形	220	110↑	24 ～ 60	210	9↑		長方形	板石	切り合っているため個々の詳細な規模は不明。壁面と底面に幅6.5㎝の平ノミ痕残る。底面２ヶ所に切り出し時の矢穴痕残る。底面近くで袋状鉄斧（図24－33）出土。
8 A B C	17－1	D－b	正方形	130	100	31	125 125 125 125 125	25 30 18 12 14	31 31 25 25 25	長方形棒状 長方形棒状 長方形棒状 長方形棒状 長方形棒状	相輪？	壁面に幅６㎝の平ノミ痕残る。底面に縦位の直線状のノミ痕残る。
9		？	不整形			42			42	不明	板石？	底面に幅４㎝の多数のノミ痕群残る。 底面２箇所に直径12㎝の切り取り時の矢穴痕残る。
10		B	長方形	75↑	50	13↑	65	35	13↑	方形	基礎・笠	
11		D－a	長方形				84	30	19↑	長方形	塔身？	底面に切り込み時のノミ痕残る。
12		B	隅丸方形				41	29	19	楕円形	笠・火輪	切り出し途中で岩盤に放置。
13	25－1	D－a	長方形	75↑	26↑	13	62	15	13	長方形棒状	相輪	切り出し途中で岩盤に放置。長さ62㎝、直径15㎝の棒状石材を１個体切り出す。壁面に切り込み時の平ノミ痕残る。 底面に切り込み時の幅３㎝の棒状工具による刺突痕残る。
14	25－1	B	不整方形	28	28	15↑	21	18	15	不整方形	笠・火輪	
15	25－1	B	正方形	32	24	15↑	20	12	15	正方形	笠・火輪	
16	25－1	B	不整形	30	24	15↑	16	14	15	不整方形	笠・火輪	
17		B	方形	90↑	25↑	12？	40↑	40↑	12	方形	基礎？	底面に多数の平ノミ痕残る。
18		B	長方形	55	37	10	54	18	10	長方形	基礎・笠	底面に切り込み時の刺突痕残る。２個体を切り出すか？

遺構番号	図版番号	石切遺構の形状		石切遺構切出外寸			石切遺構切出内寸			切出石材の形状	切出石材の種別	石切遺構の状態等・備考
		型式	平面形状	長辺	短辺	厚さ	長辺	短辺	厚さ			
19		B？	長方形	67↑	45	18				方形？	？	底面に切り込み時の幅６㎝の縦位の深い平ノミ痕残る。
20		B	不整形			30	35↑	35↑	19	方形？	笠・火輪	切り出し途中で放置。切り取り時の矢穴痕残る。
21		B	方形	45	45	20	30↑	30↑	20	方形？	笠・火輪	切り出し途中で放置。
22		B	正方形	37	34	20	35↑	28	20	正方形	笠・火輪	切り出し途中で放置。
23	23－1	B	正方形	40	26↑	20	32	34↑	20	正方形	笠・火輪	
24		D－a	長方形	77	35	12	70	15	12	長方形棒状	相輪	底面に切り込み時の刺突痕残る。
25		D－b	長方形	75↑	36↑	10	65	16	10	長方形	相輪	底面に切り込み時の刺突痕残る。
26		D－b	長方形	100	25↑	16	88	15	15	長方形棒状	相輪	切り込み時の縦位の棒状工具によるノミ痕残る。
27		D－b	長方形	95	75	22	70 92	20 19	11 11	長方形棒状 長方形棒状	相輪 相輪	１単位で上下２個体切り出している。一回あたり直径10㎝、底面に切り込み時の棒状工具の刺突痕残る。
28		A？	長方形	110↑	100↑	40	105	64	40	長方形板状	板石	壁面に切り込み時の連続平ノミ痕残る。
29A 29B	17－2 17－2	A A	長方形	240	80↑	20	120 105	65 78	20 20	長方形板状 方形板状	板石 板石	底面に切り込み時の矢羽根状のノミ痕が縦位に残る。
30	17－2	A	長方形	140	65↑	20	130	57	20	長方形板状	板石	底面に切り込み時の縦位のノミ痕残る。
31	17－3	A	正方形	85	60	21	55	54	21	正方形板状	板石	四周に切り込み時の溝状の切り込み痕残る。
32	24－1	B	不整方形	55↑	50↑	25↑	35	30	25	不整方形	火輪	欠損のため切り出し途中で放置。
33	19－2 19－3	A	長方形	175	90↑	32	120	75	32	長方形板状	板石	切り出し途中で放置。底面に切り込み時の約4.5㎝の丸棒状工具による刺突痕及び切り取り時の矢穴痕残る。 安部浄土寺境内所在石棺（北葛城郡広陵町）の岩質に類似する。
34		A	長方形	180	100↑	30	153	75	30	長方形板状	板石	底面に切り込み時の幅６㎝の連続平ノミ痕残る。
35	20－1	A	長方形	162	90↑	24	140	80	24	長方形板状	板石	切り取り時に欠損のため全体が切り取られずに一部が残る。 底面中央部２ヶ所に切り取り時の約2.5㎝の丸棒状工具の矢穴痕が残る。切り込み時の周溝残る。
36		A	正方形	105↑	100↑	24	90↑	80↑	24	正方形板状	板石	底面に切り込み時の幅7.5㎝の平ノミ痕残る。
37	18－1 18－2	A		125↑	115↑	30	105 108	90 83	30 30	正方形板状 正方形板状	板石 板石	壁面に切り取り時の幅６㎝の平ノミ痕残る。

遺構番号	図版番号	石切遺構の形状		石切遺構切出外寸			石切遺構切出内寸			切出石材の形状	切出石材の種別	石切遺構の状態等・備考
		型式	平面形状	長辺	短辺	厚さ	長辺	短辺	厚さ			
38	18－1	A	長方形	175↑	80↑	30	170	80	30	長方形板状	板石	底面に切り取り時の直径6㎝の矢穴痕残る。
39	18－1 18－2	A	長方形	200↑	160↑	30	170	83	30	長方形板状	板石	底面四周に切り込み時の幅5㎝の連続平ノミ痕が残る。底面に切り取り時の幅3～3.5㎝の丸棒状工具の矢穴痕残る。
40		A	方形	100↑	95↑	14	95	70	14	方形板状	板石	底面・壁面に切り込み時の幅6㎝のノミ痕残る。切り取り時に欠損のため放置。松里園古墳（北葛城郡上牧町）や黒石古墳出土石棺（広陵町）の岩質に類似する。
41		A	方形	110↑	70↑	14	95	65	14	方形板状	板石	底面に切り込み時のノミ痕残る。切り取り時に欠損のため放置。松里園古墳や黒石古墳出土石棺の岩質に類似する。
42	19－1	A	正方形	75	55↑	30	115	68	30	長方形板状	板石	壁面と底面に幅5.5㎝の平ノミ痕群残る。
43		A？	正方形	80↑	75↑	10	58	45	10	正方形板状？	板石	底面に切り取り時の矢穴痕残る。
44		A？	長方形	90↑	55	10	50	35	10	長方形板状	板石	底面に切り取り時の矢穴痕残る。
45	20－2 20－3	A	長方形	130	88	17	105	73	17	長方形板状	板石	切り取り時に欠損のため全体が分離されずに一部が残る。 底面に切り込み時の溝状の深い平ノミ痕残る。
46		B	方形	105	60↑	17	80↑	55↑	17	方形板状	笠・基礎	壁面に幅5㎝の平ノミ痕残る。 2個体切り出す。
47	25－2	C	三角形	80	60	17	53	30	17	三角形	笠・火輪	壁面に幅5㎝の平ノミ痕残る。横位の状態で採石か？
48										溝状		切り込み時の幅2㎝の丸棒状工具による刺突痕残る。
49		B	方形	45	40	8	30	20	8	方形	笠・火輪	壁面に幅8㎝の連続平ノミ痕残る。
50		D？	長楕円形	57	42	8	50	30	8	長楕円形	塔身？	周囲を切り出し途中で放置。
51		C	多角形	30	25	8	25↑	20↑	8	多角形	笠・塔身？	壁面にかすかな連続平ノミ痕残る。
52		C	楕円形	37	27	8	25	18	8	楕円形	笠・火輪	
53		B	方形	58	58	50	45	40	50	方形	火輪	壁面に幅5.5㎝の連続平ノミ痕残る。
54		C	円形	53	40↑	55	38↑	34	54	円形	火輪・笠	火・笠 壁面に幅5㎝の切り込み時の平ノミ痕残る。
55		C	不整形			50			50	円形	火輪・笠	壁面に幅5㎝の切り込み時の平ノミ痕残る。
56	24－2 24－3	C	不整形			45			45	不整形	火輪？	五輪塔の一部と思われるが形状や規模は不明。底面に切り込み時の幅5㎝の平ノミ痕残る。

遺構番号	図版番号	石切遺構の形状		石切遺構切出外寸			石切遺構切出内寸			切出石材の形状	切出石材の種別	石切遺構の状態等・備考
		型式	平面形状	長辺	短辺	厚さ	長辺	短辺	厚さ			
57		B	方形	65	46	15	40	28	15	正方形	笠・基礎	
58		C	多角形	37	20↑	13	35↑		13	多角形	笠？	六角形？。
59		C	方形	28	28	13	20	15	13	方形	笠？	
60		C	多角形	30	30	14	20	20	14	多角形	笠？	六角形？。
61	25－3	C	多角形	30	30	17	25	25	17	多角形	笠？	六角形？。
62		B	方形	60	35↑	24	38	31	24	方形	笠・基礎	
63		B？	方形	80↑	50↑	16			16	方形	笠・基礎	相輪（図25－34）出土。底面に平ノミ痕残る。
64		？				17			17	？	？	壁面・底面にノミ痕残る。
65		B	方形	60↑	60↑	25	60	35	25	方形	笠・基礎	壁面・底面にノミ痕残る。
66		？				25			25	？	？	壁面・底面にノミ痕残る。
67		B？	方形	100↑	60↑	32	60↑	60↑	32	方形	笠・基礎	壁面・底面にノミ痕残る。
68	23－2	B	長方形	93	70	35	70	60	35	長方形	笠・基礎	壁面・底面にノミ痕残る。
69		C	不整形	80↑	40↑	16			16	不整形	笠・基礎	底面に切り取り時の直線状の刺突痕残る。
70		D－a	長方形	70↑	42↑	15	56	35	15	長方形棒状	塔身？	
71		C	不整形	100	70↑	34	60↑	50	34	不整形	笠・火輪？	壁面に幅6.5cmの深い平ノミ痕残る。
72		C	円形	径50			径30		15↑	円形	火輪	切り出さずに放置。壁面周囲に切り込み時のノミ痕残る。 壁面周囲に切り込み時のノミ痕残る。五輪塔の火輪か？。
73		C	円形	径50			径40		15↑	円形	火輪	切り出さずに岩盤に放置。壁面周囲に切り込み時のノミ痕残る。五輪塔の火輪を裏向の状態で切り出したものか？。
74		C	不整形			15			15	？	笠？	
75		D	方形	105↑	70↑	13	100↑	60↑	13	長方形棒状	相輪？	
76	21－1	D－b	方形	95↑	92	43	80 95	55 20	13 13	長方形棒状	相輪	長さ95cm、径20cmの約6本の長方形の棒状石材を切り出す。 底面に切り取り時の棒状工具による刺突痕残る。
77		D？	方形	120↑	95↑	34	115	70	34	長方形？	？	
78		C	多角形	30	30	13	20	20	13	多角形	笠？	六角形？。
79		？	長方形	70↑	60↑	13	60	20↑	13	方形？	？	
80		？	不整形			13	？	？	13	長方形	？	壁面や底面に切り込み時の縦位の深いノミ痕残る。

遺構番号	図版番号	石切遺構の形状		石切遺構切出外寸			石切遺構切出内寸			切出石材の形状	切出石材の種別	石切遺構の状態等・備考
		型式	平面形状	長辺	短辺	厚さ	長辺	短辺	厚さ			
81		?	不整形	100↑	100↑	13	?	?	13	?	?	
82		D?	長方形	100↑	55↑	16	98	47↑	16	方形?	塔身?	
83		D?	長方形	80↑	67↑	17	72	62↑	17	長方形	相輪?	
84	22−2 22−3	D−b	長方形	90	75	17	70↑ 70↑	10 12	17 17	長方形棒状	相輪	切り出し時に欠損のため放置。棒状工具による切り込み時の縦位の刺突痕残る。長さ90cm、直径15cmの棒状石材2個体を切り出す。
85		B	方形	60↑	55↑	23	55↑	40↑	23	方形	笠・基礎	
86		C	多角形	18	18	16	10	10	16	多角形	笠?	
87		B	方形	55	35	15	43	21↑	15	方形	笠・基礎	
88		B?	方形	25↑	17	15	23↑	10	15	方形	笠?	
89		B	正方形	47	22↑	15	38	20↑	15	正方形	笠・基礎	
90		B	正方形	56	45	15	32	25	15	正方形	笠・火輪	
91		C	多角形	10	10	7				六角形?	笠	
92		D	長方形	95	50↑	16	89	30↑	15	方形棒状	相輪・塔身	直径15cmの棒状石材を2個体以上切り出す。
93		B	正方形	45	35	18	31	30	18?	正方形	笠・基礎	底面に切り込み時の方形の切り取り痕残る。
94		D−b	長方形	55↑	36	18	50	23	18?	長方形棒状	相輪	底面に切り込み時の刺突痕残す。2本以上の棒状石材を切り出す。
95		B	不整方形	42	40	18?	35	24	18	不整方形	笠・火輪	切り出し時に欠損のため放置。壁面に切り込み時の平ノミ痕残る。
96	23−3	B	正方形	40	35	14	32	28	14	方形	笠	四周を溝状に切り込んだ状態で放置。底面に切り込み時の刺突痕残る。
97	23−3	B	正方形	39	34	14	27	25	14	正方形	笠・火輪	
98		B	正方形	42	31	21	32	30	21	正方形	笠	底面にノミ痕残る。
99		B	方形	40↑	40↑	14	40↑	30↑	14	方形	笠・基礎	
100		?	不整形			14			14		?	壁面や底面に切り込み時の連続平ノミ痕残る。

※石切遺構切出外寸は遺構外縁（外辺）を表し、石切遺構切出内寸は遺構（岩盤）に残された石材や切り込み時の痕跡から計測した遺構内縁（内辺）の計測値を表す。
また、↑印は石切遺構縁の輪郭や大きさが不明瞭のため、前後の値、もしくは、それ以上の計測値であることを表す。
石切遺構の計測値は全て（cm）で表記した。一覧表の石切遺構番号や石切遺構の型式名は本文中の石切遺構番号や石切遺構の型式名に一致する。
「切出石材の種別」は、大きさや形態等から推定される石材の使用用途を表したもので、とくに石切遺構B・Cタイプについては今後の研究によって変更の可能性がある。石切遺構Aタイプについては、使用用途が不明であるので「板石」とのみ記入した。
当石切場遺跡の凝灰岩の岩質と組合式石棺用石材の岩質との比較同定作業には奥田尚氏の御協力を得た。

4．出土遺物の概要

表土や各石切遺構の堆積土層中からは、おも採石時や現地で製品に加工する際に生じた凝灰岩の砕片と伴に石塔の未製品約30点や鉄斧１点を始め、土師器２点、須恵器１点、瓦質土器１点、磁器１点の細片が出土している。以下、出土遺物のうち図示可能な遺物について図化することとする。

（１）土器（図23、図版26－31・32）

石切場出土土器として須恵器１点、土師器２点、瓦質土器１点、近世磁器２点の破片がある。

31は須恵器甕？体部の破片である。色調は青灰色を呈し、外面には格子目の叩きを施し、内面には同心円文の叩きが施される。石切遺構No.１の東側付近の表層から出土した。

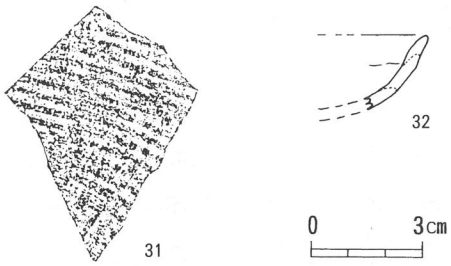


図23　石切場出土土器実測図（Ｓ＝1／2）

32は土師器皿口縁部の破片である。色調は乳褐色を呈する。摩滅が著しいため、調整は不明である。いずれも２次堆積の可能性も強く各石切遺構の帰属年代を確実に証明するものではない。

（２）鉄斧（図24、図版26－33）

33は鉄斧である。長さ（残存値）12.2cm、刃部幅5.4cm、袋部幅5.5cm、重さは447.06ｇを測る。袋部は厚さ0.8cm前後の鉄板を折り曲げて内寸2.7×3.2cmの中空に作り、袋部は全長の約２／３を占める。刃部の開きはなく、袋部から刃部までほぼ直線的にのびており、他の一般的な鉄斧に比して、とくに袋部の地金の厚さが厚く、柄を包み込む袋部が長いことが特徴的である。

石切場東側の板状石材を切り出したＡタイプの石切遺構の分布域に近接する石切遺構No.７の底面の堆積土層中から出土した。

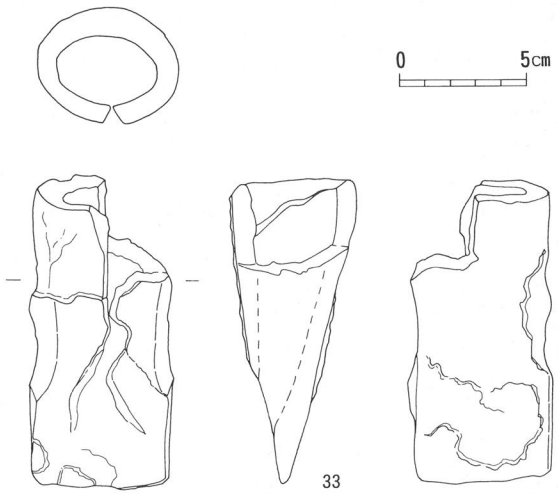


図24　石切場出土鉄斧実測図（Ｓ＝1／3）

類例として穴虫石切場遺跡出土の袋状鉄斧がある[5)]（全長11.5cm、袋部幅4.3cm、刃部幅6.2cm、重さ338.85ｇ）。法量的には穴虫石切場遺跡出土鉄斧と類似するが、穴虫石切場遺跡出土鉄斧は、刃部付近で扇状に下方に広がる点で当石切場遺跡出土鉄斧と形状が異なり、また、当石切場遺跡出土鉄斧の地金の方が厚いことが指摘できる。両者とも他の転用ではなく、石工に関わる専用の採石・加工用具と考えられるが、いずれも法量や形態的な特徴から帰属時期を確定することは難しい。

（3）**石製品**（図25～28、図版26～28）

大半は使用時の形状が判然としない石材の断片がほとんどであるが、石切場で採集した石製品は全て石塔の各部材と思われる。なかには、宝塔や層塔の相輪を始め、宝塔の塔身軸部や層塔の笠部分や五輪塔の火輪に相当する石材など確実に使用用途の識別可能なものも認められる。

以下、石切遺構の堆積土中から出土した石塔のうち、図示可能なものを図化することとする。なお、個々の石塔の計測値は表2に明記したので詳細はそれに委ねる。

34～44は層塔や宝塔の相輪の製作を意図した石塔の未製品であると思われる。34は全長34.4㎝、直径約9㎝を測り、相輪の下部には直径6.5㎝の枘を削り出す。中央部で半截するものの、ほぼ完形である。九輪ではなく七輪を刻むが、輪部の刻み込みは直角ではなくやや丸みを帯びている。

36・37は相輪の半製品である。基部には笠に接合するための枘が削り出されているが、未調整の部分が多く、完成品に仕上げる前の段階のものと考えられる。38～44は目的とする長さは不明であるが、いずれも平均径10㎝の棒状に仕上げられており、形状や大きさから相輪の未製品と考えられる。同様のものとして穴虫石切場遺跡では宝篋印塔と推定される相輪の断片が出土している[6)]。

45・46は層塔の笠である。45は表裏面の中央部に直径6㎝、深さ2㎝の枘穴をもつ。復元値は一辺約21～22㎝を測る。46は表面に直径6㎝、深さ1.7㎝の枘穴を作るための円形の周溝が刻まれている。裏面にも枘穴状の刻みがあるが、おそらく、裏面の枘穴穿孔時に途中で半截したため遺棄されたものと考えられる。いずれも平面形態は正方形に近く、屋根の反りはみられない。

48は五輪塔の火輪、50は石塔の笠としてはやや薄いため、石塔の基礎に該当すると考えられる。

58は半截しているため、全体の形状は不明であるが、反転すると平面形態は六角形状を呈する。石切遺構№61など多角形を指向する石切遺構が数基あることから、灯籠の中台や塔の森六角層塔のような多角形の層塔の笠の製作を意図した石塔の未製品とも考えられるが詳細は不明である。

59～61は宝塔の塔身である。60は全長30㎝、塔身の長さは23㎝、直径17㎝を測り、首部の直径は12㎝、高さ7㎝を測る。丸く成形する以前の段階のものと考えられ、平面は隅丸方形状を呈する。全体的に未調整の箇所を多く残しており、首部も成形途上で、笠と接合するための枘は削り出されていない。ほぼ全域に幅約3㎝の調整時の平ノミ状工具の痕跡が残る。

61は全長47.5㎝、塔身の長さは39.5㎝、直径25㎝を測る。底部は中央の最深部で底面より約2.5㎝内刳りされている。首部の直径は約12～15㎝、高さ5㎝を測り、首部先端には笠に接合するための直径8～10㎝、高さ3㎝の枘が削り出されている。平面形態は楕円形を呈し、立（側）面は首部中央から上位にかけて幅広に仕上げられているためにやや肩が張った感を覚える。表面のほぼ全域に幅約1.5～3㎝の調整時の平ノミ状工具の痕跡が明瞭に残る。当石切場遺跡から出土した石塔の部材の中では最大のものであるが、60・61とも消費地にみられる宝塔の中では小形品に属する。

これらの石塔は、形態的特徴や石塔の組合わせ等から判断して、概ね、13世紀を中心とした鎌倉時代中頃から後半のものと考えられる。

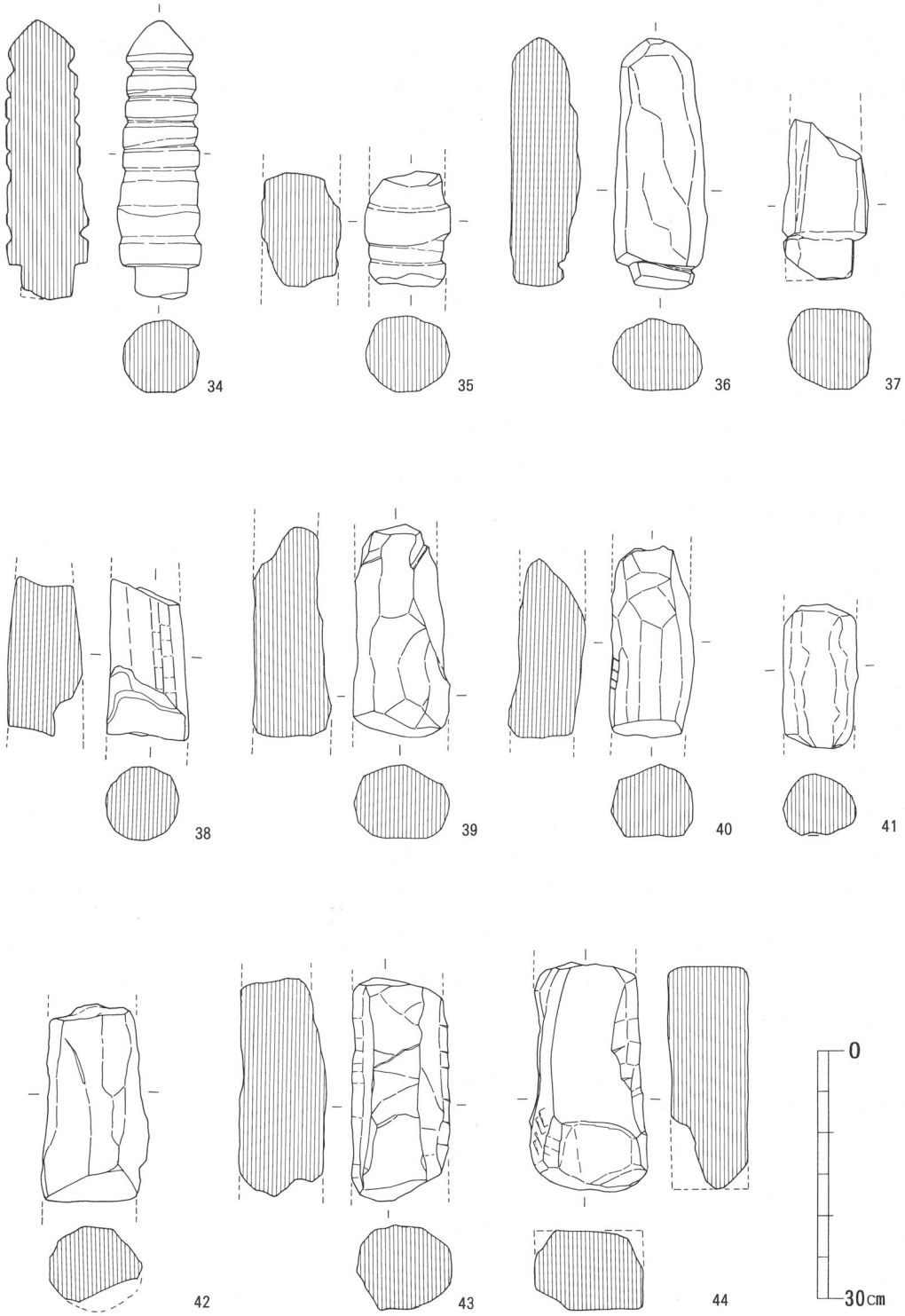


図25　石切場出土石塔実測図 (1)（S＝1／8）

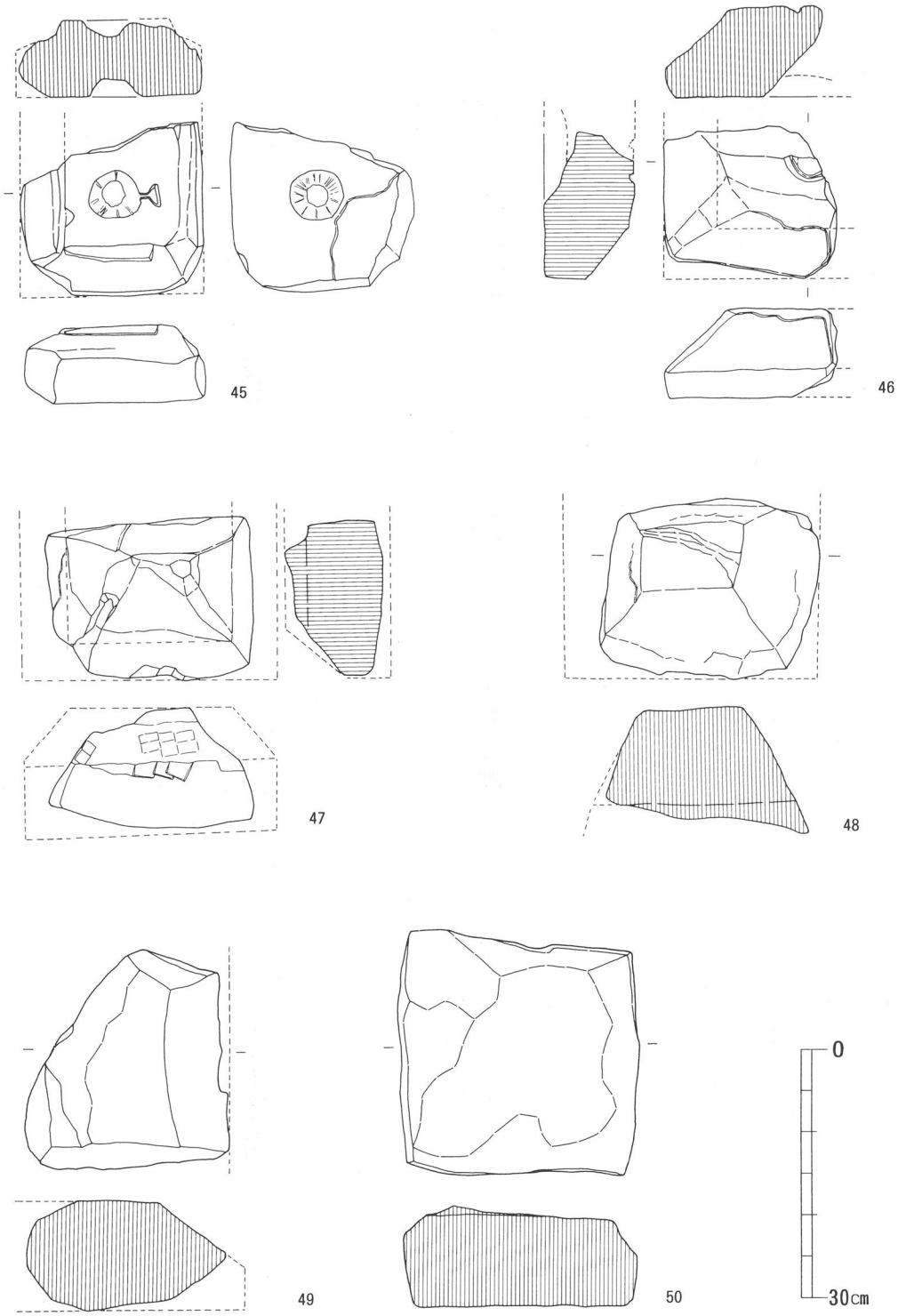


図26　石切場出土石塔実測図 (2)（S＝1／8）

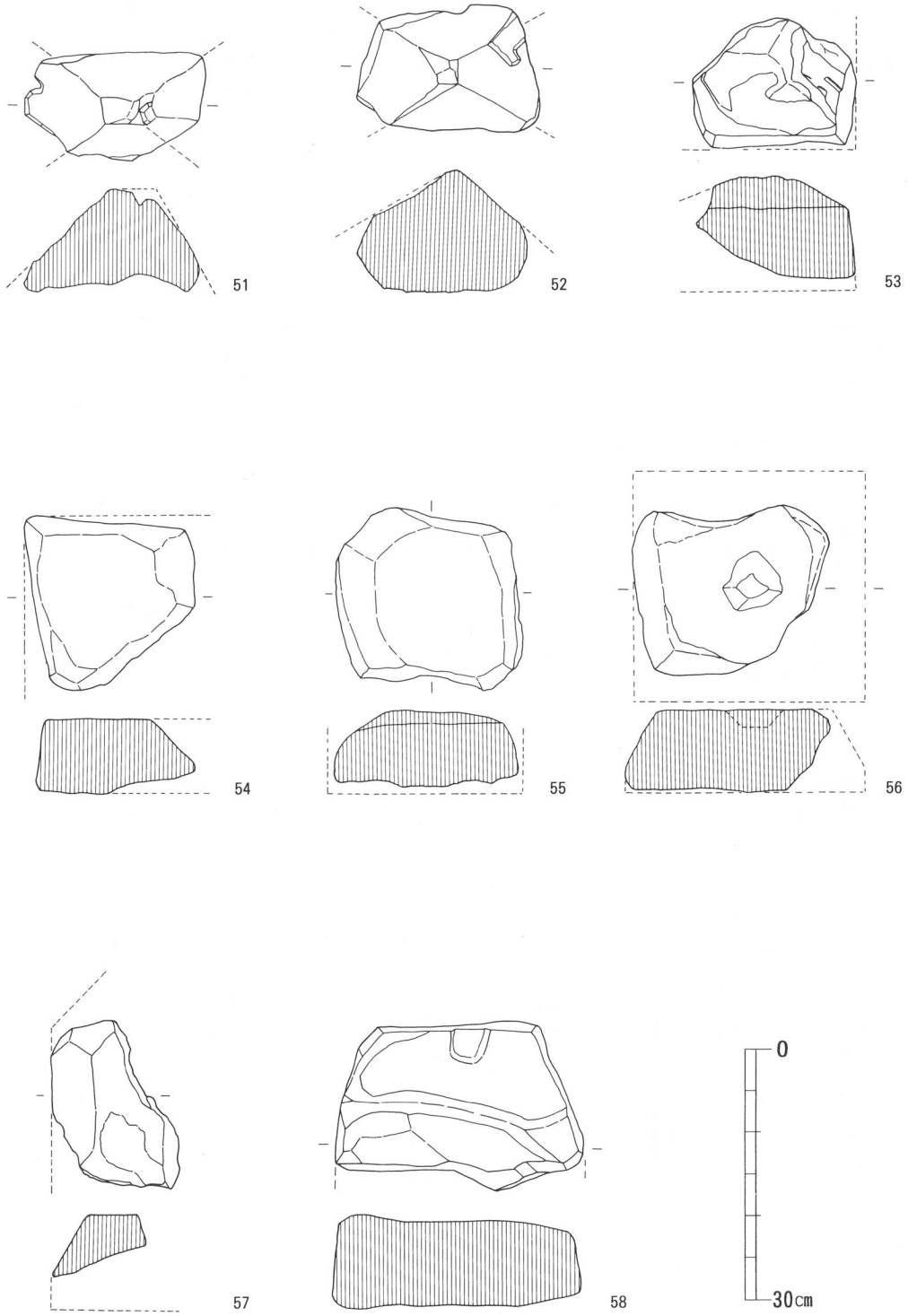


図27　石切場出土石塔実測図 (3)（S＝1／8）

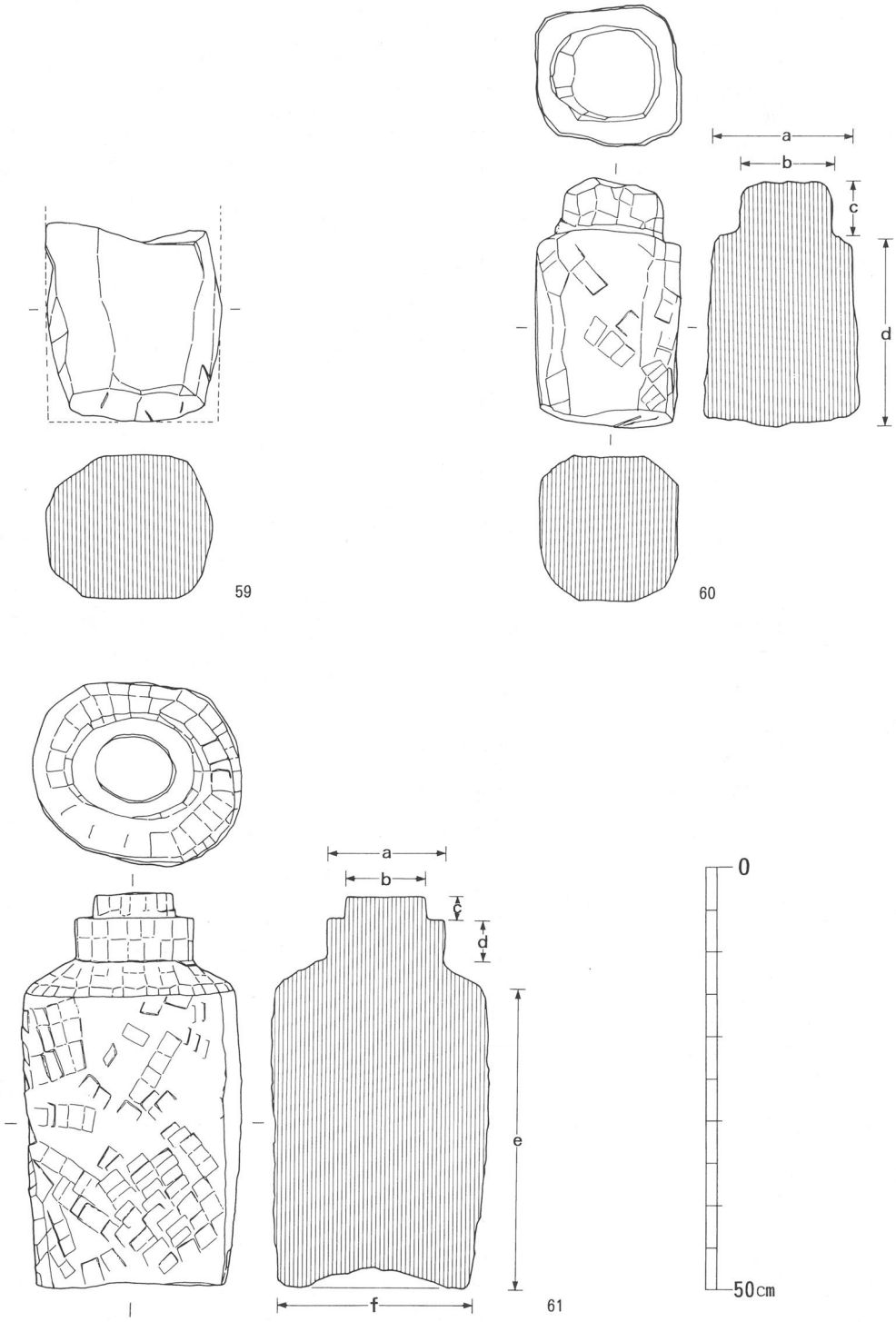


図28　石切場出土石塔実測図 (4)（S＝1／8）

表２　高山石切場遺跡出土石塔計測値一覧表

実測番号	図版項	石塔種別（部位）	長さ	長径 長辺	短径 短辺	高さ	軸径 軸長	備　　考
34	26	層塔、宝塔 相輪	34.4	9.2	9	—	6.5 4.0	完形。中央部で半裁する。 七輪を陽刻する。
35	—	層塔、宝塔 相輪	(14.0)	10.2	9.5	—	—	半製品。 二輪を陽刻する。
36	26	層塔、宝塔 相輪	30.7	10.8	8.7	—	7.5 3.0	半製品。 ノミ状工具による面取り痕残る。
37	26	層塔、宝塔 相輪	(19.8)	10.0	9.8	—	8.5 5.0	未製品。 ノミ状工具による面取り痕残る。
38	26	層塔、宝塔 相輪	(19.0)	9.0	8.8	—	—	未製品。 ノミ状工具による面取り痕残る。
39	26	層塔、宝塔 相輪	(26.0)	11.5	9.0	—	—	未製品。 ノミ状工具による面取り痕残る。
40	—	層塔、宝塔 相輪	(23.0)	10.0	8.5	—	—	未製品。 ノミ状工具による面取り痕残る。
41	—	層塔、宝塔 相輪	(17.8)	8.8	7.5	—	—	摩滅が著しい。
42	—	層塔、宝塔 相輪	(24.0)	11.0	9.0	—	—	幅3.5cmのノミ痕残る。
43	26	層塔、宝塔 相輪	(27.4)	11.5	10.2	—	—	かすかに幅約4.8cmのノミ痕残る。
44	26	層塔、宝塔 相輪	(27.5)	13.0	10.0	—	—	ノミ痕残る。
45	27	層塔、宝塔 笠	上辺 下辺	14.0 22.5 ＜22.0＞	14.0 (21.0) ＜22.0＞	9	—	表面中央部に外径6.5cm、内径３cm、深さ1.7cmの枘穴を穿孔する。 裏面中央部に外径６cm、内径2.5cm、深さ２cmの枘穴を穿孔する。
46	27	層塔、宝塔 笠	下辺	(21.0) ＜36.0＞	(19.5) ＜35.0＞	11	—	半製品、残存率約１／４。表面中央部に径７cmの枘穴を陰刻する。 裏面中央部に枘穴を穿孔する。
47	27	層塔・宝塔 笠？	上辺 下辺	31 20	19.6 12.5	(10.5)	—	表面に調整時のノミ痕残る。
48	27	五輪塔 火輪	上辺 下辺	12.0 (26.5) ＜30.0＞	(8.0) (22.5) ＜30.0＞	＜15.5＞	—	
49	27	層塔・宝塔 笠？	下辺	(27.0)	(25.5)	(13.5)	—	
50	27	層塔、宝塔 基礎	下辺	(29.0)	(28.0)	12.5	—	完形、半製品。
51	28	五輪塔 火輪？	下辺	(21.0)	(13.0)	(11.5)	—	半製品。
52	—	五輪塔 火輪？	下辺	(22.0)	(15.5)	(15.0)	—	頂部のみ遺存。 裏面に幅2.5cmのノミ痕残る。
53	—	五輪塔 火輪？	下辺	(19.5)	(15.5)	(18.5)	—	
54	—	層塔、宝塔 笠	下辺	(21.2)	(20.5)	9.2	—	半製品。
55	—	層塔、宝塔 笠	下辺	22.5	21.0	(9.0)	—	
56	—	層塔、宝塔 笠	下辺	(21.5)	(20.0)	10.0	—	上面中央部に径７cm、深さ２cmのホゾ穴状の窪みあり。
57	—	層塔・宝塔 笠？	一辺	(20.0)	(10.0)	(8.0)	—	
58	28	層塔・宝塔 笠？	一辺	19.0	17.0	11.5	—	多角形石塔部材。六角形か？ 切り取り時の矢穴痕残る。
59	28	宝塔 塔身		19.5	17.2	(24.0)	—	塔身中位～下位のみ残存する。 首部欠失。幅4.5cmのノミ痕残る。
60	28	宝塔 塔身	首部 塔身	b－13.0 a－17.0	b－12.0 a－17.0	30.0 c－ 7.0 d－23.0	—	完形品。半製品。 表面ほぼ全域に幅４cmの平ノミ痕残る。
61	28	宝塔 塔身	首部 首部軸 塔身	a－15.5 b－10.0 f－25.0	a－12.0 b－ 8.0 f－22.0	47.5 d－ 5.0 c－ 3.0 e－39.5	—	完形品。半製品。 表面ほぼ全域に幅約3cmの平ノミ痕残る。

※単位はcm、（　）値は残存値、＜　＞値は復元推定値を表す。

5．考察（図29）

岩盤に遺存する採石痕跡や石材をもとに採石の作業工程や技法を復元してみると、大半の石材の切り出し方法としては、目的とする大きさの石材の周囲（3～4辺）を堆積摂理面より数cm下位の地点までノミやタガネ状工具を打ち込み、底面（層界）に順番に矢を打ち込んで石材を割り離し、最終的に底面2箇所に柄の付いた棒状の矢を入れて石材を起こして切り出す採石技法が復元される。

また、石切場に遺存するその痕跡から石材の四周の溝を切り込む際には幅4～6cmの平ノミ状工具や2～5cmの丸ノミ状工具が、石材を岩盤から切り取る際には幅約6～10cmの柄のついた棒状工具の存在が考えられ、最低でも3種類の工具が使用されていたことが推定される。

さて、奈良盆地各地に分布する凝灰岩製石製品等から、二上山麓の石切場から切り出されたと推定される石材の用途としては、①石塔の各部材、②寺院や宮殿の基壇を構成する各部材、③古墳時代の石棺用石材の各部材、④火葬墓の骨蔵器を納める石櫃等が考えられる。このうち、当調査では石切遺構の大きさや形状、石材の半製品等から①の石塔の各部材を切り出した石切遺構を解明することができた。④についても大きさや形状から①の石塔とほぼ同様の石切遺構であることが推定される。②の基壇に使用された石材を考察するに際して文献には「大坂石」に関わる有益な記述がみられる。福山敏男氏の正倉院文書を基にした寺院造営にかかわる研究[7]や『延喜式』[8]によると、石工に関しては石を採石する「山作」と基壇化粧を行う作業を示す「庭作」の2者に組織的に編成されており、また、造営に際して一機に均一的な規格の石材が大量に必要とされたことが推定される。具体的な石切遺構の大きさについては、基壇外装の羽目石や葛石・束石・地覆石、基壇上面の敷石等の大きさから一辺50～100cm前後の板状の石材を切り出した石切遺構が考えられ、地覆石や敷石等の使用時の規格が小形の石材についてはその効率性から一辺100cm前後の一定の規格の石材を切り出した後で小割りされていたものと考えられる。③の組合式石棺用石材については、使用時の大きさから長辺110cm前後、短辺70cm前後の板状の石材を切り出した石切遺構が想定される。

板状石材を切り出した石切遺構と使用時の石材の大きさを比較検討するため、当石切場遺跡や穴虫石切場遺跡の石切遺構と奈良県内各地の組合式石棺用石材や基壇用石材等の大きさを表したのものが図29[9]である。長径100～150cm、短径60～80cm前後のものはAタイプの石切遺構、一辺20～70cm前後のものは、おもに石塔の各部材を切り出したB・C・Dタイプの石切遺構を示している。

図29のとおり、長・短辺とも製品に加工する際に約10cm前後の損失部が生じることを差し引いて考慮すれば、当石切場遺跡のAタイプの石切遺構は、組合式石棺の各部材や寺院・宮殿等の基壇を構成する各部材の中でも大形の石材である羽目石の規格に類似することがわかる。従って、切り出した石材を小割りせずに採石時に近い状態で使用したものであるとするならば、両者いずれの可能性も残されており、大きさによる比較だけではいずれも判断し難く、同様の石切遺構が検出されたとしても決定的な資料がない限り両者の判別は困難であることを予想させるが、両者の石材を採石

した石切遺構等の諸問題については今後、改めて研究していく必要性がある。

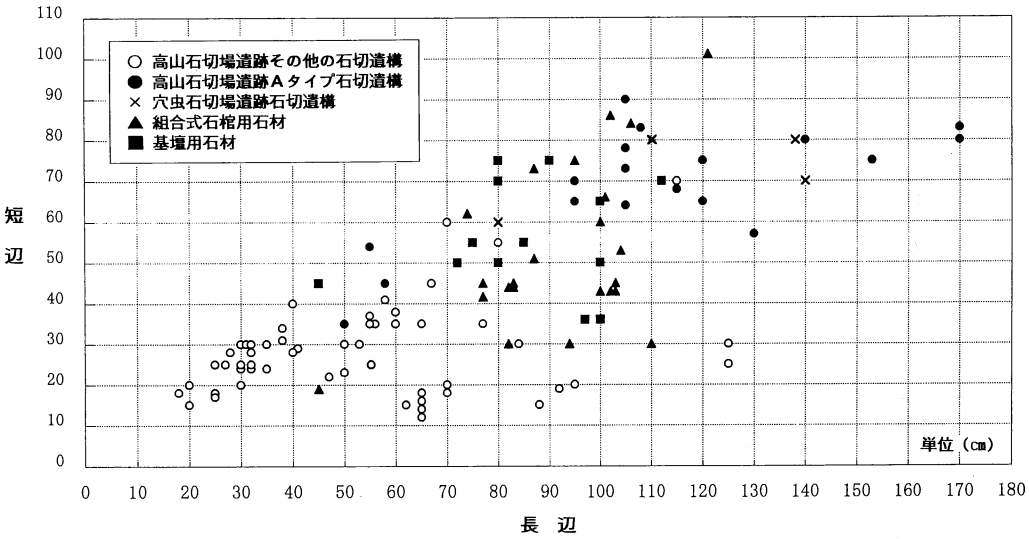


図29　高山石切場遺跡石切遺構・組合式石棺用石材・基壇用石材等法量相関図

註　釈

1）二上山地学研究会　1986「二上層群の原川累層・定ケ城累層の層序とサヌキトイドの活動時期」『地球科学』40－2　地学団体研究会

2）松田真一　1981『穴虫石切場遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編

3）奥田尚　1994「畿内を中心とした家形石棺の石材」『橿原考古学研究所論集』第12　吉川弘文館

4）和田晴吾　1983「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』石川考古学研究会

5）前掲註2

6）前掲註2

7）福山敏男　1980「奈良時代における法華寺の造営」『日本建築史の研究』　綜芸舎

8）『延喜式』（巻三十四）木工寮「車載」の条に大坂石の記載があり、「作石」の条に工人一人あたりの採石寸法等の仕事量の記載がみられる。

9）高山石切場遺跡の石切遺構Aタイプは内寸法量を表し、それ以外は全て外寸法量を表した。組合式石棺用石材や基壇用石材の計測値は報告書に記載されているものについてはそれによったが、とくに組合式石棺用石材等の現存するもので実測可能なものについては実測値を表した。

なお、組合式石棺用石材や基壇用石材とも奈良県下に所在する全ての石材の数値を表したものではなく、資料的にも不十分であるので、今後、石材の厚みも含めて稿を改めて検討したい。

V　まとめ

以上、高山火葬墓と高山石切場遺跡の発掘調査について報告してきたが、ここでは、両遺跡の特徴と意義をまとめるとともに、これに伴う幾つかの問題について触れて結びとしたい。

【高山火葬墓】

高山火葬墓は、南北105㎝、東西115㎝、高さ15㎝前後の外容器として使用された木櫃内に２点の骨蔵器と曲物や袋状の収納容器が推定される容器内の計３箇所に火葬骨を納めた奈良時代中頃（８世紀中頃）の合葬墓である。外容器の木櫃の四方を木炭層で覆う一種の木炭槨を形成するものではないが、木櫃の側面以外の上面と下面は薄く木炭層で被覆されており、比較的丁寧な構造を持つ。

木櫃の内外の４箇所から、14枚（銭貨１群）、９枚（銭貨２群）、４枚（銭貨３群）、４枚（銭貨４群）の４群に別れて和同開珎と推定される合計31枚の大量の銭貨が密着して出土したのを始め、鉄片５点や木櫃の断片２点、木櫃上面の埋土層中からは土師器鍋・壺・皿等の５点の土器と伴に銅製の銙帯金具の丸鞆（表裏金具一対）１点が出土した。

残念ながら木櫃内の２点の骨蔵器内に遺存していた火葬骨粉と中央部に分布していた火葬骨粉は粉末状になっており、鑑定に耐え得るものではなかったため、３者の血縁関係等を科学的に解明することはできなかったが、文献や墓誌では夫婦間で最後の死者が亡くなってから前に亡くなった人物と正式に埋葬する合葬例が多々みられることから、具体的な期間は不明であるが、至近的な時間の範囲内、あるいは、同時期で死亡した夫婦ないしは、血縁で結ばれた近親者２～３人の火葬骨を納骨施設内に埋葬した合葬墓と解釈しておきたい。この埋葬人数や性別、年齢構成、血縁関係の有無などの被葬者の関係については今後の科学技術の進歩に委ねることとしたい。

次に、奈良時代の火葬墓としては実に多くの遺物が出土している。なかでも、同じ納骨施設内に複数の被葬者を埋葬する合葬墓ということが絡むのかもしれないが、31枚もの多量の銭貨が納められており、量的には奈良時代の火葬墓から出土する銭貨のなかでも最多であると思われる。

遺物の出土位置は木櫃（上蓋）の上側と木櫃の中、木櫃（底板）下側の３箇所に識別され、とくに、銭貨や鉄片は同じ遺物でもそれぞれ出土位置が明確に区別されていた。このことは、同じ遺物でも使用される場所によって遺物の持つ意味が異なるものと解釈することができ、従来の研究のとおり、全てが単なる副葬品として安置されたのではなく、地鎮や結界等の様々な呪術的な意味合いをもつものと考えられる。これらの個々の遺物の祭祀の対象を把握することは困難であるが、一連の葬送儀礼や造墓の過程の中で様々な意味合いを付与して埋納されたものと考えられる。

これらの諸条件から導き出される当火葬墓の被葬者像は、火葬墓からは時代が下ることもあってか、墓誌を伴出していないため、被葬者名の特定には至らなかったが、腰帯につける丸鞆や巡方等の２点の銙帯金具の大きさや形状、材質が銅製であることから、出土遺物の上では複数の被葬者の中には奈良時代の６～７位の官人層が含まれていることが推察され、遺物の出土状況等から３箇所

に分布する火葬骨の中では中央部に納骨された人物が主人公である可能性が強い。

また、墓地のあり方としては、2人ないしは3人の複数の火葬骨を一カ所の納骨施設に埋葬した合葬墓であるという要因が影響するのかもしれないが、数基の複数の火葬墓が群集して分布するという家族墓的な傾向は看取されず、当火葬墓1基のみの単独立地であるということから、少なくとも当丘陵域を墓域として占有することが可能であった（許された）階層の人物と思われる。

これまで飛鳥時代から奈良時代の火葬骨の合葬例について文献や墓誌等でその存在が断片的に知られていたものの、発掘調査で考古学的に確認した事例は少なく、古代の火葬墓を研究する上で貴重な資料を得ることができた。

今後の課題としては、全体的には従来からの懸案である公葬地か否か、奈良県と大阪府の領域を越えて多くの火葬墓が分布する二上山麓をめぐる葬地としての問題を始め、複数の銭貨や鉄片、銙帯金具等の出土状況の差異が暗示する遺物に込められた意味についても、今後、他の火葬墓遺構の遺物の出土事例とも検討しながら改めて考究していく必要性がある。

【高山石切場遺跡】

高山石切場遺跡は二上山北麓の上部ドンズルボー層域の丘陵尾根上に位置する凝灰岩製の中世石塔製作を主とした石切場である。凝灰岩の岩盤層が存在する丘陵頂部から丘陵斜面の約800㎡にわたって大規模な石切遺構を検出した。幸いにも切り出してほどなく土砂等に覆われていたために全体的に石切遺構の輪郭は鮮明であり、遺存状態も良好であった。石切遺構は堆積摂理面ごとに切り出されたために、最終的に切り出しを終えた採石層以前の堆積摂理面では消滅した箇所が多く、平面的に凝灰岩の層域が遺存する箇所でも重複して切り出されたために採石時の形状を止めないものがほとんどであるが、約100箇所で仕切り部の遺存する切出形態の識別可能な石切遺構を検出した。

これらの石切遺構は、平面形状や大きさから①長辺100～150㎝、短辺60～80㎝、厚さ20～30㎝前後の大形の板状石材を切り出したもの（Aタイプ）、②一辺30～60㎝、厚さ15～30㎝の前後の小形の方形状の石材を切り出したもの（Bタイプ）、③直径20～30㎝、厚さ15～30㎝前後の三角形・六角形等の多角形状や円形状の石材を切り出した（Cタイプ）、④直径10～20㎝、長さ100㎝前後の棒状の石材を切り出したもの（Dタイプ）の大別して4つの形状のタイプに分類される。

石切遺構の形状や法量、岩盤に遺存していた石材、堆積土中から出土した石材の未製品等から②～④を含めたほとんどが層塔や宝塔、五輪塔等の石塔の各部材を切り出した石切遺構と考えられる。これらの石切遺構は、堆積土中から出土した石塔の各部材の未製品や組み合わせ等から13世紀中頃から13世紀後半の鎌倉時代に形成された石切遺構と考えられ、その存続時期は堆積土中から出土した古代の土器片から中世以前に溯る可能性がある。

当調査の意義は、中世の石塔製作にあたって一部の石塔については石材の採掘から製作までの製作過程を復元・把握することができたことである。なかでも層塔や宝塔の相輪については岩盤に遺存していた石材から、切り出しから製品に加工するまでの一連の製作過程を完全に復元することが

できた。また、石切場から出土した石塔の完成度が高いことから採石から完成品に仕上げるまでの作業工程を同一の場所で行っていたことを解明できたことも重要な意義があった。

当石切場遺跡付近の穴虫石切場遺跡でも同様に宝篋印塔の相輪が完成品に近い状態で出土していることからみても、とくに田尻峠北方を中心とした二上山麓付近一帯の石切場では、中世の石塔類は、搬出上の軽量化を図るためか、現地で完成品、あるいは、完成品に近い状態に加工して直接消費地か中継地に輸送していたものと考えられる。具体的な石材の搬出ルートとしては、石切場所在丘陵の約300m南東に「太子葬送の道」想定地やこの道に接して大和川に至る中規模の河川（現在の竹田川）があることから、これらのルートを通じて各地に搬出されたものと考えられる。

さて、中世の石塔類を切り出した数種の石切遺構は穴虫石切場遺跡では検出されなかったが、高山石切場遺跡で検出した板状石材を切り出したAタイプの石切遺構と穴虫石切場遺跡で検出された板状石材を切り出した石切遺構の形状や大きさ、切り出し方法等が極めて類似していることから、両者はおそらく同種の用途に加工、利用される石材の採石を目的として切り出された石切遺構と推定される。穴虫石切場遺跡では、この種の板状石材の石切遺構を大きさや形状から古墳時代の組合式石棺材を切り出した石切遺構である可能性を示唆されている。

石切遺構の形状や大きさから高山石切場遺跡の場合も同様にその可能性は否定できないものの、考察結果のとおり、古代にかかわらず寺院の基壇等の建築用石材を切り出した石切遺構である可能性も多々残されており、例えば、石切遺構の堆積土中から帰属時期の明確な古墳時代の土器や縄掛突起を削り出した家形石棺の未製品等の古墳時代を傍証する考古学的資料が出土していない以上、この種の石切遺構を古墳時代の組合式石棺用石材を切り出した石切遺構と証明することは難しい。

ただ、当石切場遺跡出土遺物の中でも凝灰岩の採石・加工を物語る唯一の考古遺物として、板状石材を採石したAタイプの石切遺構が集中的に分布する石切遺構№7からは採石時に使用されたと推定される袋状鉄斧1点が検出されている。現段階では形態的な特徴から詳細な帰属時期は不明であるが、将来的に鉄素材の分析により、確実にある程度の年代が判明する時期がくれば、当石切遺構の帰属時期や使用用途を探るうえで重要な資料となることであろう。

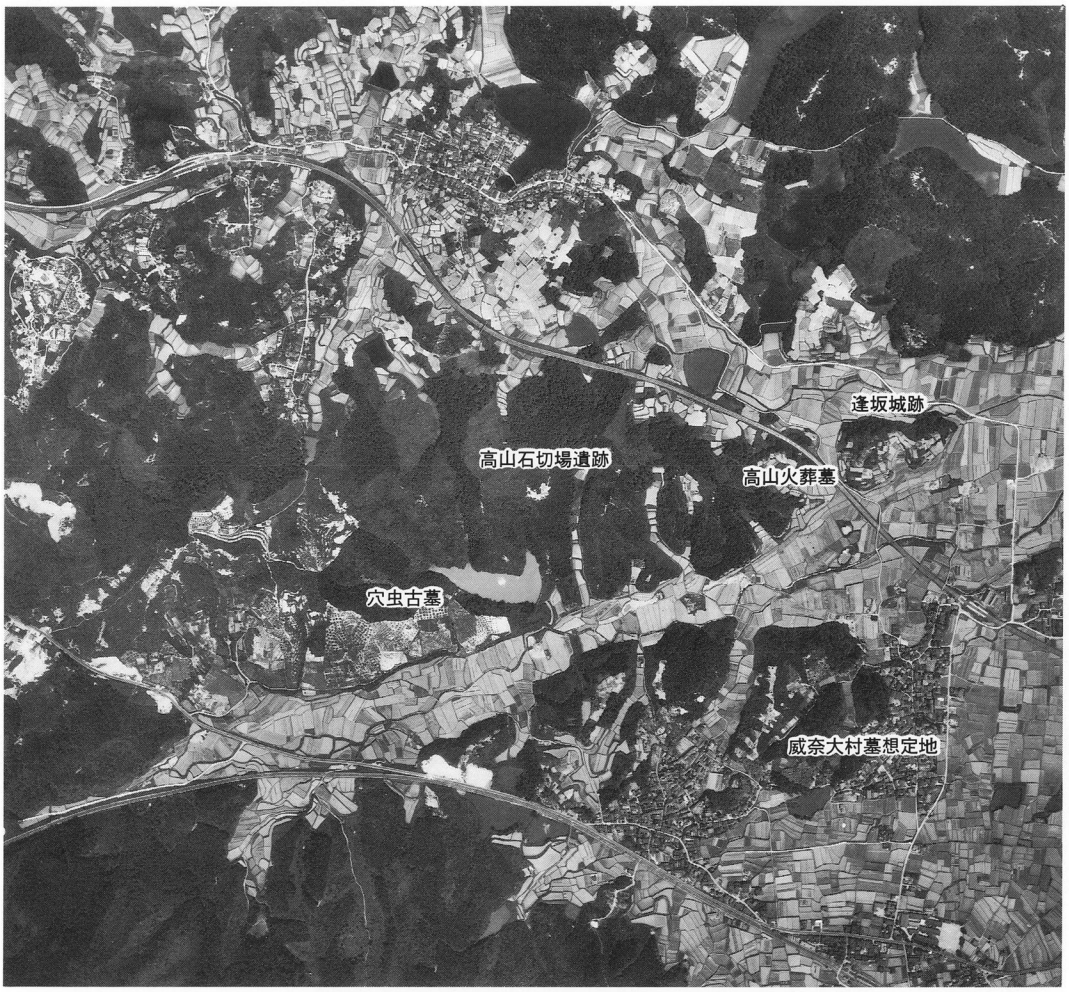
ともあれ、県下はもとより、西日本においても凝灰岩の層域が分布する二上山麓でこれほど大規模な多種の石切遺構を検出した石切場跡の発掘調査の事例はなく、貴重な資料を得ることができた。

二上山麓に分布する各石切場跡と奈良県内および近隣府県から出土する古墳時代の刳抜式家形石棺や組合式石棺等の石棺用石材の岩質の比較同定作業を始め、採石方法や石工集団等については積極的に研究が行われているが、飛鳥時代以降の寺院や宮殿の基壇等に使用された石材の岩質との比較同定作業は充分には進んでおらず、具体的な採石方法等についても不明なところが多い。

今後の課題としては、これらの基壇等に使用された石材の比較同定作業を含め、高山石切場遺跡出土石塔の岩質と県下に所在する凝灰岩製の石塔の岩質との比較同定作業を進めて行く必要性があり、石塔の生産から流通、石工の生活域といった問題も今後の大きな課題である。

図　版

図版1　高山火葬墓・高山石切場遺跡



1．高山火葬墓・高山石切場遺跡周辺航空写真（昭和36年撮影）

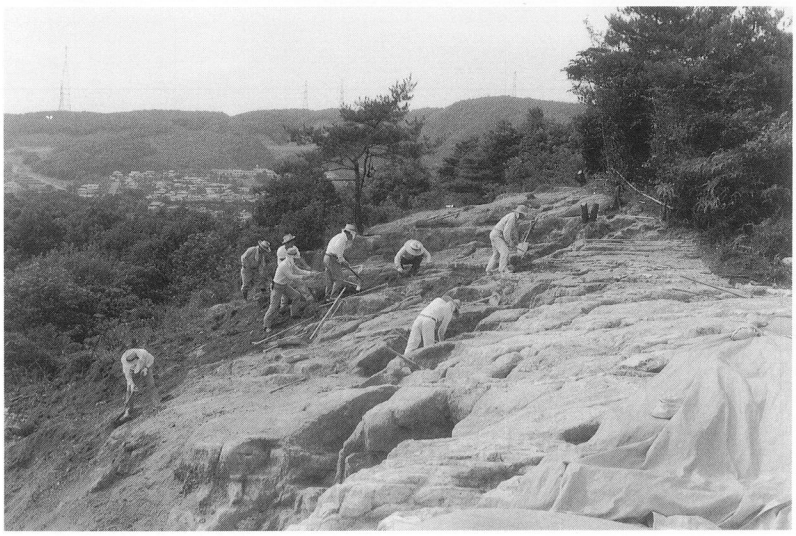
2．高山火葬墓所在丘陵尾根遠景（南上空から）

3．高山石切場遺跡全景（南上空から）

図版2　高山火葬墓・高山石切場遺跡

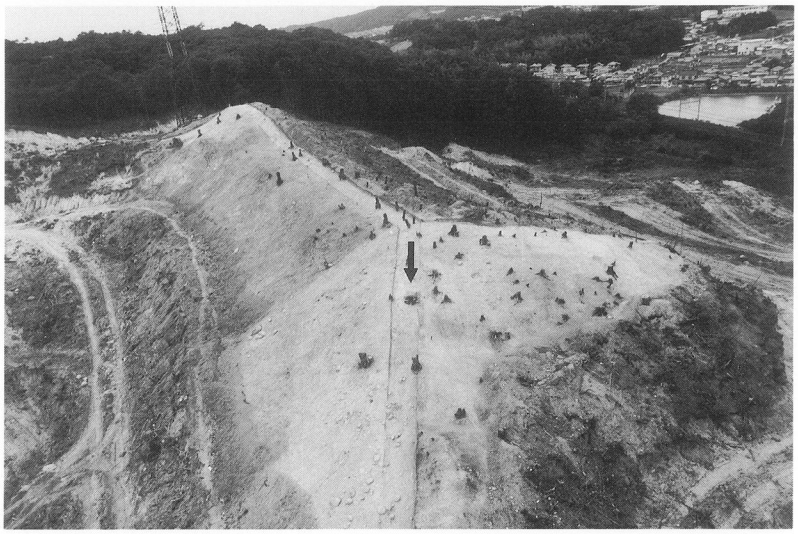
1．高山火葬墓調査風景
（北西から）

2．高山火葬墓調査風景
矢印先が火葬墓
（南西から）



3．高山石切場遺跡調査
風景（南東から）

1．高山火葬墓所在
丘陵尾根遠景
中央上が二上山
矢印先が火葬墓
（北西上空から）

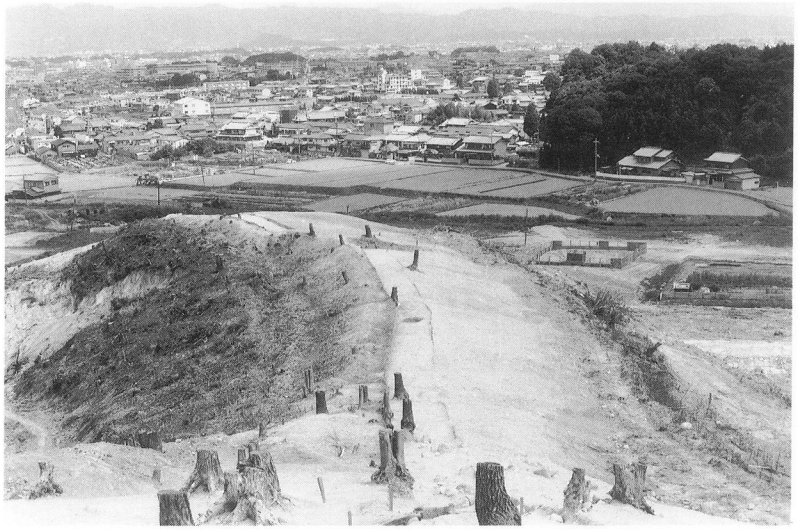


2．高山火葬墓所在
丘陵尾根近景
矢印先が火葬墓
（南東上空から）

3．高山火葬墓所在
丘陵尾根近景
矢印先が火葬墓
（南西上空から）

図版4　高山火葬墓

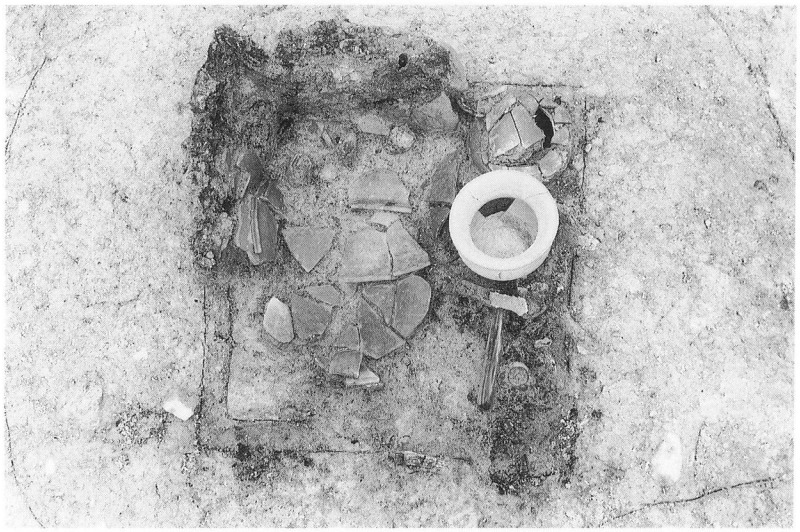
1．高山火葬墓遠景
矢印先が火葬墓
（南東から）



2．高山火葬墓所在丘陵
から南東方向を望む
中央の左上が耳成山
（北西から）

3．表層除去後及び表層
直下土器の検出状況
（南東から）

1．表層含有土器除去後及び木櫃上面を被覆する炭層塊の検出状況（南東上から）



2．木櫃上面崩壊土層中含有土器及び骨蔵器・木櫃痕跡の検出状況（南東上から）

3．木櫃上面崩壊土層中含有の丸鞆〔10〕出土状況（北西上から）

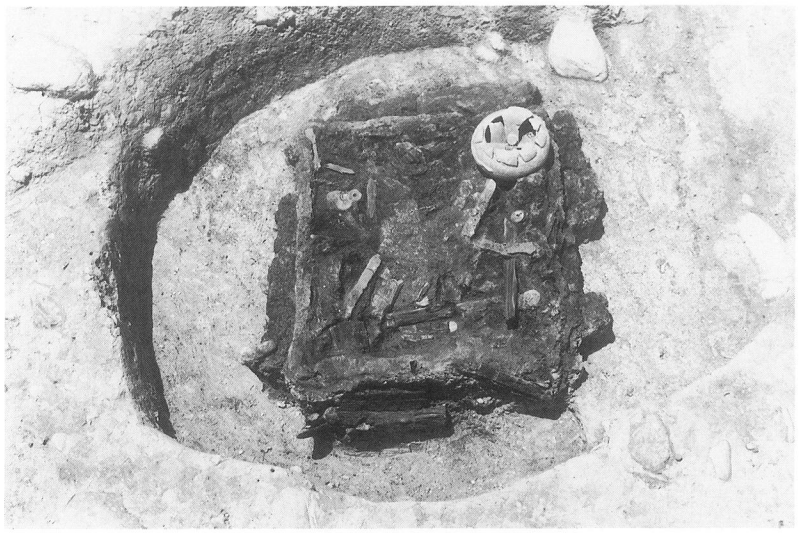
図版6　高山火葬墓

1．木櫃上面崩壊土層
除去後の検出状況
左上隅が木櫃上面
を被覆する炭層塊
（南東上から）

2．木櫃上面崩壊土層
除去後の検出状況
（北東から）

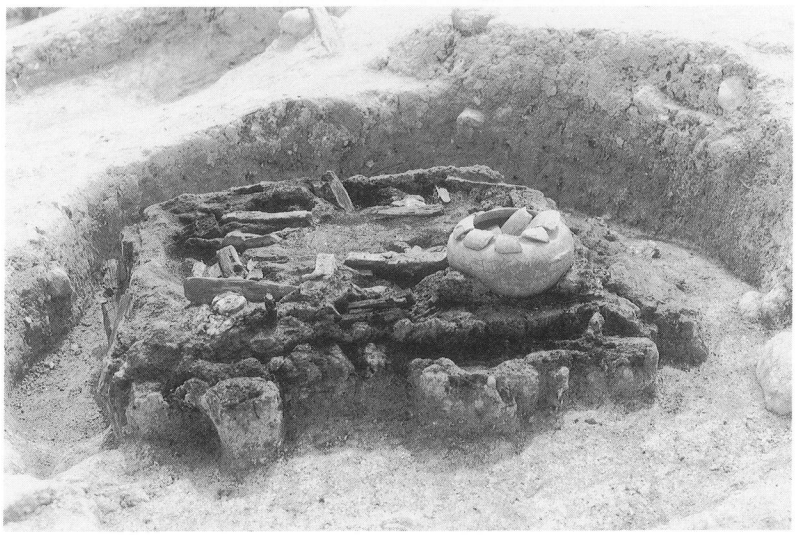
3．炭層塊除去後及び
墓廣内埋土・木櫃
等火葬墓完掘状況
（南東から）

図版7　高山火葬墓



1．火葬墓完掘状況
（南東から）

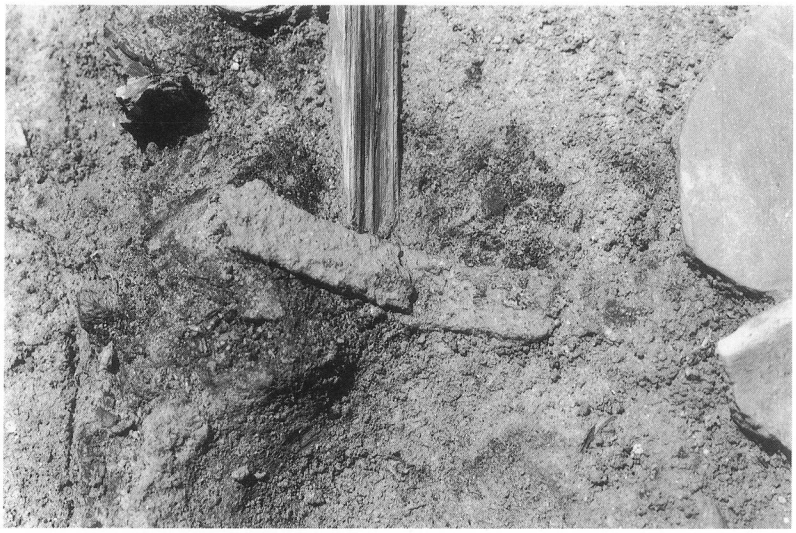
2．火葬墓完掘状況
（北西上から）



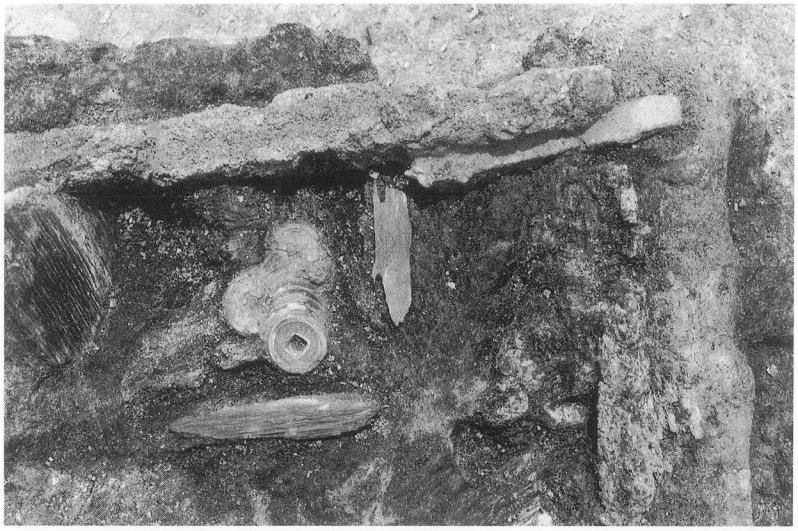
3．火葬墓完掘状況
（北東横から）

1．鉄片〔12〕出土状況
（東から）

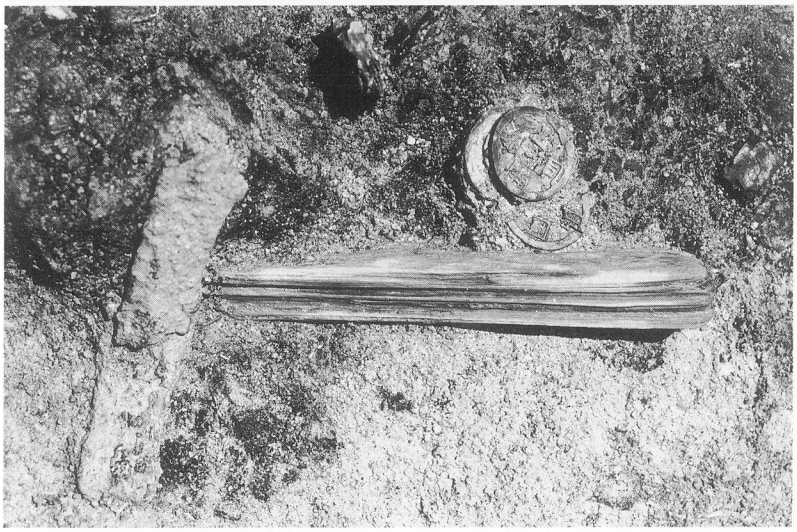
2．鉄片〔14〕出土状況
（東から）



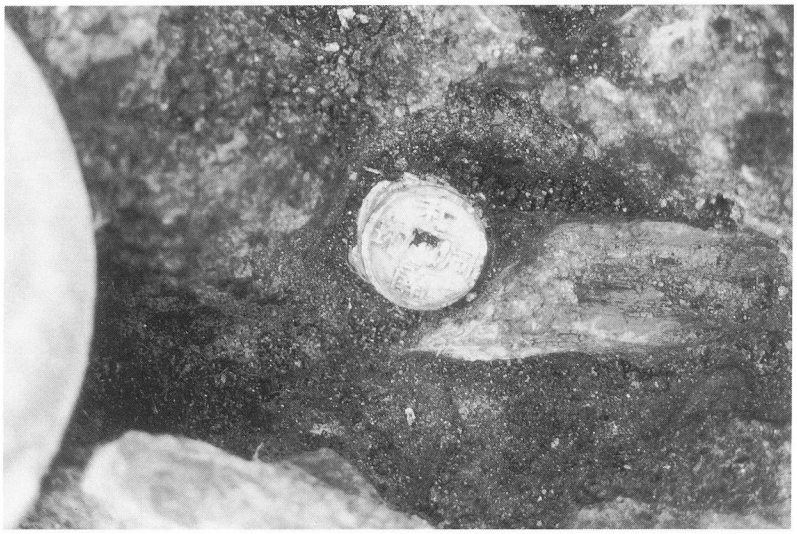
3．鉄片〔16〕出土状況
（南から）



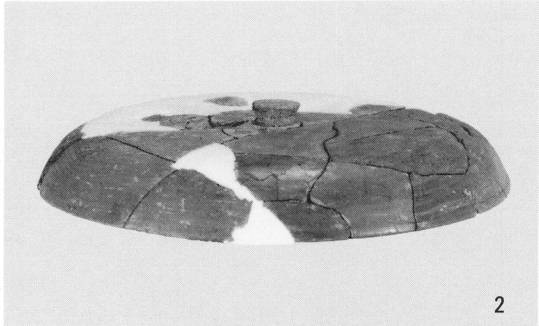
1．木 櫃 片〔26・27〕
　銭貨1群〔25〕
　鉄　　片〔13〕
　（東から）

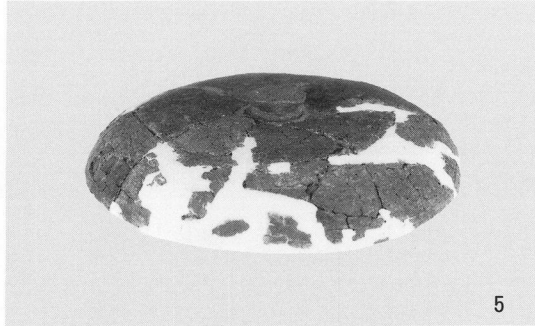


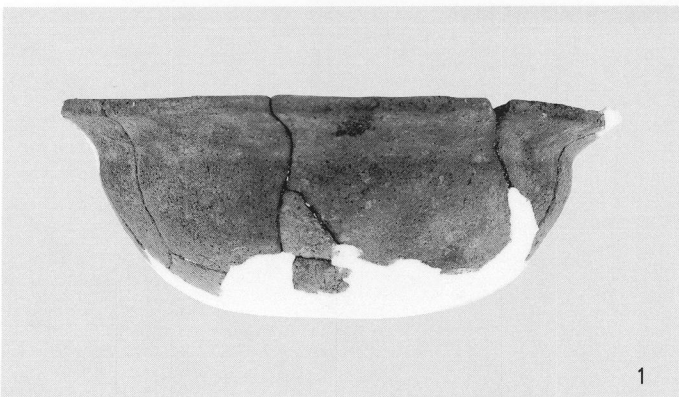
2．銭貨4群〔17・18〕
　銭貨4群〔22・23〕
　鉄　　片〔16〕
　木　　片〔28〕
　出土状況
　（西から）

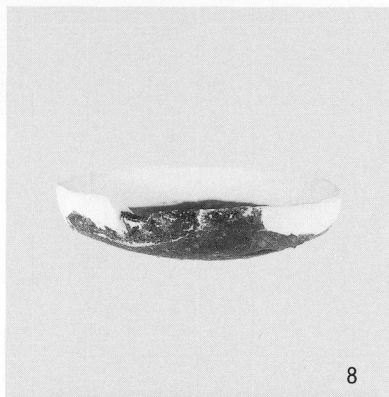


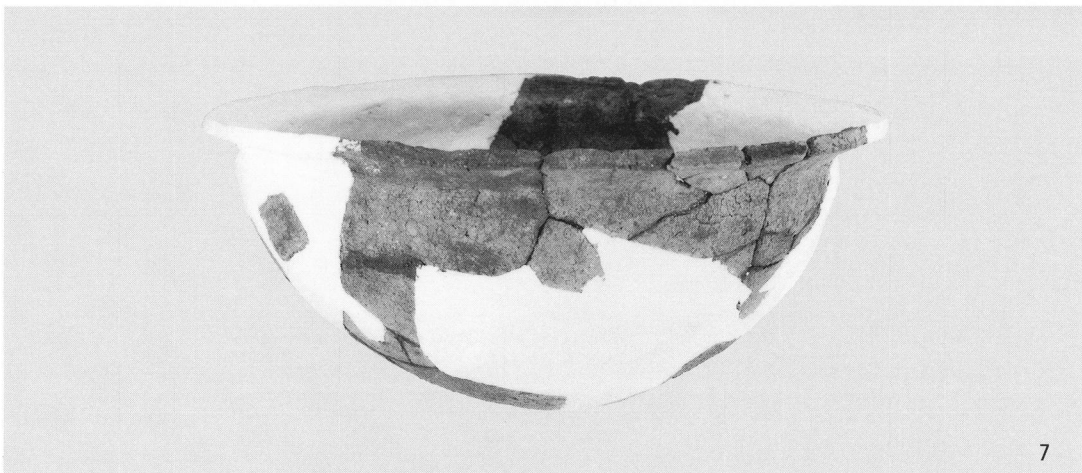
3．銭貨3群〔19・20〕
　木片〔28〕出土状況
　（西から）



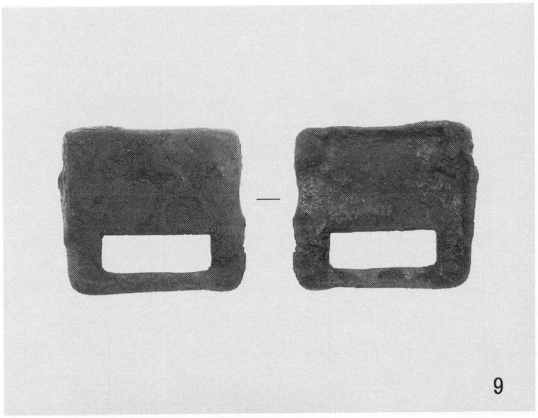


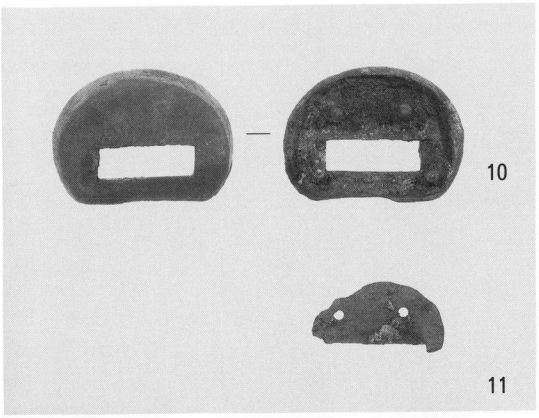


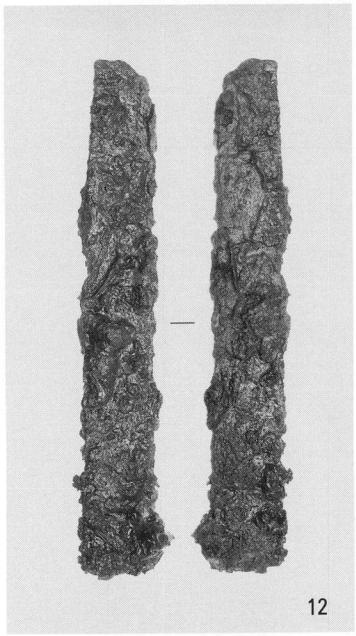


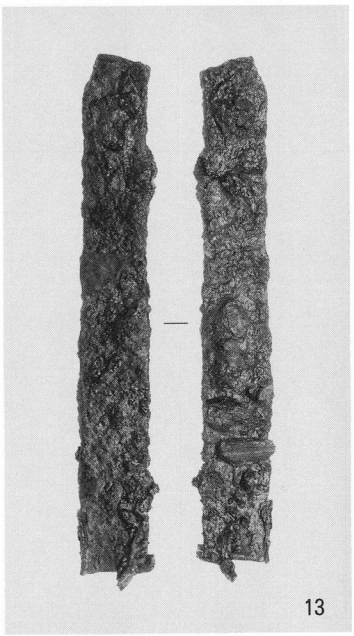


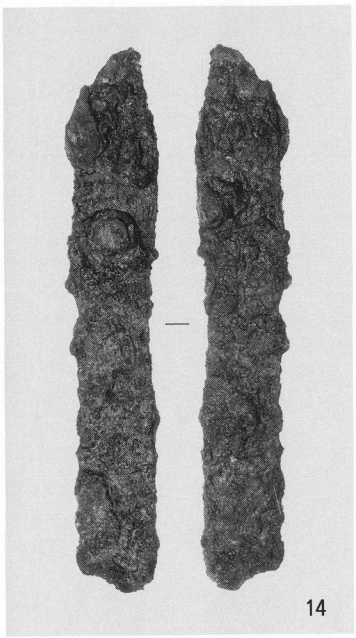
高山火葬墓出土（1・2・3・5・6・7・8）

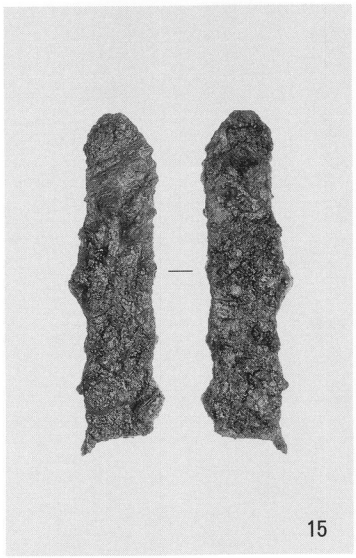


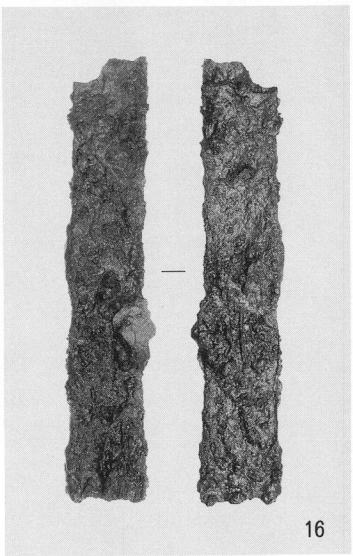




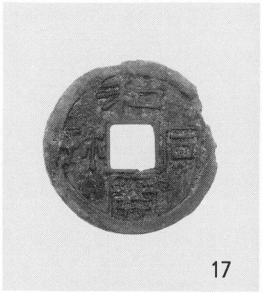


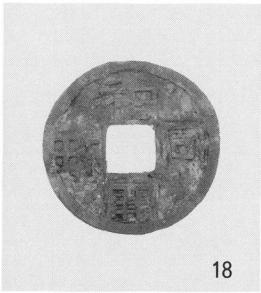


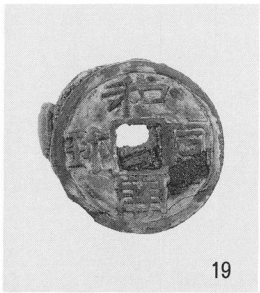


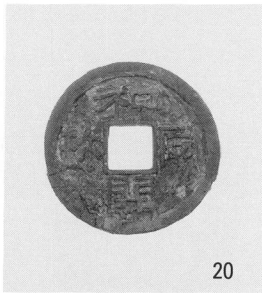


高山火葬墓出土（9～16）

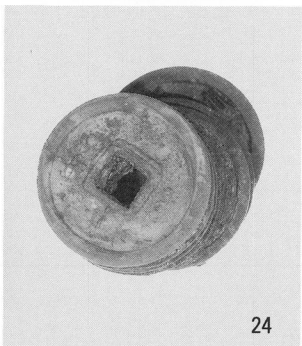

17

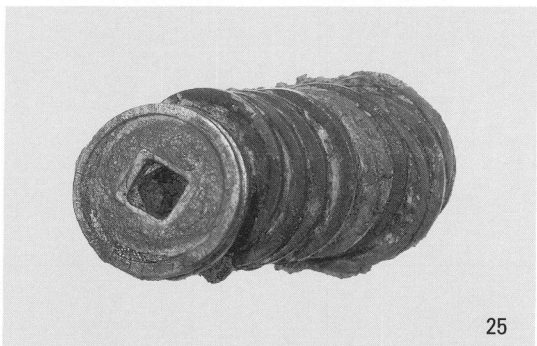

18

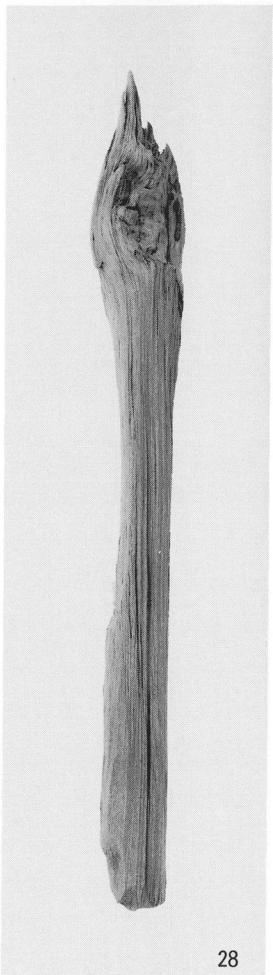

19

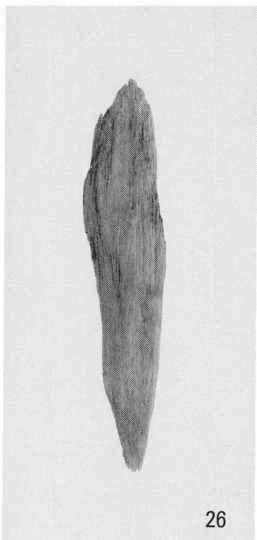

20

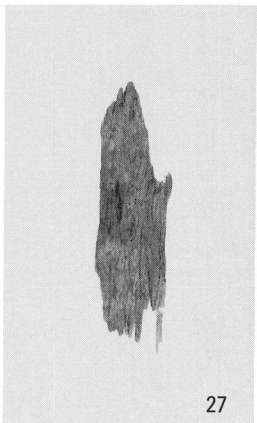
21


24

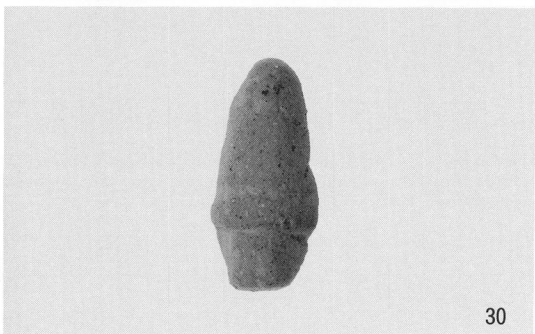

25


28


26

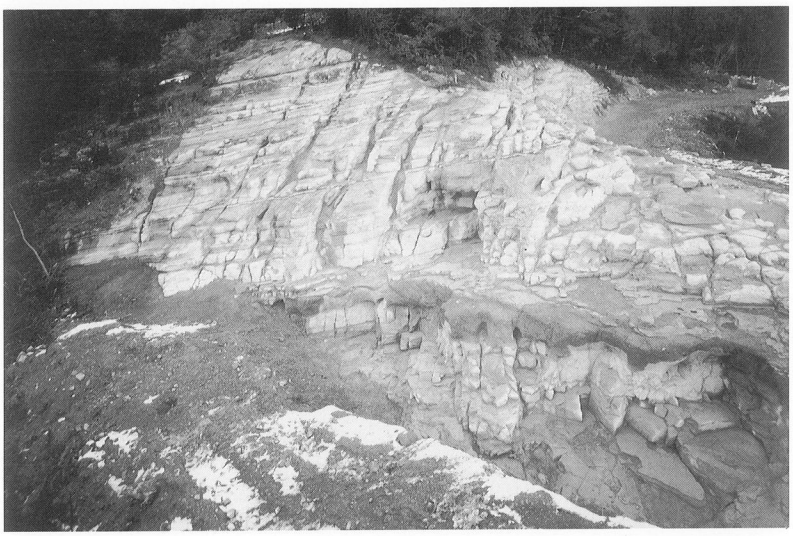

27

29

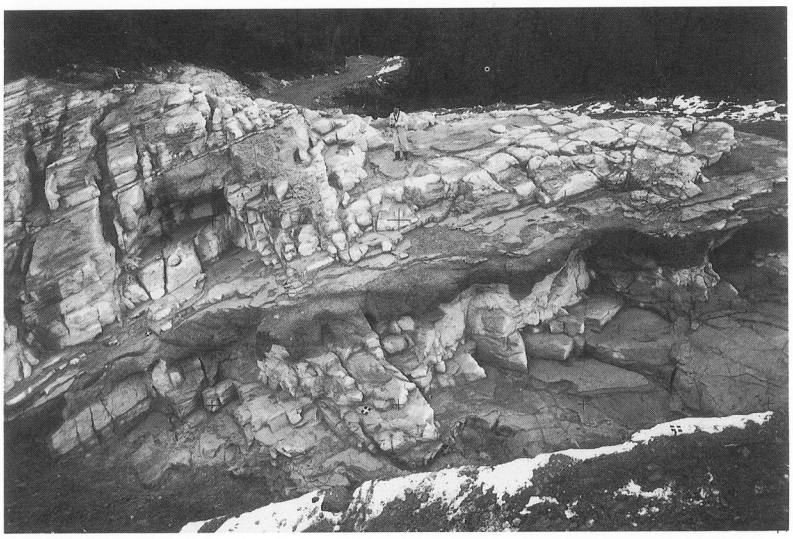

30

17～21・24～28は高山火葬墓出土、29・30は火葬墓所在丘陵尾根出土

1．石切場遺跡全景
（南東上空から）



2．石切場遺跡西側
（南西上空から）

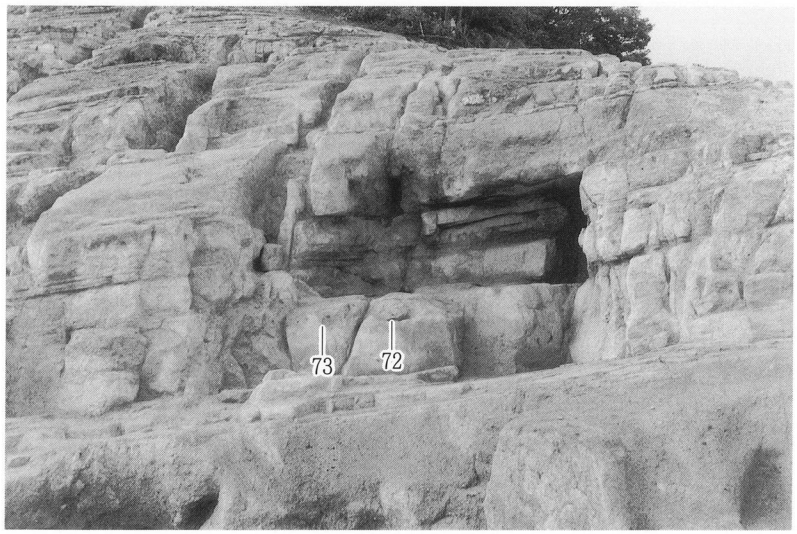


3．石切場遺跡西側
（西上空から）

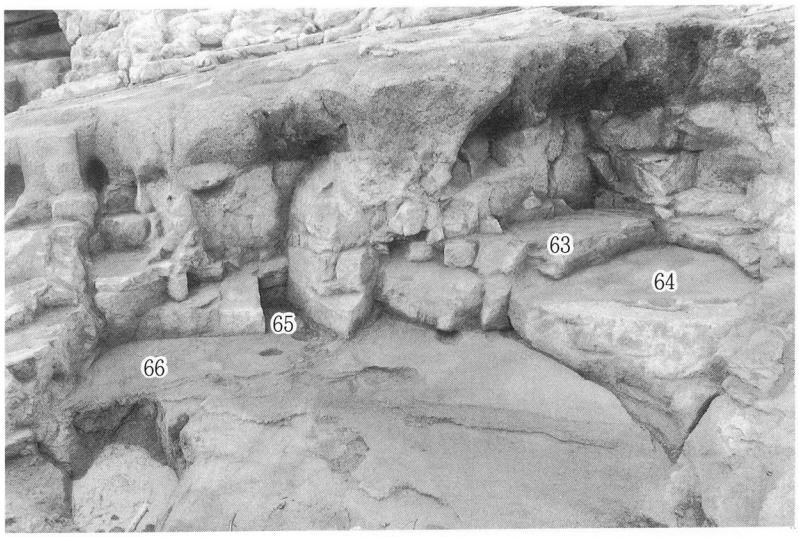
図版14　高山石切場遺跡

1．石切場遺跡西側
（南から）

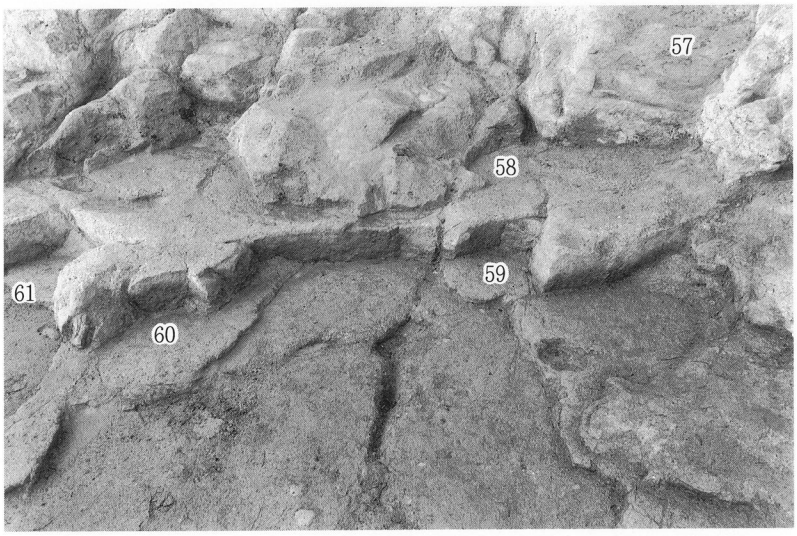
2．石切場遺跡西側
（南西から）



3．石切場遺跡西側
（南西から）



1．石切場遺跡西側
（南から）

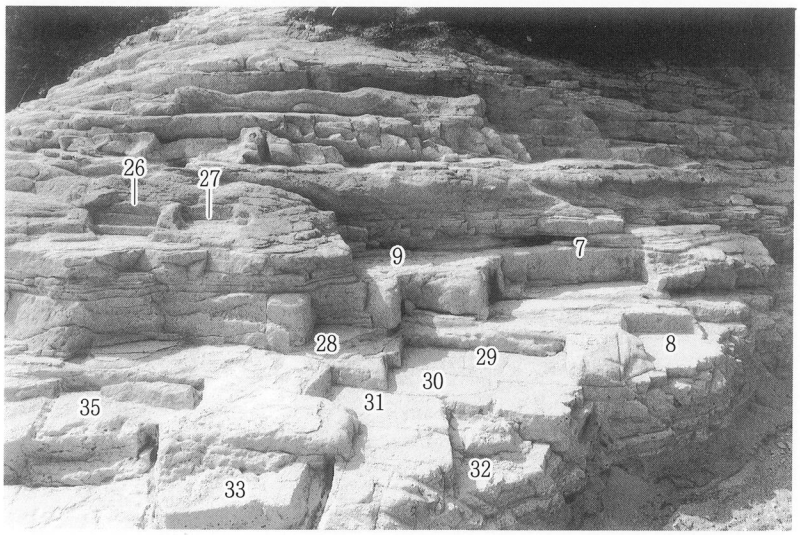


2．石切場遺跡西側
（南西から）

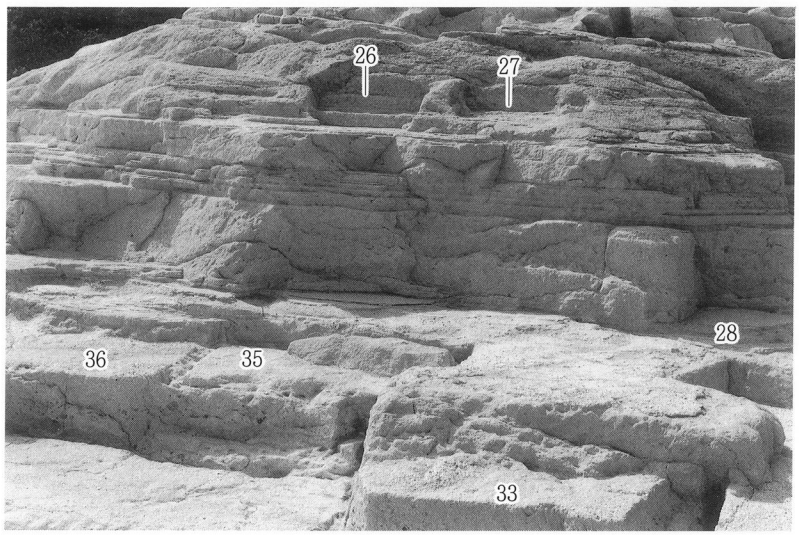
3．石切場遺跡西側
（南西から）

図版16　高山石切場遺跡

1．石切場遺跡東側
（東上空から）

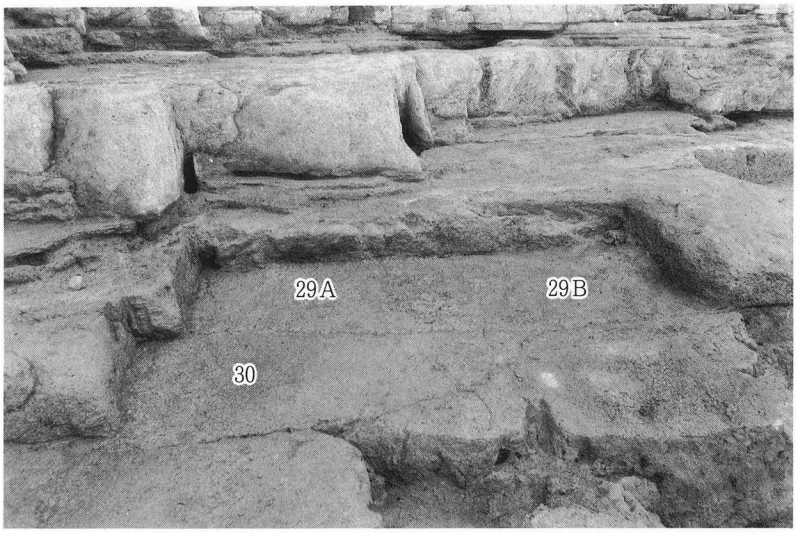


2．石切場遺跡東側
（南東から）



3．石切場遺跡東側
（南東から）

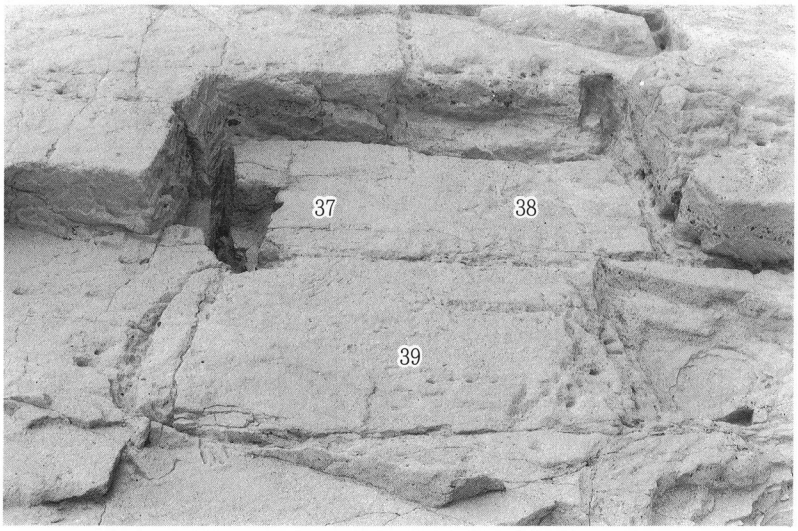
1．石切遺構No.8
（南東から）



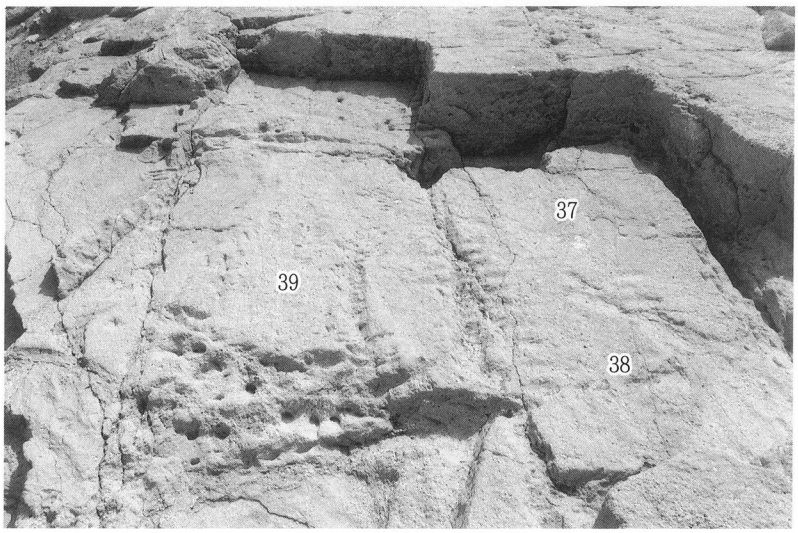
2．石切遺構No.29A、
No.29B、No.30
（南東から）

3．石切遺構No.31
（北東から）

図版18　高山石切場遺跡



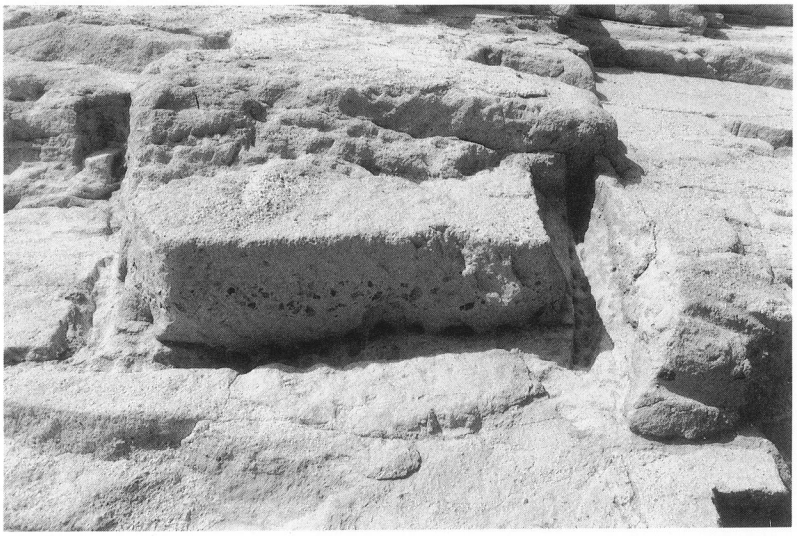
1．石切遺跡No.37、No.38、No.39（南東から）



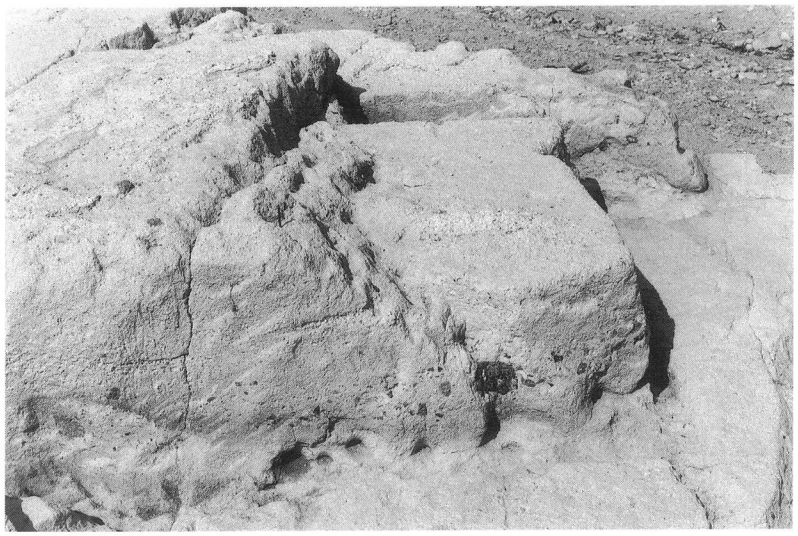
2．石切遺跡No.37、No.38、No.39（北東から）

3．石切遺跡No.37壁面（北東から）

1．石切遺跡No.42
（北東から）



2．石切遺構No.33
（南東から）

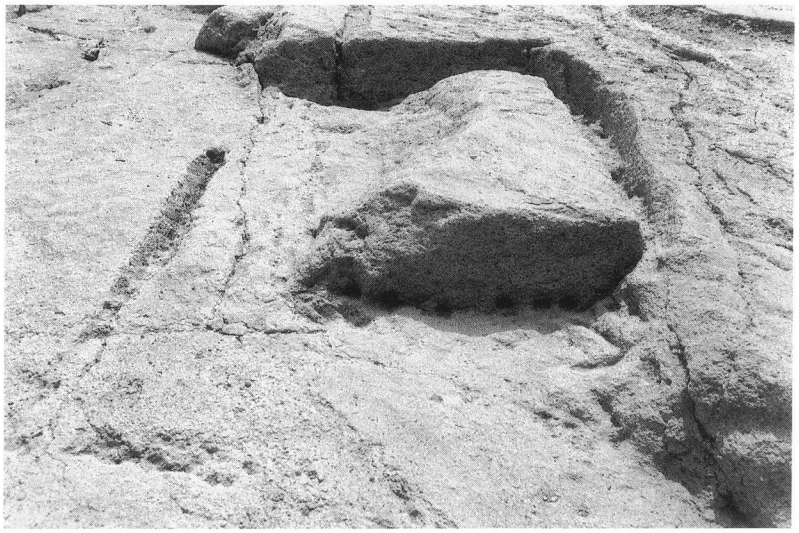


3．石切遺構No.33
（南西から）

図版20　高山石切場遺跡

1．石切遺構No.35
（南東から）

2．石切遺構No.45
（南東から）



3．石切遺構No.45
（北東から）

1．石切遺構No.76
（北東上から）

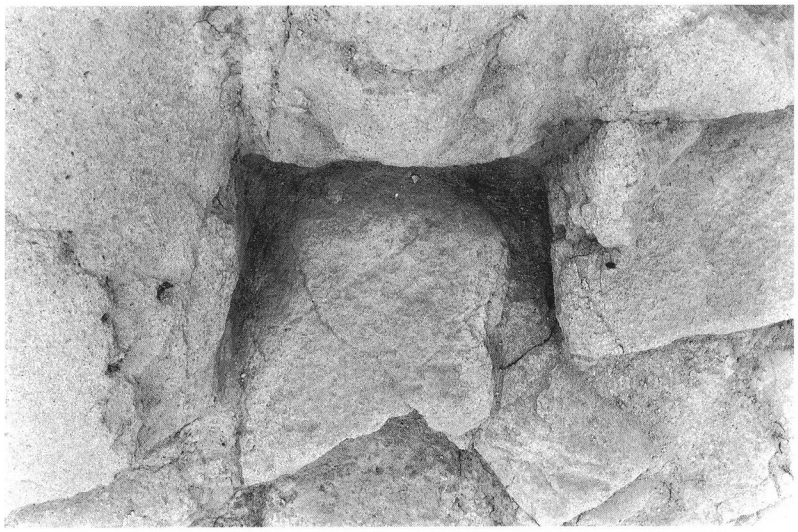
2．石切遺構No.76
（南西から）

3．石切遺構No.76
（東から）

1．石切遺構No.1
（南東から）

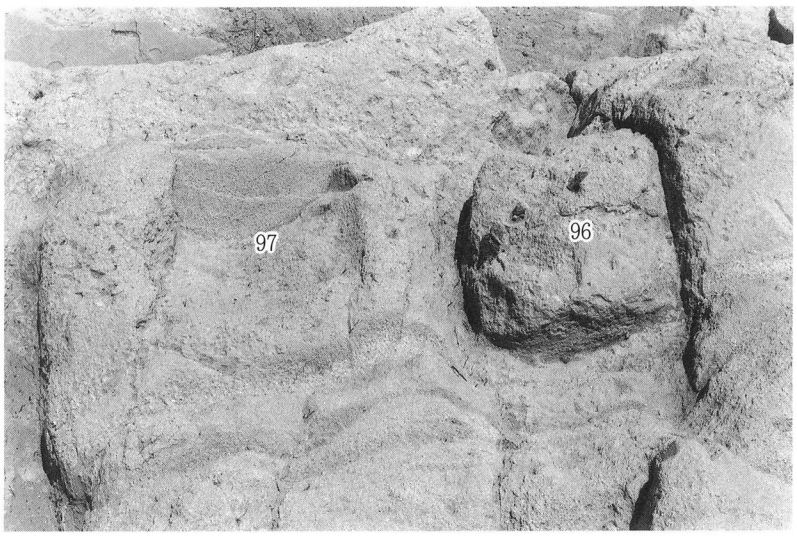
2．石切遺構No.84
（北上から）

3．石切遺構No.84
（西から）



1．石切遺構No.23
（南西上から）

2．石切遺構No.68
（東から）



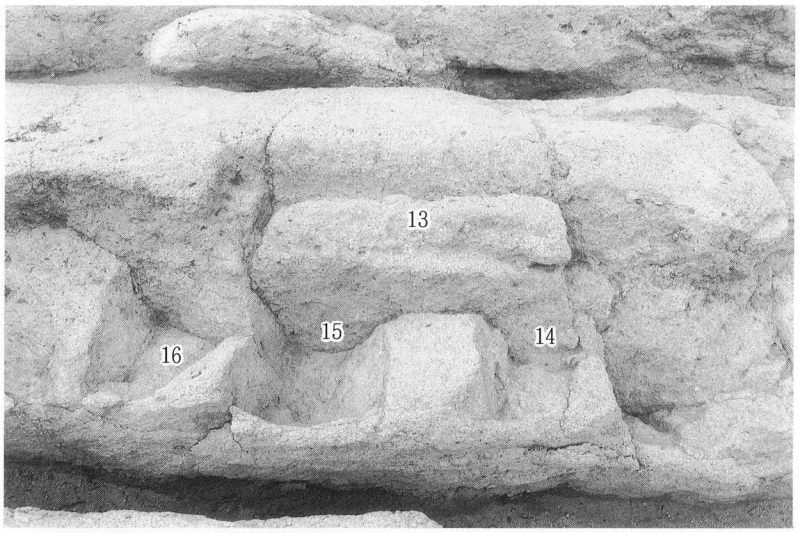
3．石切遺構No.96、No.97
（北東上から）

図版24　高山石切場遺跡

1．石切遺構No.32
（北西から）

2．石切遺構No.56
（南東から）

3．石切遺構No.56壁面
（南東から）

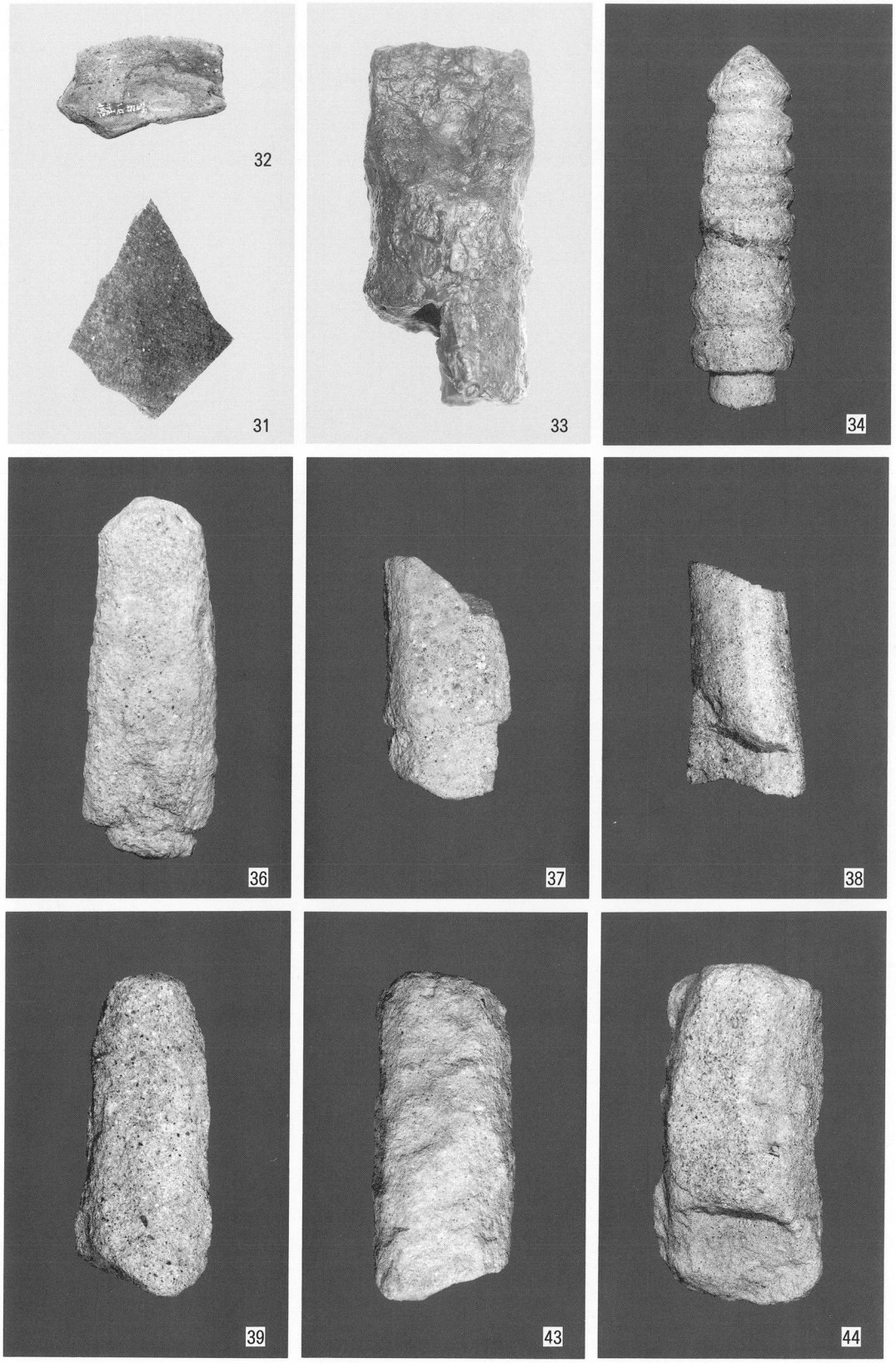


1．石切遺構No.13、No.14、No.15、No.16（南東から）

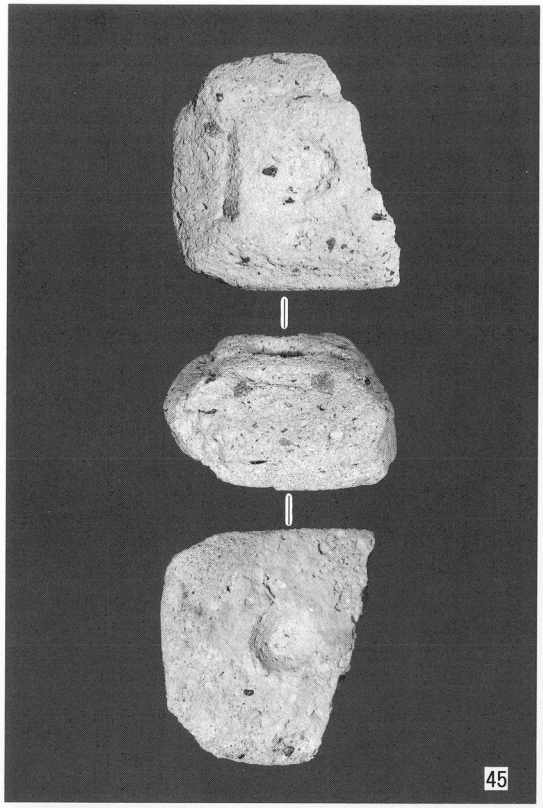
2．石切遺構No.47（南上から）

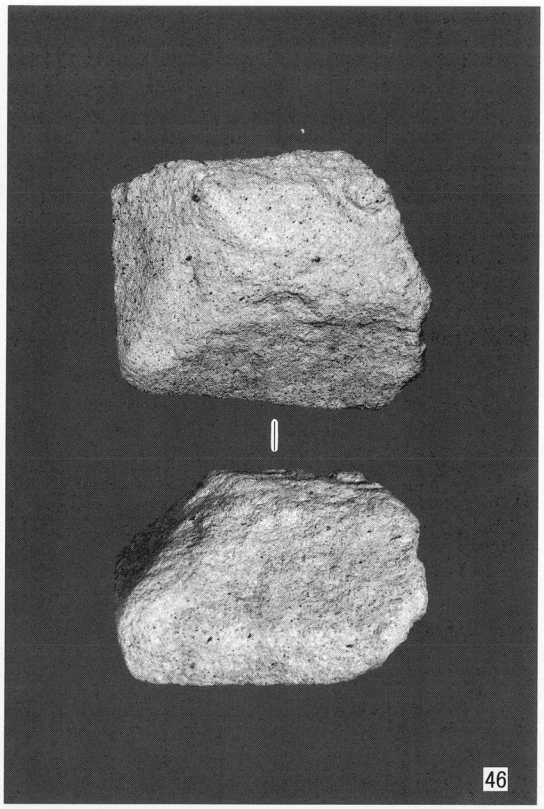
3．石切遺構No.61（南西から）

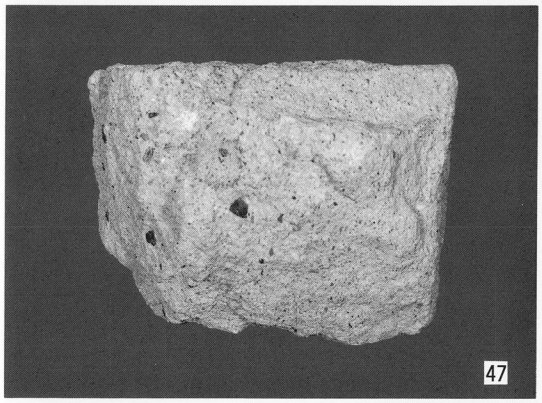
図版26　高山石切場遺跡〔遺物〕

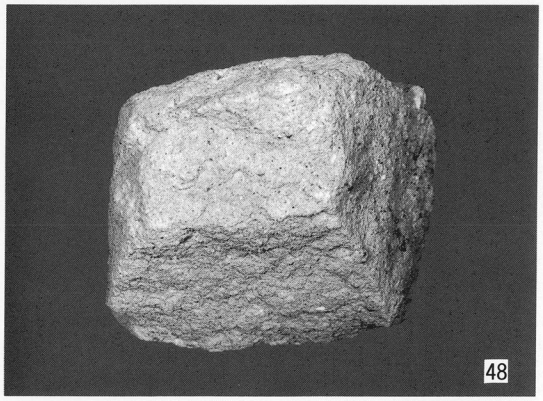


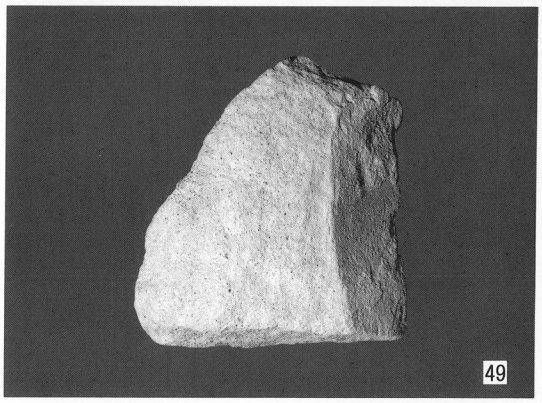
31・32は表層出土、33は石切遺構No.7出土、34・36・37・38・39・43・44は石切場遺跡西側出土

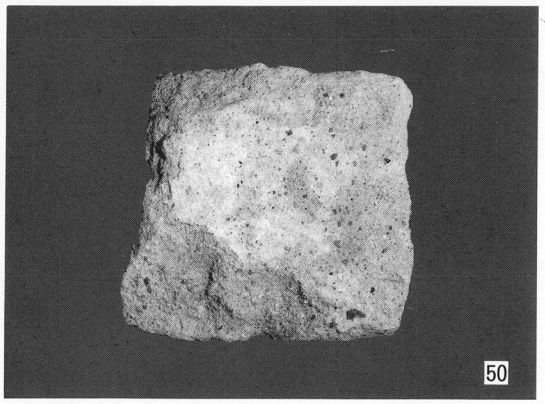




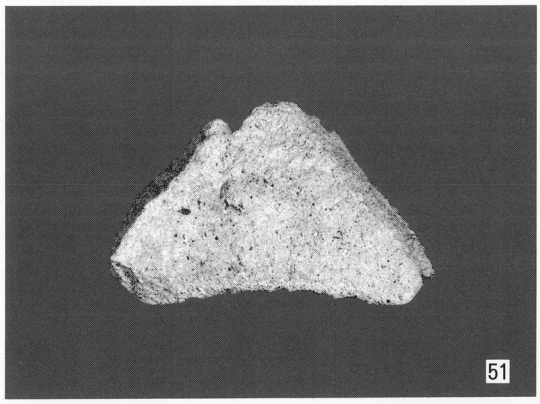


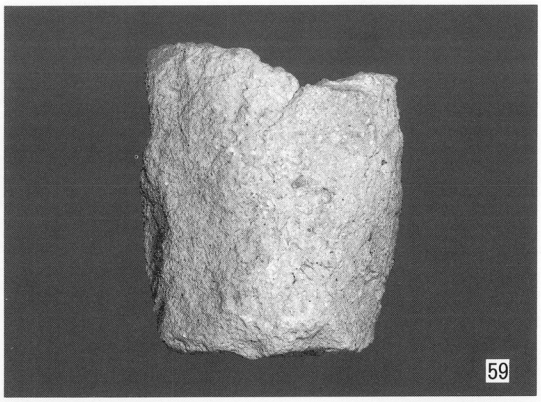


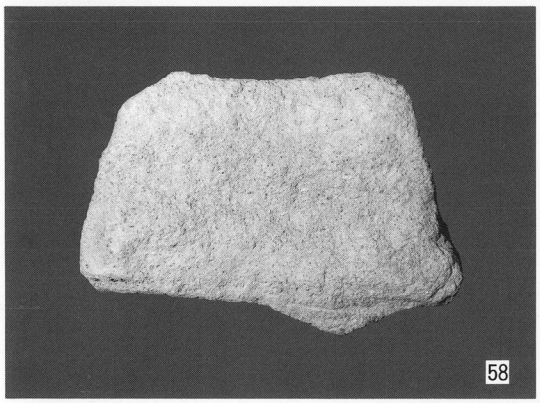


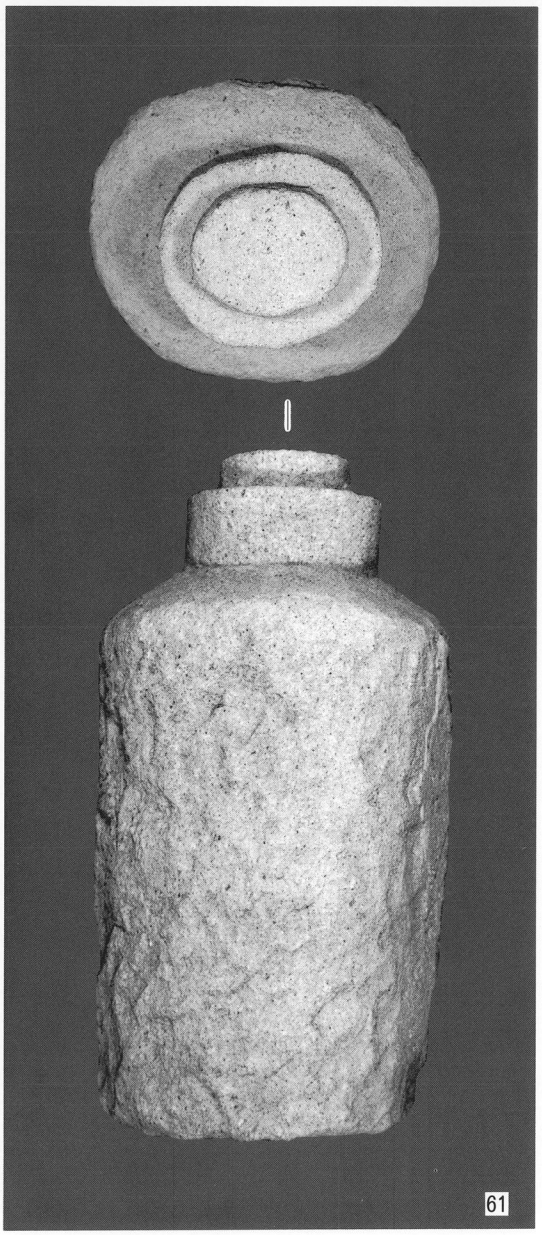


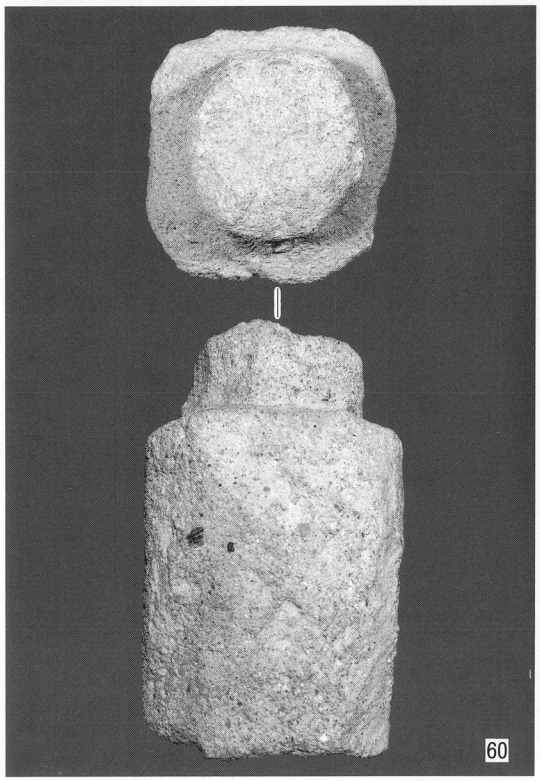
高山石切場遺跡西側出土（45・46・47・48・49・50）











高山石切場遺跡西側出土（51・58・59・60・61）

報告書抄録

ふりがな	たかやまかそうぼ・たかやまいしきりばいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	高山火葬墓・高山石切場遺跡発掘調査報告書
副書名	香芝市高山台土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	香芝市文化財調査報告書
シリーズ番号	1
編著者名	
編集機関	香芝市二上山博物館
所在地	〒639-02　奈良県香芝市藤山1丁目17－17　TEL　07457－7－1700
発行年月日	1994（平成6）年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
高山火葬墓	奈良県香芝市穴虫2,000番地外	292109	53	34度32分10秒	135度40分05秒	19930119～19930530	3,000㎡	土地区画整理事業に伴う事前調査
高山石切場遺跡	奈良県香芝市穴虫2,000番地外		133			19930119～19930724	800㎡	土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高山火葬墓	墳墓（火葬墓）	奈良時代	火葬墓外容器として木櫃を検出	須恵器・壷（骨蔵器）1点 土師器・有蓋壷（骨蔵器）1点 土師器（鍋・壷・蓋・小皿）5点 銭貨（和同開珎）31点 巡方（表金具）1点 丸鞆（表裏金具）1点 鉄片5点 木櫃片2点 用途不明木片1点	木櫃内に2点の骨蔵器と中央部の1ヵ所の計3ヵ所で2～3人の複数の火葬骨を納めた合葬墓。 被葬者が2人か3人か不明であるが、外容器の木櫃内に複数を埋葬した事例はなく、日本でも類例の少ない極めて貴重な火葬墓である。 火葬墓遺構は、その重要性から切り取り保存を行い、二上山博物館で公開することとなった。
高山石切場遺跡	生産遺跡（石切場）	鎌倉時代	凝灰岩の石切遺構	凝灰岩製の石塔（層塔・宝塔・五輪塔等）未製品30点 鉄斧1点 須恵器片1点 土師器片1点 瓦質土器1点 磁器1点	大半は中世の石塔を切り出した石切場と推定されるが、一部に中世以前に溯る可能性のある板状石材を採石した石切遺構が検出された。 一部の石塔については、切り出しから製作工程を復元するなど貴重な成果があった。

奈良県香芝市
高山火葬墓・高山石切場遺跡
香芝市文化財調査報告書１

初版 ： 平成６（1994）年
増刷 ： 平成12（2000）年

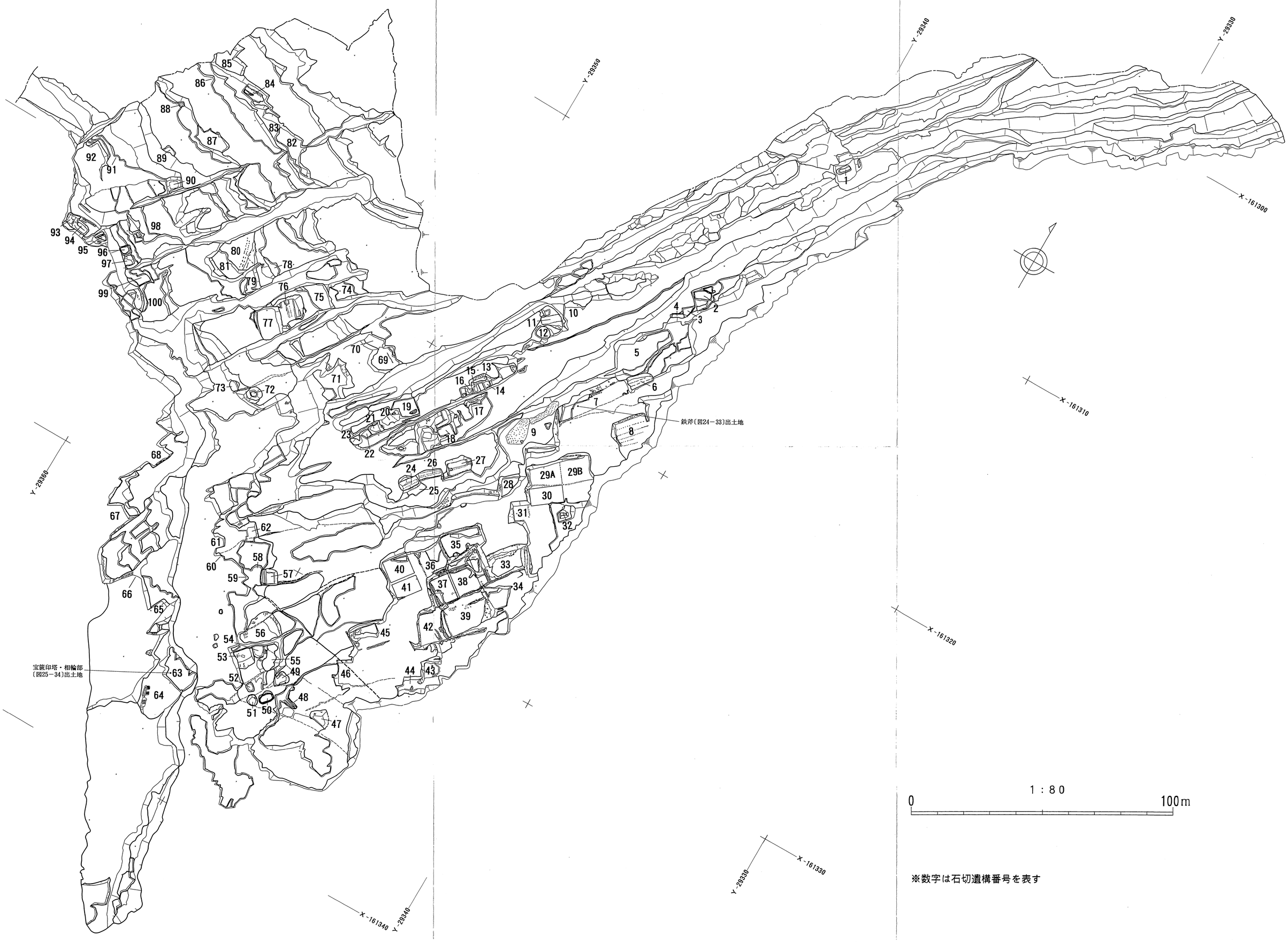
発 行 香 芝 市 教 育 委 員 会
奈良県香芝市本町１３９７番地

編 集 香 芝 市 二 上 山 博 物 館
奈良県香芝市藤山１丁目17－17

印 刷 明 新 印 刷 株 式 会 社
奈良市南京終町３丁目４６４番地

別添図1　高山石切場遺跡遺構平面図（全体図）

『高山火葬墓・高山石切場遺跡』香芝市文化財調査報告書1　1994年



1：80

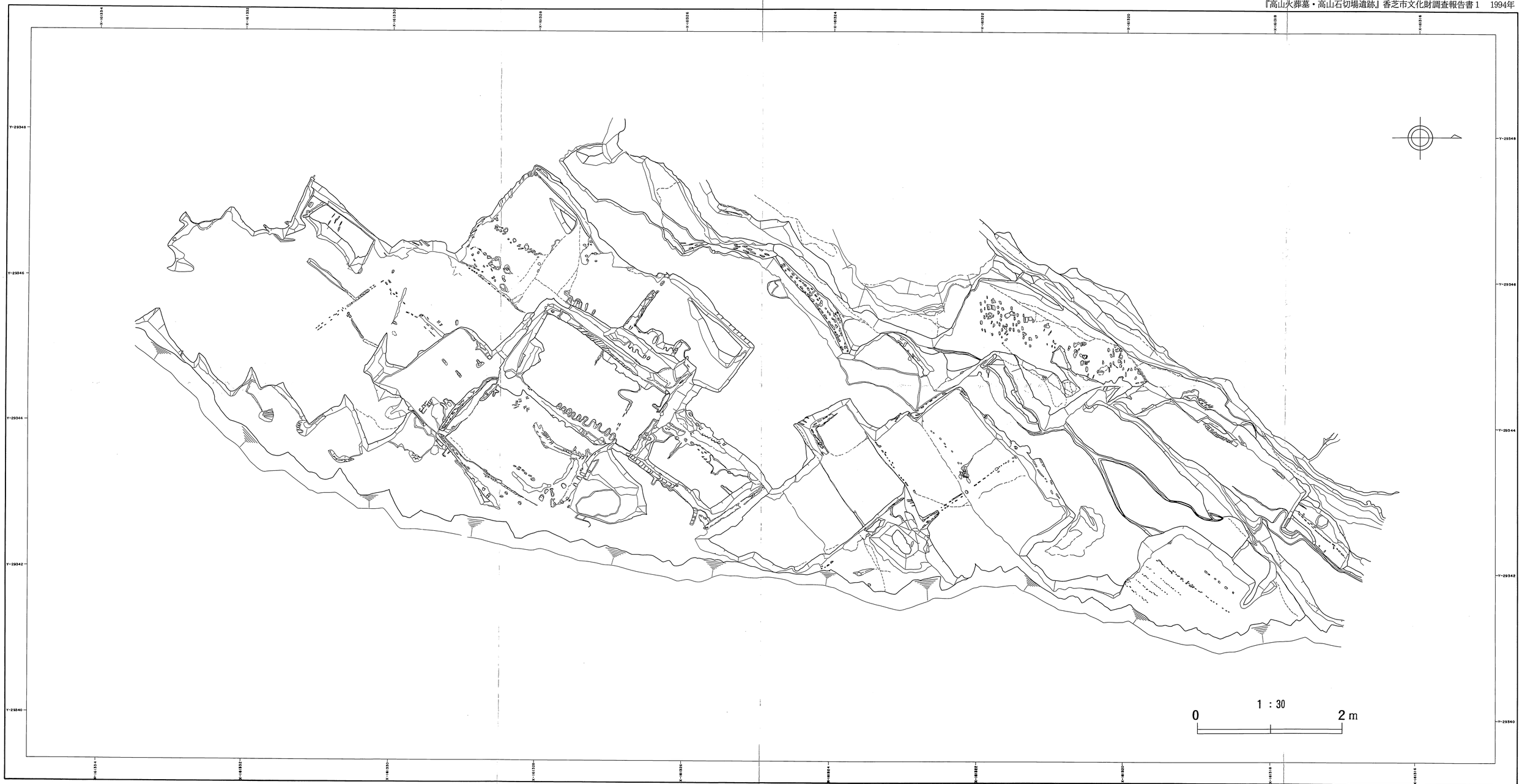
0　100m

※数字は石切遺構番号を表す

香芝市二上山博物館

別添図2　高山石切場遺跡遺構平面図（Aタイプ石切遺構集中箇所）

『高山火葬墓・高山石切場遺跡』香芝市文化財調査報告書1　1994年



香芝市二上山博物館